精神分析

第三巻　第六號

常態及び變態の性心理

昭和十年十一月・十二月

――裏面へ續く――

東京精神分析學研究所出版部

昭和十年十一月一日發行

★上圖　名映畫分析鑑賞と講演の會後記念撮映

（後列左から）中山正堂，石龜進，恒川賢，長田耕一，大崎信夫，皆川郁夫，森田泰一，石井正

（中列左から）辻修，福澤一郎，小杉長平，小松德，倉橋久雄，（フロイド像），千頭幹喜，

土屋喜一，高橋春子，福間光子，北垣照雄，塚崎茂明，

（前列左から）宮田齊，大槻岐美，長崎文治，小山良修，高橋鐵，大槻憲二，霜田靜志，

岩倉良子，岩倉具榮，富田義介，大久保眞太郎

★下圖　當日夜の大聽衆の一部

名映畫分析鑑賞と講演の會用ポスター原畫

——福澤一郎作——

大槻憲二著

精神分析概論

増補改訂第三版出づ!!　定價八十錢・送料六錢

本書の四大特色

一、現代日本人が讀者たることを忘れてゐないこと
二、斯學の組織的知識を與へること
三、實例はみなわが國のものを擧げて興味多く說けること
四、その理論的根據につき明快にして要を得やすいこと

(口繪二葉)　フロイド肖像及び筆蹟(共に著者に贈れるもの)

第一章　精神分析とは何か

(Ⅰ)無意識の發見。催眠術と精神分析(Ⅱ)夢の解釋。その方法と實例。典型的の夢。(Ⅲ)無意識と精神症、神經症。無意識の特徵。相反並存性とは。

第二章　精神分析の科學性

(Ⅰ)科學とは何か。(Ⅱ)種々な解釋の可能。(Ⅲ)解釋と認識。(Ⅳ)科學性の複雜。二者選一と無意識。(Ⅴ)重複決定。竹取物語分析。(Ⅵ)所謂科學者の偏見。

第三章　精神分析の機能

(Ⅰ)病的の心理。ナルチスムスとは。(Ⅱ)各種の理論。抑壓說。リビドー說。動力說。エディポス說。幼兒性感說。生死本能說。(Ⅲ)病氣の治療。分析と綜合。非醫者の分析。(Ⅲ)理論の應用。言語學的興味。文藝學的興味。源氏物語分析。

第四章　超心理學としての精神分析

三つの見地とその綜合。(Ⅰ)動的見地。(Ⅱ)局所的見地。(Ⅲ)經濟的見地。

第五章　精神分析の發達

(Ⅰ)シャルコー及びジャネー。(Ⅱ)フロイドの史的地位及び特徵。汎性慾說解嘲。(Ⅲ)ユング、アードラー、その他の分析學者の特徵。(Ⅲ)國際學會と研究機關。

第六章　精神分析研究手引

(Ⅰ)我が國に於ける研究史及び文獻。(Ⅱ)術語表解(索引。)

東京精神分析學研究所出版部
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

隔月刊雜誌
定價五十錢
送料二錢

半年一圓五十錢
一年三圓
送料ナシ

昭和九年九月　性慾心理研究號　第二卷第七號

東京精神分析學研究所出版部
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

本研究所關係者名簿（いろは順）

●印…客員
*印…特別誌友
△印…雜誌委員

印	所屬	氏名
△	東京濟生會法學士	岩倉具榮
*	東京澁谷區	岩倉良子
*	奈良縣	茨木基忠
*	大連	伊藤梅吉
*	京城帝大	伊東高麗夫
	東京本鄉區	伊東豐夫
*	東京日暮里	伊東八重子
*	東京淀橋區	入江敏夫
*	第一神戸中學校	池田多助
	新潟縣	磯野信司
	東京本鄉英語通信社	今井信之
	東京本鄉區	今福山江
●	人生創造社	石丸梧平
*	滿洲國吉林	石橋園穠
*	愛媛縣	石川學位
*	大阪北濱華陽堂病院	井尻辰之助
△	早稻田大學	長谷川誠也
●	東北帝大醫博	早坂長一郎
*	愛知縣	本田了惠
●	名古屋醫大醫學士	堀要
*	北海道函館	堀濱吉雄
	東京	朴永鎭
	東京日本橋	時平佐喜雄
	駒澤大學	富田義介
*	東京荒川區	遠山四郎
	滿洲國新京農學士	千葉廣洋
*	新嘉坡	林獨步
	京都、醫學士	和田節雄
*	南洋パラオ	横田仁治
●	警視廳技師醫學士	金子準二
	東京牛込	狩野儀三郎
●	東洋大學	高島平三郎
	東京下谷區	高橋鐵
	東京淺草區	高橋春子
*	西の宮市	田中雅子
*	大阪天王寺	田中金之祐
	東京杉並區	田內長太郎
*	宮崎縣	竹之下學山
	阿佐谷幼稚園	高崎能樹
*	東京本鄉區	高村光太郎
	本研究所內	高水力太郎
	慈惠醫大文學士	武田忠哉
	横濱鶴見	立川玄一郎
*	京都中京區	津田九郎
	山梨縣	辻修
●	廣島文理大文博	塚原政次
	東京牛込區	塚崎茂明
	東京神田區	土屋喜一

*北海道札幌 浪越春夫
*大連市 名越正
*京都府 中野正一
東京本郷區 中山太郎
*帝大在學 中村浩
*金澤市 南雲義男
△東京杉並區 長崎文治
*東京品川區 長松美代子
*福島縣 氏家滉二
●早稲田大學文學士 内田勇三郎
司法省 内山淑彦
*山形縣 梅木米吉
●東京能率研究所 上野陽一
*北海道小樽 井上千秋
*朝鮮群山府 井川徹二
東京麻布區 小野田幸雄
東京本郷區 小柳津邦太
成城學園前 奥村博史

*京都府舞鶴 奥本島田
*宇都宮市 奥貫芳雄
*横濱神奈川區 太田繁子
△本研究所内 大槻憲二
右同 大槻岐美
*奉天 大橋正二
東京杉並區 大久保眞太郎
*宇治山田市 大山浩
*東京荏原區 尾形孝治郎
●廣島文理大文博 久保良英
甲府母の友社 窪田甲子郎
*兵庫縣 久下貞夫
東京淀橋 倉橋久雄
*兵庫縣 黒田利一
精神分析學會 矢部八重吉
●東北帝大醫學士 山村道雄
*神戸精神衛生相談所 山田一郎
東京赤坂區 山本鎮雄

*京都左右區 米原浩
●東北帝大醫博 丸井清泰
*山形縣 松田啓治
*東京大塚 松平定光
東京麹町區 松居桃多郎
*佐世保 松尾乙三
●東京四谷區 慶大神經科教室
*東京本郷區 福間光
*獨立美術協會 福澤一郎
*札幌 福原久二郎
*福島縣 藤田由美
*東京麹町區 藤井和子
*東京中野區 藤木義輔
臺灣阿里山測候所 近藤石象
江戸橋病院醫博 小山良修
*長野縣 小林忠藏
東京麻布區 小林五郎
東京府砧村 小林正

東京板橋區　小松徳
*愛知縣　小松宗一郎
東京麻布區　小杉長平
●精神分析學診療所　醫博　古澤平作
長野縣　五味芳次
東京豐島區　江戸川亂歩
●東京、醫博　雨宮保衛
*神戸市須磨　麻生信道
*東京品川　齋藤長利
*奈良縣　佐藤政宕
*東京府　佐々木龍治
●東北帝大醫學士　木村廉吉
日語文化學校　北垣隆一
早大在學　北垣照雄
*京城府　三井慶次郎
●成女學校　宮田修
右同　宮田齊
*長野縣　三輪輔

*神戸市　三留顯介
英語通信社　皆川郁夫
*東京、醫學士　芝川又太郎
*栃木縣　島崎勝次郎
*沖繩　島袋常雄
●靜岡腦病院　醫博　式場隆三郎
*東京　清水桃子
トモヱ幼稚園　霜田靜志
*熊本五高　澁田見勝亮
大阪　廣井重一
*「雲雀」誌主幹　廣瀬操吉
*東京牛込　平野市郎
*横濱中區　平野良太郎
東京世田ケ谷　平野弘
早大演博内文學士　平塚義角
●東京、醫博　諸岡存
*朝鮮平安北道　森永醇
*東京府　森下雨村

*栃木縣　鈴木武四郎
*松江市　鈴木誠
●東京、醫博　鈴木雄平
*ハワイ　ドクトル　菅村芳弘
*東京淀橋區　須田勇
●名古屋醫大　醫博　杉田直樹

讀者諸氏はなるべく特別誌友又は研究會員となつて．我等の事業に直接參加せられむことを希ふ。その規定に就いては卷末の〔研究所事業案内〕を參照ありたし。

變態性慾論

諸岡存

天才と精神病者との限界がつけ難いやうに、變態性慾と正常性慾との區別は、仲々つけ難いものである。『變態性慾論』といふ課題に對しては、餘りに其の範圍が廣汎に亘り過ぎ、限りある紙數には盡し難いので、こゝには俗人にも膾炙さるゝ變態性慾の意義、卽ち正常性慾との區別に就て述べて見度いと思ふ。

一般自然科學、殊に進化論が普及し、更に精神分析學が發達して以來、正常性慾と變態性慾との區別は愈々判然しなくなつた。精神分析といふのは、精神病の症狀を心理的に解剖して、一般的に重要なる心理法則を發見する事から始つたのである。

吾人は在來、精神病理を、普通心理からして全然區別して取扱つてゐたものであるが、フロイドは大膽にも世人の最も遠慮してゐた、精神病者の色情方面に分析解剖の鋒を向けるに到つて、此處に始めて、所謂精神病者の心理機構も、一般普通の心理機構も同じ原則により支配されて居るものなる事を發見したのである。換言すれば、精神病的症狀も、正規の精神作用も、共に程度の問題で、根本の質の違つたものでない事が判つた譯である。

この原則が發見されて以來、又逆に普通の心理的原則を精神病者にも應用して、更にその病的心理の說明、特に神經病、精神病者の治療法に多大の貢獻をする事が出來るやうになつた。精神病の治療法とは、一種の敎育法に他ならない。今になつては、此事は、今日初めての發見ではなく、遠き古代より幾多の聖賢達が、旣に其全力を此の方面に

注いで居た事にも氣がついた。昔の宗教上の戒律や、聖賢の教訓等いふものも、つまりは精神病の豫防、或は其治療法に他ならなかつたのである。

此麼狀態であるから、變態心理、或は異常心理と稱してゐるものと、正規或は、常態心理との區別は、勿論判然と出來る筈がない事も判つたのである。

今、變態色慾の內容に立入つて見る。

慘虐性色慾には、能動及受身の二種あるが、これは、色情の亢奮に慘虐性が加つて居る事であつて、澳國維那の精神病學者クラフト・エビング敎授が初めて詳述した、最も著しき變態色慾の一つである。併し甚しく良風俗や、習慣を破り、又法律を犯す程度に迄進めば、それは勿論、變態性慾には違ひないが、それが未だ社會に害毒を流さぬ程度のものなる時は、それは正しく普通心理の一現象である事が判る。卽ち戀愛現象がある限り、他觀的には、苦痛と見える事も、當人同志には全く苦痛でない計りか、それは正しく戀愛特種の一現象で、只、それが社會の習慣風俗に叛くといふ程度に於て始めて變態といふ名を得る計りである。

戀愛に於て、慘虐といふ言葉は、或意味に於ては成り立たない。それは生理的、心理的に、亢奮の度が強くなれば苦痛の感は、全く痲痺して唯、一般性の快樂感のみが働くやうになる。換言すれば、平常苦痛と感ぜられる刺戟も、戀愛の當事者には悉く快樂感の刺戟と變るわけである。

次に重要なる變態症狀は露出症狀である。これにも能動的と受動的との兩面がある。前の場合と同樣、活動的の人物が能動的で、氣の弱いものが、受動的の形になる。一般には男性は能動で、女性は受身の形となるが、必ずしも然らずして、變態といふもののうちには、却つて反對の場合が多い。此の性質も前の所謂慘虐性のものと同樣に、如何なる男女に於ても、色情の亢奮を伴ふ際には、必ずその傾向がある。卽ち正規的のものである。

此麼場合、普通羞恥の念といふ反對の感情で制止されてゐる計りである。この羞恥の念も、其の心理的起源は頗る古いものらしい。此の感情は局所の保護の必要と、不潔感とから起つたものらしい。併し今日では却つてこれを逆用

して、色情の亢奮を目的に想像心を挑撥する爲に用ひられてゐる。だから、隱すといふことは只名ばかりになつた。そしてこれは衣服の發達に密接な關係があるのである。

衣服は防寒具としては輕い意味しかない。本來の目的は裝飾である。その働きは主に色情方面の道具に使はれてゐる。卽ち身體に密着せしめて、身體の形を其の儘現すとか、又は極薄い布地を用ひて、半ば隱見せしめるとか、或は又、或一部、例へば、脚部とか、衿元、胸等を特に注意を引くやうな色彩や裝飾を用ひてその部を强調するのが卽ちそれである。これ等は戀愛現象中で、所謂露出症狀といふものが、如何に强力であるかを現はすと共に、又吾人は如何にこれを利用してゐるか分る。此の露出症狀が又正規と異常との境は、前者と同樣はつきりしない。

或時代、又或場所では、甚しく之れを彈壓してゐる事もある。併しこれも、全くその時と場合による事で、或時は滑稽と感ぜられる事さへある位である。外人が最初日本の浴場を見て、日本の婦人は甚しく羞恥の念に缺けた蠻人だと報告した。併しこれは彼等の認識の不足から來てゐる。又、日本婦人が乳房を出して授乳するのを見て、これをも甚しく非難したが、それも眞の事情を知らなかつた事から來てゐる。歐羅巴人、殊に近來の歐洲人は、殆ど日本人からいへば羞恥に堪へぬやうな姿態を見せて居る。胸も腕も殆どまる出しの夜會服を着こんでいさゝかも恥としない。斯くの如く、時代と土地とにより、一定の習慣風俗があつて、それに從ふことにより、正規と變態とは分るゝに過ぎないのである。最近は東西洋の風俗が、急激に混雜して來て、人々の倫理道德の標準迄が、俄に變つて來て、其限界が判らなくなつた點も少くない。そこで折々問題が起る。

此他に、吾々は亦、所謂良習慣に反する心理傾向をもつてゐるものがある。それは雜婚の本能である。現在の社會では、一夫一婦は道德の基本要素の一になつてゐる。併し此制度は、或學者の說によれば、或種の産兒制限が行はれぬ限り、行はれるものでないといふ。産兒制限といふ事は一方又不道德とされてゐるから、此處に大きな矛盾が起る譯である。

戀愛は、男女兩人のみで、全く社會から個立して了へば、其の力が弱つて了ふものらしい。他人が之を認め、他人

に之を誇示する事によつて、其快感が亢まるものである。即ち戀愛は限定祕密のものでなく、不制限、露出的のものであるらしい。この本能が、やがては、一夫多妻、一妻多夫更に雜婚を造り出すものである。殊に同性愛といふものが盛んになれば、これがやがて其媒間體となつて、この種惡德が盛んに流行するやうになる。

次の實例は露出症狀を現した變態性慾の一例で、輕症のものであつて容易に治療し得可きものである。

或商家の新婚夫婦であるが、只二人の寢室に於て、他に人の氣配のない時は、彼女は絕對に不感性であるに拘らず、夜が明けて店員や小僧達が起き出し部屋の中ものぞかれる恐れがある位になれば急に色情が起つて性交の滿足が得らるゝのである。

夫は非常に困り、或醫者を訪うて、治療し得べきや否やをたづねた。『若し治り得るものならば治してやり度いが、若治らぬとすれば餘儀なく離緣する他はない』と訴へたのに對して、其醫師は、『これは恐らく治るまい』といつた事によつて、遂に離緣となつたのである。

これ等は精神分析の專門家、或は精神醫學の專門家に取つては、極めて輕い症狀であつて、少しく分析又は心理療法を加ふれば、容易に之を治し得可き性質のものである。

此の一例を見ても、世間で、如何に變態性慾を恐れ、且つこれを不治のものとして取扱つてゐるかゞわかるであらう。(完)

變態性慾と常態性慾

早坂長一郎

精神病の症狀に拒絶症といふのがある。之は何でもかんでも人の言ふことをきかないばかりか、こつちで言つたことの正反對のことをやる。例へば舌を出して御覽と言へば口を蔽ひ、出さなくともいゝと言へば出す。かういふ著明な場合は確かに病的現象と言つていゝが、拒絶症的な傾向、氣分といふものは誰でも持合せてゐる。殊に上役とか何々長とかいふやうな地位の人になると一般にこの傾向が著しくなるやうで、何か賴まれても一應拒絶しなければおさまらないやうな人がチョイチョイある。かやうに觀て來ると、病的現象たる拒絶症と言ひ、常態に見られる拒絶症的傾向と言ひ、その差は程度の差に過ぎない。同樣のことは、精神病者の示すあらゆる症狀に就いて言ひ得ることと思ふ。我々だつて怒りたいこともあるし、躁ぎたいこともあるし、泣きたいこともある。たゞその强さと持續とが病者の彼等の場合と異ふのである。今しばらく、性慾に就いて同樣な關係を觀て行きたいと思ふ。

× × ×

私が中學生の時であつた。縣社のお祭りで參拜に連れて行かれた時、やはり參拜に來た女學生の一團を前にして一人の男が盛に陰部を露出してはゲラ〳〵笑つてゐるのを見たことがあつた。――今にして憶へば、この男の頭の形、服裝、態度等から判斷して、此奴は白癡だつたらしい。――が、白晝大衆の面前をも憚らざる此の男の行爲は明かに常規を逸して居り、もし彼がこの行爲に無上の愉悅を感ずるものとしたら、彼の性心理は變態であると烙印していゝ

味を覺えるといふ、性本能の一つの現れである。湯屋のぞき、便所のぞき等がそれである。偖之等の露出症といひ、竊視症といひ、その傾向は常人の性心理の中にも含まれてゐるものである。それを示す事實は、我々の近邊に多々ある。時折誌上に現れることであるが、寢室の照明を變へることによつて夫の放蕩を止めさせた話などはこの間の消息を語つて餘りあるものだらう。或は腹掛にも均しい若い女の海水浴着、腕も露はな洋装や何もかも透いて見えるやうな薄い着物の流行なども、着る人と見る人との興味が一致するものがあるからである。レヴィウの繁昌もこの類である。彫刻の展覽會に初めて行つた人は裸體像の林立に一驚するであらうが、之も製作者と鑑賞家との——如何に彼等が辯解しようとも——前と同じやうな心理の產物である。繪にしても小説にしても、同様な場合が多い。尙、女陰は邪視を除けるものだとの迷信があるが、この迷信の起源を考へてみると、いかに強く竊視慾が常人の心にも祕められてゐるかゞ窺はれる。

×　　×　　×

サヂスムス（加虐淫亂症）とマゾヒスムス（被虐淫亂症）とに就いても同様な關係が見られる。前者は性的對象を虐げることによつて、又後者は虐待を受けることによつて性的興奮を覺え或は增すものであるが、虐待の程度は樣々で、甚だしい場合には身體の一部を斬り膚を烙き血の出るまでも鞭つといふやうな殘忍極まることを相手に加へ、或は相手から加へられなければおさまらないものもある。性的犯罪として屢々問題となる「娘斬り」（盛装の婦人に劇藥を振りかけるのもこの變種である）、「髢切り」、强姦、姦通等にも多分に加虐性が加味されてゐる。しかし何と言つても加虐症の最なるものは淫殺であらう。之は姦淫しつゝ殺害する場合あり、姦淫後に殺害する場合あり、更に殺害後内臟をとり出して弄び、或は之を食ふ場合もある。何れも性慾の滿足に止めを刺さうとして行はれるものである。之等は稀有な場合であらうが、日常新聞紙の三面記事を賑はす情死も、場合によつては加虐症と被虐症との極致である。

サヂスムスとマゾヒスムスとに就いても我々は常態と病態との境界線をハッキリと引く標準を知らぬ。愛咬といふのがある。可愛さの餘り咬みつくといふのである。食ひつきたいやうな衝動に驅られる可愛さは赤ン坊などに對して我々の日常經驗する所であるが、愛人同志の間などでは屢々この衝動が實行にまで發展する。抓る、叩く、引つ搔くも同樣である。身體の重みで壓へつけられることは普通不快を感ずることであるが、同じ動作が逆な效果を現す場合があることに就いては喋々する必要はあるまい。身體の一部を損傷されることを快しとする場合が生理的にも在る。それに就いては今詳しく書く自由を有たぬ。拳鬪のファンに女性が多い理由も、サヂスムスが汎く常態心理中に喰ひ入つてゐると考へればわけなく理解されることである。尤もこの場合には窃視症的要素も混合してゐるが。身體上の苦痛ではなく心理的な苦痛を與へて(或は受けて)悅ぶ例は枚擧する遑が無い。「嬲る」或は「からかふ」といふ言葉がそれを代表する。この「嬲る」といふ文字が現してゐる如く、一般に加虐性は男性に、被虐性は女性に特別な親和力があるやうに見える。

× × ×

次にとり上げてみたいのはフェチシスムス(節片淫亂症)である。之は異性の身體の一部或は身邊にある物品に對して起る性慾である。毛髮、乳房、腰、足等に對する場合は前者の側であり、異性の衣類、飾り物等に心惹かれるのは後者の例である。婦人の下着類を集めてその中で自慰に耽る癡漢の如き、異性の足その他の部位に觸り匂を嗅ぎ、はては之に接吻するが如き(その甚だしい場合にフェラチオがある)は病的節片淫亂症に算ふべきであらうが、好きな役者の紋のついたものを肌身離さず持つてるが如き、長襦袢の模樣によつて性慾を左右さるゝが如き、愛人の唇や肌に觸れて快しと感ずるが如きは常態性慾中に含まれるものである。尙、こゝで附け加へておきたいのは、病的節片淫亂症の變型として、異性の分泌物や排泄物に特別な性慾をそゝられる場合(不淨物淫亂症)である。その甚だしいものに至つては之を愛撫し、口にさへする。それから屍體を性行爲の對象に擇ぶもの(屍姦)、動物を擇ぶもの(獸姦)、偶像や寫眞を對象にとるもの(偶像姦)等も節片淫亂症の類に入れてもいゝだらう。之等の變型的節片淫亂症

と同一の衝動と考へられるものは常態性慾に於いても見られる。閨房に於ける正常的不淨症のことはしばらくおき、愛人の寫眞に口づけし、肖像に見惚れることは病的とは言はれまい。牡犬を可愛がる未亡人も、單に可愛がるだけである間は正常である。

× × ×

變態性慾として屢々問題になるのは同性愛である。その甚だしい場合には、例へば身體だけ男性で心理的には全くの女性で、男性の裸體に見惚れたり、ひそかに愛してゐる男性に近寄る女性に對して嫉妬したり、更に進んでは種々の器具を用ひ、或はその他の方法に於いて異性間に於けると同樣の行爲をする。その行爲も亦變態、常態、種々樣々で、こゝに二重三重の變態性慾が生れる。例によつて常態の範圍内に於ける同性愛の例を拾つてみると、女學生間に流行する艶色めいた手紙の交換の如き、同性のスターのブロマイド蒐集の如き、仲よしの友人が同じ柄の着物を着、或は腕組みや肩掛けをして歩いて得々たるが如きは日常見られる同性愛的現れである。醉ふと同性の者にしなだれる男は、ふだんは同性愛が祕されてゐるに過ぎないことを現す例である。尙、過去の青春時代を振り返つてみて同性の美しい友人に戀心を覺えたといふが如き記憶を有つ人は少くないだらう。同性愛は、性心理が異性愛にまで發達する途上の、異性愛に最も近い階梯であり、又異性愛が滿足を阻まれた時の、最初に現れるべき對象愛である。

同性愛のやうに問題にはならないが、こゝで附け加へておきたいのは自己愛である。自己愛、換言すれば自惚れであるが、こゝでいふ自惚れは自負心といふやうな意味よりは、文字通りの、自分に惚れこむことをいふ。(自負心と自惚れとは同一根源を有つものであるが。)偖、「自惚れとカサ氣の無い者はない」と言はれる程自惚れは常態に存するものであるが、この自惚れを自負心といふ意味でなく解釋してみても汎く見られることだと思ふ。どんなニキビ面でも鏡をみては「ニキビとニキビの間にある膚が綺麗だ」位に考へてニヤリとするだらう。この自己愛が亢じて病的となると、終日鏡に向つて自分の顏や姿に見惚れてゐるとか、鏡の像や自分の寫眞や肖像に接吻するとか、或は他の變態性慾、例へば節片淫亂症、被虐症、露出症等が加はる場合もある。それらと常態に見られる自惚れまでの間には

勿論種々の移行型があるわけである。自己愛は幼時、未だ自己以外の對象を知らぬ時代には誰もが經過する時期の性慾である。

×　　　×　　　×

以上數例を擧げて常態性慾と變態性慾との間にはハツキリした境界線を劃すことができないことを明かにしたが、こゝで改めて然らば常態性慾とは何かといふことを考へてみよう。常態性慾と變態性慾との境がハツキリしないといふことは、換言すれば變態性慾の輕度のものは常態性慾中にとり込まれてゐるといふことである。謂はゞ常態性慾は變態性慾の綜合體で、變態性慾は常態性慾の一要素を誇張しグロテスク化したものであると考へることができる。常態性慾を變態性慾から分つ手がかりは、前者は性交を最終の性行爲とし、それによつて得らるゝ感覺を最終の快感とする點にある、變態性慾に於いて得られる快感は、常態性慾に於いては前快感として、又變態性慾的行爲は、常態性慾に於いては準備的行爲として最終的快感竝に行爲に仕へるに過ぎない。性慾の對象を異常とする變態性慾(同性愛、自己愛)は性心理發達途上の或階梯を現すものとして意味がある。約言すれば、行爲の上に於ける變態性慾と常態性慾との關係は、準備行爲乃至前快感と、最終的行爲乃至最終快感との關係、即ち時間的前後關係であり、對象の上に於ける變態、常態の關係は時代的前後關係である。(尤も行爲の上に於ける時間的前後關係も或種の變態性慾に於いては時代的前後關係として說明される。しかしまだ全部に就いては不完全にしか解つてゐないから、詳細は他日を期したい。

附記　最初の豫定では先づ變態性慾と常態性慾とは明かに區別され得ないことを書き、次いで色々の變態性慾を整理し或體系にまとめあげてみたい(その規準は精神分析學で言はれてゐることに些か私見を加へて)つもりであつたが、種々の都合で豫定の前半しか果し得なかつたことは遺憾に思つて居る。全文中所々に第一のテーマに副はないやうな所が出て來るのは第二テーマの爲の用意のつもりであつたが、それが果されないでみると些か支離滅裂の感がするのと、それから結論の所が山から山へと跳んだ感がするとの辯解を一言附記する次第である。

分析學から見た變態性慾心理

大槻憲二

一、性心理に於ける常態と變態

精神分析學は現象として變態性慾心理を認めるが、常態變態の心理の本質的差違を認めないのである。それは正氣の者と狂人との本質的區別を斯學が認めないのと同じである。斯學は、從前屢々誤解せられたやうに、變態性慾學でもなければ、變態心理學でもなく、常態心理學（たゞその深部を取扱ふところ）のである以上當然である。たゞ常態と變態とは本質的に區別あるものであると常識的に獨斷的に定めてかゝつてゐた從前の心理學や病理學から見て、精神分析學が變態性の研究に於いて鋭いがために、肆意的に斯學を變態心理學と認めてその範疇内に入れたことは、或る意味で自然なことではあつた。

斯學はかくて、ナルチスムスが、露出慾が、加虐性が、被虐性が、單に變態心理者に於いて存するのみならず、常態者に於いても、たゞそのあまりに顯著ならざる、もしくは昇華せられた形に於いて、嚴存してゐることを認識したのであつた。從つて、從前變態者の變態行動を記述するに用ゐられたこれ等諸概念の内容は、著しく擴大せられることゝなつたことは、本誌讀者諸氏の既に十分に了解してゐられることゝ信ずる。

では、現象としての變態性心理は如何にして生ずるかと云ふに、それは患者の心理發達の過程に於ける何等かの定

着、又は自我發達途上に於ける障害に依つて決定せられるのである。故に結局、常態變態の別を決定するものは自我の健不健である。從つて兩者の別は、本質的にはたゞ相對的に過ぎないと云ふことになる。もし素質と云ふことがそこに働くとすれば、それはその素質を遺傳せしめた祖先の定着又は障害に溯らねばならない問題であらうと思ふ。從來の精神病學はあまりに屢々難問を素質に歸することに依つて、その解決の責任を回避しはしなかつたか。

精神分析に依る變態性心理の研究は大體二つの方面から試みられる。即ち、對象（相手）に即しての變態と、目的（仕方）に即しての變態とである。

二、對象に即しての變態

私は本誌前々號に於いて同性愛の話をしたが、これは實は變態性慾の一種として語るべき題目であつた。さうして所謂同性愛とは對象に即しての變態の一種である。では、對象に即しての變態とはどう云ふのか。それは同類異性者以外の對象を求めるものである。即ち、（一）男にして男を、女にして女を、（二）人間にして獸類を、（三）大人にして小兒を、（四）人間にして偶像を……と云ふ風である。これ等四種の各々に就いて多少の説明を加へて見よう。

（一）同性愛者——これに就いては既に前々號に於いて詳しく説いたから、こゝには反覆しない。も一度同論文を參照せられたい。

（二）童姦症者——同性愛は、その他の點では多分常態的の人で、さう云ふ人々は澤山にあるやうであるが、性的未熟者（小兒）を性對象として選ぶものは始めから稀な異常であるやうに思はれる。小兒のみが專ら性對象とせられるのは、たゞ例外的な場合で、多くは他の對象の間に混用せられるのが普通であるやうだ。小兒をこのやうな役割に引入れるのは、性的に萎微した、不能の個人がこのやうな代償を必要とするためであつて、或はまた衝動的な、差し迫つた慾望があるのに、さし當り正當の對象を持ち得ない場合である。

から云ふ童姦症の例證としては、ロシアの文豪ドストイェフスキーの『スタヴロギンの告白』と云ふのがある。性

的未熟の少女を姦する精刻な話である。いつか私が本誌で、『思春期以前の性感』の話をした時に擧げた實例の如きも、この傾向のあるものである。即ち、或る男が女房の先夫と喧嘩してゐる時に、女房が來て二人の間に割込み、當然現在の夫たる自分の方に加擔してくれるものと思つてゐたところ、意外にも先夫の方に加擔したので、男は赫となり、男よりも女の方を殺して了つた。さうして入獄したが、それ以來、出獄後も成人の女には興味を持たず、性的未熟者に興味を持ち、定子と云ふ少女を變態的に可愛がるので少女の父親が怒り出し、家へ出入を禁じたところ、遂に定子を誘拐したと云ふ話である。この男は大人の女に失望したから少女を可愛がると云つてゐるが、分析的に觀察すると、これは多分逆であるやうだ。元來、性的能力が微弱で一人前の女とは太刀打ちが出來ないから、少女を相手にしたいと始めから考へてゐたのであらうと思はれる。それ故に女房からも既に性的に愛想をつかされてゐたのであらう。女房は先夫の方がまだましだから復りたいと平生から考へてゐたのかも知れない。二人の男の喧嘩に先夫の味方をした心理的動機は、その邊にあるのであらう。男の方でもそれを本能的に直觀してゐるからこそ、憎惡が男へよりは女の方に向つて行つたのだらうと察せられる。

これに就いて想起するのは、大正十年頃の或る心理學の雜誌の卷頭にかう云ふ記事のあつたことだ。『最近某紙の記事によると、或る三十歳の青年は「近頃のやうな女性解放の、女權擴張のと七面倒臭い、女性美をなくしたやうな女は、我々無產者の女房にはとてもならぬ。理想の妻は自分で養成するに如くはない」といふ見解から、七歳の少女を貰つて養つてゐるといふことである。面白いことだ。…』と同誌記者は非常に感心してゐるやうだが、こんな事に感心ばかりしてゐるやうでは變態性慾に關する心理學者としては困つたものだ。こんな云ひ草は、勿論、口實であつて、本心は大人の女には太刀打ちが出來ないから性的未熟者に遁れてゐるに過ぎないのだ。現に『我々無產者の…』とひがんだ（劣等感）やうなことを云つてゐる。これも分析すれば、多分『我々性的不能者の…』と云ふべきところを、その代償的表現であらう。何となれば、如何なる無產者でも、大人の女を女房にしてゐる男はいくらでもゐるからだ。何でも、極端であつたり、奇拔であつたり、辻褄が合はなかつたり（この場合、無產と云ふことと大人の女

と結婚出來ないことゝ何の關係があらう）するのは、何か變態的な根據が無意識裡にあるのではなからうかと疑つてかゝらなければならない。その口實が不自然に堂々としてゐたり、立派であつたり、華々しかつたりすればするほど、怪しいのである。それは他人を欺くためばかりではない、自分自身を欺くためにも、さうする必要があるからなのだ。さう考へる（妄信する）ことに依つて始めて彼等はその劣等感（性的不能者としての）を自他に胡麻化して、自分の儚い優越感（ナルチスムス）を支持してゐるのだからだ。

（三）獸姦症――獸物類を性的相手とすることは農民の間に稀でないと、フロイドは云つてゐるが、それは特に性の相手に事缺いた場合ばかりではなく、事缺かなくとも本來的に獸類を好む變態者もあるらしいのである。神話傳説の中に獸類と結婚したと云ふ話は隨分ある。（例へば、古事記に出てゐる三輪山傳説――活玉依姫と蛇との結婚――の話の如き、或は信太の葛の葉――和泉の信太の森の狐――物語の如き）その起源に就いてはなほ確實なことは私にも分らないが、人間の獸姦症的傾向と何かの關係が全然ないとは云ひ去れないであらう。古代人、野蠻人は「族靈」（トーテム）として卽ち祖先として獸類を崇拜し、而も年に一度その崇拜する動物を殺して喰つたものであるが、この族靈への風習も變態性慾者の獸姦的傾向と何かの關係がないとも云ひ去れない。併しこのやうな方面の事は學者の間にも、まだ甚だ疑問に滿ち充ちてゐるのである。

（四）偶像姦――人形又は偶像を性對象とするものであつて、時には人形さへあれば澤山で、生きた人間は要らないと云ふ變りものも、實際讀者諸氏の身邊知人の範圍內に一人や二人は存在してゐることであらう。現に筆者の間接的には知つてゐる或る藝術家は、人形との結婚式に親戚知人を招いて盛んな宴を張つたと云ふ事實がある。その藝術家は非常に品行方正であつて、決して女子を顧るやうなことはない。あまりに品行方正に過ぎる人はあまりに品行不方正なる人と共に屢々變態である。

江戸川亂步の小說にも『人でなしの戀』とい云ふのがあつて、やはり人間よりも人形の方が性的に好きと云ふ男の心理を描いてゐる。（作者自身が既にさう云ふ傾向の、自分にあることを告白してゐる。）主人公門野は自分の變態を

持てあまし、眞人間に返る努力のために、とにかく人間の女と結婚して見るのである。半年間ほどその苦鬪は續けられたが、結局無駄であつた。夜半、雪洞を點じては藏の中の人形に會ひに行き、何喰はぬ顏をして歸つて來るのであつた。あまり度重なるので、妻は嫉妬のあまりその人形を、夫の知らぬ間に寸斷寸斷に毀して了つた。夫は絶望のあまり、その人形の破片を抱いて自殺して了ふと云ふのが、その荒筋である。

佛像や聖像に對してさへ淫がましい行動をする坊さんたちがあると云ふことである。實際、美しい佛像——例へばかの有名な淨瑠璃寺の吉祥天女の像の如き——に對しては、常人とても一種の感情が起きるのを如何ともすることが出來ない（作者や註文者にそのやうな製作動機のあつたことは疑ふ餘地がない。）況んや、元來少しく變態的な人が、誤つて聖徒として（變態なるが故に聖徒の道に入ると云ふことも屢々あり得る。）の修業道に入つて、魅惑的な像を見たとしたならば、どんな誘惑を感ずるか、知れたものではない。

佛像、聖像すでに然り、況んや百貨店飾窓のマネキン人形をや——。あれ等に對して怪しい行動に出づる變態者もなかなか少くないと云ふ話である。

人形師左甚五郎が自作の人形に息を吹込んで、これを人間と化したと云ふ傳說は誰しも知つてゐることであるが、これと殆ど同じ趣向の『ピグマリオン』物語が西洋にも存在してゐることは、私嘗て本誌（昭和九年三月、「傳說研究號」五二頁）上で論じたことであつた。これら二つの傳說に於ける相違は、前者に於いては人形師の技術の優秀なるがために動き出した（人間化した）と云ふに對し、後者に於いては人形師がその愛する作を神に祈願して人間化して貰ふと云ふ點にある。これ等二種傳說の心理機制を分析的に觀察するならば、前者の方が抑壓昇華の度が甚だしく、後者の方が性的素地を露出せしめてゐる。後者に於いては、その人形化の動機（願望）が人形師自身にあるに對し、前者に於いては、その動機は人形師の如何なる種類の願望（從つて責任）からも獨立してゐる。併し、如何に優秀な技術と雖も、人間の手を以て生きものを作ることは絶對に出來ない。古代人と雖もそれは十分に承知してゐたであらう。人間の作つたもので生きてゐるものは、たゞその人間が性行動に依つて作つた人形の如き人間（子供）のみである。

殊にこの場合、問題の人形は女性であつて、人形師が男性であると云ふ點に注意を怠つてはならないと思ふ。その關係に父娘間の關係を認識することは許されると思ふ。

またも一つ、分析的解釋から云ふならば、人形を人間化することの願望は、人間を人形化することの願望の逆の表現形式であるとも云へるのである。少くとも人間の空想は屢々さう云ふ機制をとつて表はれるものである。即ちこの場合では、娘を人形化（沒性化）して空想することである。

故にこの傳說への分析的解釋は二つの面を有する。一つは、父娘間の近親愛願望の空想滿足（ピグマリオンの場合）並びに禁斷（左甚五郎の場合）と、他は純粹の偶像姦とである。併し偶像姦願望の中には、親近愛願望の空想と禁制とが含まれてゐると思はれるから、結局これ等兩者は同一のものと視られ得るであらう。

偶像姦に關しては、併し、人形愛玩の心理一般の研究から、なほもつと複雜な心理機制が認められるが、こゝでは敢へて深く立入らず、他日を期することにしておく。

三、目的に卽しての變態

變態でなく常態の性交の仕方とは、異性同志が相互に性器を結合させ、それに依つて性的緊張を解放させることである。ところが性器と性器とを結合させないで、別のところを結合させたり、性的緊張を解放させないで、たゞ緊張だけで滿足したり、或は性器と性器との結合以外の方法で緊張の解放がなされたり（所謂早漏）する如き、さう云ふのを變態と呼ぶのである。で、仕方に卽しての變態にも（甲）肉體個所の錯誤としての變態と、（乙）行爲の途中で滿足して了ふ變態と、二種類あるわけである。で、この二種に就いて少し說明を加へて見よう。

（甲）　動物の性慾と人間の性慾とを比較して見て違つてゐる點は、動物の性慾は相手の性器だけを目的とし、また性的亢奮のない時には冷淡になるが、人間は相手の性器のみでなく、他の部分、否、相手の全身を、否相手の精神全體をも愛すると云ふ點と、性的亢奮のない時でも相手を愛し得る（尤も性的亢奮のない時には相手に全く冷淡である

には存在するのである。

と云ふ人も確に存在してはゐるが）と云ふ點とである。併しそのために却つて、動物には見られない變態性慾が人間

肉體個所の錯誤としての變態の內、最も普通なのは接吻である。接吻や握手は一般には變態と見做されてはゐないが、最も廣い意味では變態と云はれないこともない。併し口唇を以て相手の×器を×ひ、或は×る場合には明かに變態と見なされる。併し最も狹い意味では、これとても變態の內には入らないのである。何となれば、あらゆる意味で健康な人でも、かゝる行動をなすことがあるし、また行動への傾向や願望を必ず有つてゐるからである。口唇の粘膜が性的亢奮の刺戟となるのは、既に乳兒時代に於いて母の乳房を吸つてゐたことに依つて定着してゐるからであることが明かにされてゐる。

口唇の次に、最も多く性的に使用せられる肉體的個所は肛門であるが、口唇の性的使用が嫌惡せられる以上に、肛門の性的使用は嫌惡せられる。併しこの嫌惡の理由として、肛門が嫌惡すべき糞便の排泄口であるからと云ふのは、意識面からの理屈付けであつて、無意識面からはまた別の理由があるのである。現に或る種のヒステリー少女たちは、男性器が排尿の具であるが故に穢はしいとて、性交を厭ふのであるが、これは意識面からの理屈付けであつた。無意識面には性交それ自身を厭ふ傾向が存在してゐるのである。

口唇や肛門ばかりでなく、一切の身體的個所が性的亢奮の座となると共に、性的愛玩の材料となる。例へば乳房は勿論のこと、脚、髮、鼻、顎、耳、手、指、眼、臀など。それから更に轉じて、相手の身體に接觸してゐた衣服、手巾、腰卷、髮飾、靴から、洟紙や、糞便用紙の類にまで及ぶ。歌右衛門や梅幸の若い時分には、路傍に捨てたその洟紙まで拾はれて困つたと云ふ事である。牡丹刷毛を貰ひたがるものに至つては、數知れなかつたと云ふ。さもあるべきことである。これ等は、崇物症とか性的愛玩慾（原語ではフェティシズム）と云ふ名稱で呼ばれてゐるが、さきに述べた偶像姦の如きもまた、「仕方」の方面から見れば、一種の性的愛玩症の內に入れらるべきものであらう。

糞便愛玩の好例として、芥川龍之介の小說『好色』がある。これは『宇治拾遺物語』や『今昔物語』に出てゐる話

を、作者が多少潤色したものである。平中と云ふ色好みの男が本院の侍從（女性である）に惚れてゐるが、なか〳〵思ひが協はぬまゝに、侍從の不淨を棄てるために筐に入れて運んで行く童女の手からその筐を奪ひ、その淺間しい匂ひを嗅げば愛想もつきて自分の悩みも薄らぐであらうとそれを決行して見たが、却つてそれがえならぬ匂ひに思へて遂にそれを喰つて恍惚境に入ると云ふ性心理を描いたものである。

平中は、今つまみ上げた二寸ほどの物を嚙みしめて見た。すると、齒に透るほどの苦味の交つた甘さがある。その上、彼の口の中には、忽ち橘の花よりも凉しい、微妙な匂ひが一杯になつた。

「侍從、お前は平中を殺したぞ！」

平中はかう呻きながら、床の上へ佛倒しに倒れた。その半死の瞳の中には、紫摩金の圓光に取りまかれたまゝ嫣然と彼にほゝ笑みかけた侍從の姿を思ひ浮べながら……。

作者は大體このやうに、この場面を描いてゐる。こんなことは、實際にはあり得ないやうに健康な常態人は思ふかも知れないが、必ずしもさうでない。變態者は多くはこの傾向を有してゐる。性慾學でこれを嗜糞症と名付けてゐる。常態人と雖も、その精神が幼兒期に退行した場合にな、みなこの傾向を示す。幼兒にはみな、嗜糞、弄糞の傾向がある。平中は慥に、侍從への惚れ込みの心的狀態の內に、幼兒的性生活へ少くとも一時的に退行し、糞便への鑑賞能力を回復したのである。

平中が侍從の不淨を嚙みしめた時、幼兒として母親の乳房に喰ひ付いた時の歡喜が、無意識の內に復活してゐなかつたとは云へない。紫摩金の圓光の內から嫣然と微笑みかけた戀人の面差しの中に、幼時乳房に吸付きながら仰ぎ見た母親の面影が浮び出てゐなかつたとは云へない。丁度、ジョコンダの謎の樣な微笑の中に、作者ダギンチの幼時の記憶が無意識的に表現されてゐる（このことに就いては、フロイドが『レオナルド・ダ・ギンチの幼兒期記憶』の中で誠に行屆いた證明をしてゐる）のと同じやうに……。

不淨を嚙みしめることに依つて、性器に依る性慾滿足と同じほどの亢奮と恍惚とに陷るとは、如何にもナンセンシ

カルな、グロテスクな話であるが、併し何人でもこの傾向を持つてゐるのだ。何となれば、これは幼兒的な傾向で、而も何人もが多少の幼兒性を保存してゐるからである。たゞ自我の發達に依つてその傾向を統制してゐるので、外面に現れないだけである。一度、自我の働きが鈍り、精神が幼兒期へと退行するならば、殆ど何人もがこの傾向を示さないとは云へないのである。

以上で、「仕方に卽しての變態」に就いての論を終つておく。次に第二の「行爲の途中で滿足して了ふ變態」の內、第一の「肉體個所の錯誤としての變態」に就いて論ずることにする。

（乙）行爲の途中で滿足して了ふ變態とは、換言すれば豫備快感の定着に由る變態である。更に別言すれば、部分本能的、性器以外の性帶域的滿足である。或は幼兒的、多樣倒錯的滿足であると云つてもいゝのである。その各種を個條別に說明するであらう。

一、接　觸――

これには握手、接吻、抱擁、愛撫などがある。愛撫は身體、皮膚、頭髮、衣服、持物などに及んでフェチシズムと隣接交涉を持つに至る。接吻の變移したものとしては、吸莖、乳房その他身體の種々な部分に吸付くことがある。內には接吻のみで射精するものがある。常態者と雖も、長期間の禁慾の後には、屢々さう云ふ現象を示す場合がある。

二、熟　視――

熟視は接觸から出づとフロイドは云つてゐるが、接觸の前提となるばかりでなく後提（接吻記憶の復活に由る亢奮）となる場合もある。視覺的印象に依るリビトーの亢奮である。小說家牧逸馬は「視姦」と云ふ語を用ゐてゐたが、これは銳い用語である。見ることのサディズムと視られることのマゾヒズムとである。これに聯關しては所謂「凶眼」の現象もある。

衣裳發生の心理にも、この熟視の心理が直接間接關係するところが大きいとされてゐる。露出慾と窃視慾との相互關係に依る抑壓並びに昇華が、そこに與つてゐる。勿論他方に、その保溫のための生理的契機を否定するものではな

い。衣裳心理はなほ他に甚だ複雜な要素を帶びてゐるから、獨立研究の必要あるであらう。

これが變態となる場合は三つであるとせられてゐる。(a)他の部分はさておき、專ら性器をのみ視んとする場合。(b)嫌惡の感を克服しつゝも快感を得る場合。(c)常態の性目的の準備としてゞなく、これを抑壓してゐる場合。

三、嗅ぐこと――

動物に於いては、まづ對象の局部を嗅ぐことにその性行動は始まる。高等の動物に於いてはその嗅覺に依る豫備快感の滿足は、局部にのみ限定せられず、身體のあらゆる部分に亙る。頭髮、皮膚、時には排泄物に及ぶ。

四、加虐性と被虐性――

サディズム(加虐性)とマゾヒズム(被虐性)とはクラフト・エービングの造語であつて、元來精神病學上の術語であつたが、精神分析學に於いてはその概念內容は遙に廣汎になつてゐる。この部分本能は兩極性を帶びたものであるが故に、屢々アルゴラニヤ又はサド・マゾヒズムスの術語を以て置換へられる。

サディスムスの生物學的意義は、性對象の抵抗を求愛以外の行動で克服せんとするにある。で、人間に於けるサディズムは他の要素から「獨立し、誇張せられ、轉位作用に依つて前景にまで持來たされた性的衝動の攻擊的要素」(フロイド)と呼ぶことが出來よう。で、一般的定義を下すならば、性對象に對する能働的、力づくの態度、虐待することに伴ふ滿足感と云ふことが出來る。この程度に於いては常態的であつて、未だ變態的と云ふことは出來ないが、それが極端になつた場合が變態である。

マゾヒズムスは、性生活及び性對象に對する總ての受働的態度、性對象からの肉體的及精神的苦痛を受けることに就いての滿足、と定義することが出來る。が、この場合も、この程度に於いては常態的と云はなければならないが、變態の場合には、(a)性的受働と、(b)去勢コムプレクスと、(c)罪の意識、とが共同してゐるのである。

サディズムス及びマゾヒスムスは非常に問題が多岐に亙るから、只今一般論としての變態性慾心理論の場合には、この位に止めておいて、他日獨立の論著の場合に讓ることにしたい。(完)

サディズムの藝術及社會への顯現

――道德については、現代人が「進化」したかどうか疑問である。（ウィッテルス）

高橋鐵

一、サド・マゾヒズムの價値論

「青い祈禱尼」といはれる蟷螂の雌が長い前肢を靜かに組んでゐる。そこへ彼女の姿に、南京玉のやうな眼を輝かせた雄が近づいてはがひ締めに抱く。青葉蔭には時がない。

戀しとは誰がいひそめし言ならん、死ぬとぞたゞにいふべかりける

平安歌人が幸福な溜息と共に詠じたその樣に彼等は、半日……一日……いや二日、desire に燃えたまゝ動かない。が、誰か月下氷人のつもりでソッと覗いてみるならば、そこにはたゞ嚴肅な戰慄が顯れてゐるであらう。

雄は彼の花嫁によつて、頭を喰ひ盡され胴を嚙りとられて、しかも後半身のみ生きてシッカリと愛の抱擁を續けてゐるのだ。まるで千姬である。サロメである。そして又、民衆がひそかに胸とゞろかせる毒婦の姿である。

これは決して蟷螂の結婚式ばかりではない。蜘蛛や蠍も亦かういふ靑春悲劇を演じる。丁度、鷄、馬、牛、カナリヤ等の雄がオルガスムスの後にいとしき相手へ咬傷を殘すのと同じに。

併し、此の事實に對して石をなげうつ人は、孔雀の羽をつけた烏に等しい。彼は生物學の不可抗な法則を知らない。

又、愛憎一元の心理機制を知らない。そして得々と「文化」を讃へながら愛人同志手を組んで鋪道を濶歩してゐる。さうだ「蝸の散歩」のやうに！

筆者が禿筆を馳せて警鐘を亂打するのは此の危機を救はう爲である。

サディズム及び、それが自分に戻つて來た形としてのマゾヒズム――Algolagnie は曾て、意識面のみしか見ぬ應用心理學（變態心理學、犯罪心理學、性心理學など）によつて、病的の倒錯と見做されてゐたが、精神分析學はこれを人間心理上に於ても重要な一傾向であると認めた。原始時代の喰人風習や種々なトーテム、タブー形態の名殘りとして、對象愛を自己に取込んだり、又對象の立場に自己を投出してサディズムを甘受したりする無意識願望が、この地底から多様な花を咲かせる。

そして、性的模範の法則により、或ひは贖罪願望に、或ひは攻撃欲の補償に、或ひは死の本能に――多形に結びついて、生活意識の一傾向にすら成つて行く。

その爲、適度なサディズムがなくては性生活は勿論、生きて行く事が出來ないであらうし、又適度なマゾヒズムがなくては（兩者とも、根は一つなのだから）社會に暮す事も出來なくなるに違ひない。

ところが、意識心理學によつてのみ人々を統制しやうとする現下の皮相な文明社會に於ては、法制も教育も宗教もサド・マゾヒズム（否、總ての無意識面）の價値を知らずに、經濟機構の動くまゝに引張つて行かうとする。そして個人主義經濟組織と社會主義經濟組織との中間過程に昏迷する民衆を神經症に突落して了ふのである。

例へば、小兒の健康なサディズム（無意識論理の一つとして）が意識論理（所謂知能）を得て、より以上完成せんとするのを、中途で歪曲するのが教育である。脆弱な生活意識に喘ぐ民衆を病的マゾヒズムの濁流へ誘ふのが宗教である。そして、藝術すらも方向を知らぬサドマゾヒムを乘せて奔馳しつゝある。

筆者は以下に、先人としてのサディストマゾヒストの心的因由を二三例示し、彼等に對する民衆の可憐な秘願を分析し、最後にサド・マゾヒズムの健康法を、許さるゝ限り述べたいと思ふ。

二、サディスト及びマゾヒストを見る

クラフト・エービングによつてサディズムとまで呼稱されるに至つた侯爵サード(マルキ・ド)は、文學、歴史、社會學、唯物論哲學などに通じた學究的人物であつたといふ。その彼が、猥褻傷害の累犯で前後十四年間も投獄されたのは政略結婚の傷手（妻ならぬ妻の妹との破戀）が第一の原因で、後年、彼は當の愛人を掠奪し彼女によつて母代償の如く救けられてゐた。（彼女はサードを二度も破獄させたりして大いに傳奇小說的貞節をつくした。）が、軈て佛蘭西革命が勃發すると共に彼は共和黨員としてマラーを支持し、獄窓から民衆を煽動してバスチイユ襲撃の動機を與へた。そこで政府に危險視され瘋癲病院へ叩き込まれた。流石愛人も女は矢張り女、忽ち彼から去つた。

その後、彼は（非常に彼自身のサィデズムと矛盾したやうだが）拷問及び死刑に反對した爲、革命政府にも非テロリストとして睨まれ約一年の禁獄生活を送つたが間も無く釋放されて後は筆禍（所謂淫書『ゾロエとその侍從二人』の自費出版）と發狂の續發によつて七十五の生涯を終つたのである。

かういふやうな彼の一生は、筆者の見たところによると、餘りに曲解され過ぎてゐる。否、ハツキリいへば餘りに誇張され、餘りに惡魔視されてゐる。それは屹度、社會思想か精神分析かどつちかの不足による研究家が多かつたからであり、又一面には、後述する通り、無意識願望への反動形成（自分もさうしたい樣な事を他の自然人が敢行した際のムキになつた惡罵）によつて見事、大惡漢にされてしまつたのであらう。

彼は單に女性へ失望した爲と社會的な不平不滿反逆とによつてリビドーの方向を失つたのではないか。自傳的な諸著述によつても分る通り、彼は多くの貴婦人（多くの無產婦人達には餘り興味を持つてゐない）を加虐的に弄び――或時は淑女の宴に催春劑カンタリヂンを配して混亂させ、或時は血の凌辱を加へてゐる。その他小說（觀念的サディズム）としては、破戀の愛人を愛慾のどん底へ陷入れたり又は彼の輕蔑する僧侶の亂淫を描いてゐる。

彼の何處に惡の面影があらうか？――そこには痛ましくも愛憎の入交つたマザー・イマゴーを追ふ姿をみるのみで

はないか。(筆者は他の折に此のサード侯を詳しく分析的に辯論し、以て他山の石とするつもりである。)

サード程、藝術的ではなかつたらしいが日本に於る彼の位地はおそらく關白秀次に與へられるであらう。即ち此の殺生關白は偶々一躍して成上り、そして又瞬く間に政略の犧牲に供せられたその廿八年の短生涯に「いつとなく人を切る事を好み給ひ」「肥りせめたるをのこ、懷姙の女抔は見合次第に捕りける」(聚樂物語)といふ。勿論、彼は荒々しい武人癖もあり、成上りの「お手打」趣味も多分にあつたやうであるが、信じ得る『日本西敎史』などに依ると、「壯年の貴人には稀な良質を具へその才俊敏、義に篤く實直謹愼の人なり」と鑑定されてゐる程風流韻事を嗜み文の道にも深かつたらしい。たゞ、筆者の見解を以てすれば、彼はひとたび逆境に陷入るや、いよ〳〵幼兒的なリビドー傾向を强め一生涯中のコムプレックスを――破壞本能、贖罪願望による罪惡、近親姦(一の台母子を共に犯し、その爲畜生と迄稱せられた所行)――ぶちまけた。そして屢々弱い者に同一化して自嘲をはらしたのではなからうか。その實證が『聚落物語』中でも有名な場面になつてゐる。曰く――「ある時御膳あがりけるに御齒に砂のさはりければ御料理人を召して汝が好む物ならんとて庭前の白砂を口中に挿入れさせ一粒も殘さず嚙碎けとて責け給へば、さすが捨て難き命なれば力なく氷を碎く如くにはら〳〵と嚙みければ口中破れ齒の根も碎けて眼も眩みうつぶしに伏しけるを、又引立てゝ右の腕を打落させ、此上にても命や惜しき、助けば助からんやと仰せければ、是にても御助けあれかしと申すと又左の腕を打落し是にては如何にと仰せければ其時かの者眼を見出して、日本一のうつけ者かな、左右の腕なくて命生きても甲斐やある。……常々汝は鮟鱇といふ魚の如くに口を開けて居る故に砂はあるぞかし、此後もみよ、風の吹かん時は必ず砂はあるべきぞや。此上は如何やうにもせよ、命は限りある物ぞと散々に惡口しければそれ物ないはせぞとて頓て首を刎ねられける。」

秀次は此の時おそらく已が姿のカリカチュアを見て、見るに堪えず聞くに堪えなかつたであらう。そして間もなく彼以上の小兒病的サディストたる伯父秀吉により妻妾三十四人と共に自刃させられた。

ところが、此處に問題となるのは、此の大場面を第二盲目物語『聞書抄』に採り入れてゐる谷崎潤一郎氏である。

氏は云ふ迄もなく『愛すればこそ』『少年』『刺靑』『お艶殺し』『無明と愛染』『本牧物語』『お國と五平』『愛なき人々』『痴人の愛』等々でサド・マゾヒズムの文藝を築いた第一人者で、近來は盛々去勢的退行的盲目願望に耽つてゐられるが、どうも、此の場の描寫をはじめ自傳的な『母を戀ふる記』や『春琴抄』の逃避傾向を覗ふと、氏は未だに自身の無意識面に氣附かれぬ様である。少くとも秀次の自己サディズム（つまり積極的マゾヒズム）に對する烱眼が曇つてゐるらしい。この點が釋然とすればサド・マゾヒズムの單一性――從つて氏自身の藝術及び處世方針の二元的分裂も解決するのであらう。（兎に角、秀次及び谷崎氏のサド・マゾヒズム觀については、大谷崎氏と一分析學徒といづれが深いか――『聞書抄』その他を讀まれゝば分る筈である。筆者としては此の實踐的古人と現代文豪との關係に就いては他日に讓つておく。）

これらの他にも、未だに稗史正史に殘るサディストとしては、紅毛バソリー夫人、ワイルド作のサロメ、千姫、妲己、武后、紂王、ネロ、煬帝、延命院……日當などと思ひ出すだけでも相當な數で、それ〴〵娘狩りをやつたり炮烙刑を考案したり姙婦殺しをしたりした。又は屍姦・童姦・獸姦等の淫虐をほしいまゝに行つた。近代犯罪史の上でもクリッペン、ランドリュー、小口末吉、大米某など皆生命懸けでサディズムに耽つてゐる。併し分析的にみれば決して實際の犯罪のみがサディズムを滿足させてはゐない。

例へばダンテは『地獄篇』によつて、エドガー・アラン・ポーは常に美人の死を描く事によつて、サディズムを昇華してゐる。いや、聖人や宗敎家は地獄の幻想を民衆に呈示し、涙に濡れた小說や劇の作家は美人を悲しい運命にさ迷はせ、斯くして無意識的に彼等の願望をさらけ出す。

それと同樣にマゾヒストは單にザッヘル・マゾッホ敎授のみでなく、世界に充ち充ちてゐる。殊に、男性をサド的な性格型とすれば、女性は生物學的にも社會史的にもマゾヒズム的人間であり、從つて女的男性の傾向をもつた藝術家、宗敎家などには多く此の傾向が見受けられるであらう。分析的文學批評家アルバート・モーデルは“The Erotic Motive in Literature”に於て、屢々加虐的探偵小說を書いたポオやコーナン・ドイルさへも「難問題を解くことに

眞劍な愉悅を感じやうとして自分自身を苦しめる」マゾヒストだと述べてゐる。つまり、此の點に於て、マゾヒストは愛人の鞭打を喜ぶジャン・ジャック・ルソーやマゾッホのみには限らないのだ。

そして、あらゆる人にサド・マゾヒズムの傾向があるにかゝはらず特に際立つた「變態」になるには幼兒的な定着が重要な役目を果してゐる。惡魔主義の詩人ボードレイルは丁度エディポスやハムレットとそっくりに、母を繼父にとられたのが大きな外傷となつたらしく、又マゾッホは父がサディズムの權化(ごんげ)たる警察署長(後述――ウィッテルス著『愛の精神分析』參照)であつた爲幼兒時代から觸れた刑罰の書畫に接してゐたのを男性的女性(アニマス)そのものだつた某伯爵夫人の閨房を見せられてゐた經驗が心底に發酵し彼の罪障感をうづかせたに違ひない。

が、翻つて、「常態な」民衆達は彼等をいかに罵りいかに怖れてゐる事だらうか。或ひは又、彼等にいかに憧憬を寄せてゐる事だらうか。

三、民衆の彼等に對するひそかなる羨望

現代に於る稀なサディズム藝術家として、筆者は伊藤晴雨畫伯を擧げる。氏は江戸風俗の最適な研究家として諸著述や舞臺裝置に最後の江戸畫工の意氣を見せてゐるが、それ以上に有名なのは「責め」の研究である。それは、江戸爛熟期に見受ける血みどろな浮世繪や歌舞伎のサディズム藝術を繼いで、裸女を縛り、吊し、打擲して、その亂れとい、い、うねりを繪に寫眞に殘すといふ仕事である。そればかりではなく氏の周圍には幾多知名なサディストやマゾヒストが集つて此の仕事をたすけ、或ひは自らモデルになつて一つの「變態」的群團を成してゐた。輪姦・屍姦・獸姦・强姦……氏の藝術化はたしかに厖大なものであり又藝術としても認められてゐた。

けれども、社會は矢張りそれを許さなかつた。出版法違反・家宅搜索・沒收などの絶え間なく氏の一生の仕事も散り失せ、氏を取卷くサディストやマゾヒストも丁度散娼のやうに社會の渦の中へ逃げ込んで了つた。

しかも社會は變動期現象の例に洩れず、益々病的な錯綜を增して行く。これでいゝのだらうか？　いや、何故かう

しなければならぬのか？　そして、敢えて「變態現象」を蹴散らすだけの社會信念をもつてゐるのだらうか？

ブリンク博士は“Morbid Fears”に於て述べてゐる。――「サディスティックな衝動を抑壓したとて決してそれを消滅させる事は出來ぬ。單にそれをば意識面から無意識面に押し込むに過ぎぬ。（中略）その爲多くの場合、個々の人の意識生活は一見意志の命ずるまゝに働く如く思はれてゐるが、實は憤怒、憎惡、敵意、復讐の衝動及びこれらへの幻想が意識の底に流れてゐるのである」と。（マゾヒズムに對しても同樣な事が言ひ得る）

そこで民衆は妙なものを愛好する。

毒婦傳！　ボクシング！　戰爭！　怪奇探偵小說！　犯罪――六人殺し！　ヨタモノ！　ギヤング！　男裝の麗人（アニマス型女性）！　キングコング！　ターザン！　フランケンシュタイン！　ETC.…それより他に、もつて行きどころがないのである。

此の傾向は、つまり、病氣を內攻させるのに最もよい方法には違ひない。ウィッテルスは慈善事業のサディズム性を分析し『社會主義がいかなる形式での慈善に對しても反對するのは正しい。いかなる場合に於ても受ける方では屈辱を感ぜずにはゐられない。社會が我々に義務を負はす所に於ては慈善は不必要である』と喝破してゐるが、筆者は現代ジャーナリズムのドル箱になつてゐる笑ひ「ナンセンス」も明白に、サド・マゾヒズムの歪形であることを斷言する。そして、又、民衆の抑壓を代表する刑吏や裁判官の無意識なサディズムが現下のやうな狀勢に甚だ危險な處置をなさせる事も（ウィッテルスと共に）述べておく事にする。

民衆の智能は一般社會心理學も敎へてゐる通り最も低いレベルに迄低下するものであるから、サド・マゾヒズムの社會的抑壓といふ一面をみても、彼等の困憊ははなはだしい。そして徒らに切實な願望に對して反動形成をかたちづくり、表面上飽く迄もサド・マゾヒズムを排してゐるつもりに違ひない。ところが豈はからんや、彼等は最も危險な方向へリビドーをそらしてゐるのだ。意味ない鬪爭へ！　死の本能へ！　吸血に近い犯罪へ！　嗤ふべき邪宗へ！

あゝ、淋巴腺のはれるやうなアクラツなサドマゾヒズム手段へ！

筆者はこれ以上社會分析のペンを伸ばさない。たゞ、伊藤晴雨畫伯の、日本太古にある樣な明るいサディズム研究を引例して健康法と病氣へ逃げ込む方法とを說いたつもりである。（伊藤氏等の研究については良き機會に敢然と公開するであらう。）

では、萬人に必要である健康なサド・マゾヒズムはいかに處理すべきか。――それは精神分析學のみが答へ得る問題だから、此の章及び次章については警視廳金子準二博士の御賢察を乞ふ次第である。

四、サド・マゾヒズムの輝かしき昇華！

近頃は性行爲上の技巧が大分公然と云々されるやうになつた。それにも拘らず、筆者が昨年九月號本誌上で、發禁處分を受けた諸文獻と共に列擧したヷン・デ・ヱルデの『完全なる結婚』の如き良著は民衆の手に入り難い。その爲、悲劇を起す家庭もすくなくはないであらう。

この書にはいろ〳〵と愛戲を述べられてゐるが、昔から性生活の教科書になつてゐる『愛經（カーマスートラ）』『匂園（ヤルダン・パルヒューム）』『愛壇（アナンガランガ）』『愛秘（ラティラハスヤ）』などにもサド・マゾヒズムの效用について多くの言葉をついやしてゐる。例へば愛咬（リーベスバイツセン）の方法は江戸の情歌「抓りや紫、嚙みつきや紅よ、色で仕上げた此の身體」によつて知られる以上にその生理を敎へてくれる。又前戲後戲としての加虐被虐についても古川柳「試みにつめつてみれば無言なり」「野暮（やぼ）の知らない拷問はうつゝ責め」より以上に詳細を極めてゐる。何しろ古代埃太では男性器の別稱として「怒りんぼ」「脅喝（ゆすり）」などといつてゐたさうだから（ヤルダン・パルヒュームに依る）男性的立場は想像して貰ひたい。さういふ次第で、空想（無意識願望）上に於ては、文明の頂點に於てすらもキングコングやターザンを必要とし、御殿女中を手込めにする怪盗小猿七之助を崇拜する。此の傾向は性生活のみでなく、忍苦は常にマゾヒズムによつて勝算を得、努力は必ずサディズムの本能力を藉りねばならない。

それと同時に過剩なサド・マゾヒズムを昇華するには、藝術・技術・學術などの道がある。ソビエート・ロシアでは

流石に此の點をシッカリ把握して一切の攻撃欲を技術競爭に置換して成功を納めたが、云ふ迄もなく知識は文化人の武器なのだから、それを磨き又それによつて未知の世界を切りひらく事は確かにサド本能を滿足せしめる。そして、他面、マゾヒズム傾向に對しても神經症的宗敎以上に有效な昇華法は藝術が簓らすべきであらう。一例を擧げれば、健全な傳記小說などはどれ程健全なマゾヒズムを滿してくれることか。又獵奇好色といはれる文學美術ですらも、愚かしい禁斷抑壓や動物的爭鬪に較べれば如何にサディズムを觀念內に發散させてくれることか。

個人は勿論、文化を指導しやうとする社會人は、まづ、妖怪の影に脅かされて錆刀を振廻す前に此の——自分達の身中にも潛んでゐるサド・マゾヒズムをハッキリさとる必要がある。そこに輝かしい人類の道が新しく開けて行くであらうから。(古い言ひ方だが、何でも熾烈なものは善にもなり惡にもなる。變態以上にもなり常態以上にもなる。

——一九三五・一〇・八——秋霜烈日の意氣で。

分析心理學と教育（カール・ユンク）（2）

宮田齊譯

凡そ教育者たるものが心得てゐなければならない心理障害に五種類のものがあります。

第一類は精神的缺陷を有する兒童。此の種のもののうち最も多いのは低能（Imbezillität）で、主なる特徴は低い智能と全般的な理解不能であります。就中最も顯著な型としては、粘液質の、鈍重・鈍感な兒童がありますが稀には、昂奮し易い、非常に活動的な、怒りつぽい兒童を見る事があります。これは低能兒と異つて容易に認識できません。精神的に無能である點は勿論低能兒の場合と同じ事ですが、唯此の方は屢々著しい偏向を示す事があります。但し、是等の生來的な、敢て教育する事が不可能であるとは言へないまでも、事實上治療の出來ない型に屬するものと、精神的發達が後れてゐる兒童とを嚴密に區別する必要があります。後者の發達は頗る緩漫であつて、時には殆んど氣付かれない事すらあり、場合によつては之が將して白痴であるか否かを判斷する爲には優秀な精神病醫の經驗ある診斷を俟たねばならない事もあるのでありまして、斯樣な種類の兒童は大抵感情方面に於ては低能兒と同樣な反應を示すものなのであります。

私は以前、當時六歳になる或る男兒の診療を依賴された事がありますが、此の子供は烈しい激怒發作（Wutanfall）を起し、その發作が起ると玩具を壞したり兩親や乳母を危險を感ずる程脅したりする上に、親達の話によると「物を言はうとしない」のださうです。柄の小さい榮養のよく攝れた子供でしたが、非常に猜疑心が強くて、意地が惡く、氣分屋で、陰氣な性質でした。如何にも低能らしく、喋べることが出來ない。——つまり、談話を習得して居ないのです。と申してもその低能の程度は言語

障碍を惹き起す程甚しいものとも思はれない。彼の擧動は全體的に見て神經症に罹つてゐることを示してゐました。凡そ幼兒が神經症の症狀を呈する場合には、徒らに多くの時間を費してその下意識の探求をすべきではないのであります。寧ろ他の方面から研究をはじめるべきであつて、その際に先づ第一に問題になるのは母親でありますo何となれば、小兒神經症の直接の原因となるものは——或は少くともその最も重要な要素は——殆んど凡ての場合に於てその子の兩親であるからであります。扨て、私はこの患者が七人の姉妹中のたつた一人の男の子であることを發見しました。彼の母親は名譽心の強い、氣儘な女で、私が「貴女のお子さんは尋常でない」と申すと感情を害すると云つたやうな始末で、つまり、自分の子供の缺陷に對する理解を故意に抑壓して居つたのです。何でもよいから只智慧がついてくれゝばよい——それが出來ないのは子供の根性が惡くて、變に意地を張るからなのだと、斯樣に考へてゐたわけです。勿論その子供は何事も習得しない、若しも幸に理解のある母親を持つて居たならこんなでもあるまいと思はれる程、一向に覺えない。それればかりでなく母親の名譽心が彼に强制した通り實際變に意地を張るやうになつて了つたのであります。こんな具合に少しも理解されることなく、全く孤立の狀態になつた爲めに、最初は單なる絶望であつたものが結局例の激怒發作にまで進展したわけであります。

又、私は之と非常に似通つた狀態にある十四歲の少年を診たことがありますが、この少年は發作の起つた際に斧を揮つて自分の繼父を斬殺して了つたのです。彼も亦過重な要求をされて居たのでした。

精神的發達の停止した兒童は、總領か或は兩親同志が心理的に調和しないで離れ離れになつて居る場合に多く、又時には母親の姙娠中の疾患或は長時間を要した出產・分娩時に於ける頭蓋骨の變形・出血等に起因する事もあります。

斯樣な兒童は、敎師の功名心の爲に害はれない限り、縱令學友達よりは後れても、年を重ねる中には普通並に相當な精神的發育を遂げるのであります。

偖て、第二の分類は道德的缺陷を有する兒童でありますが、そのうち所謂「道德的精神薄弱 (moralischer Schwachsinn) は、先天的であるか或は外傷乃至疾病の爲に蒙つた腦の損傷に起因するものであつて、治療する事が出來ず、時には犯罪に至る事もあり、云はゞ先天的犯罪者の萠芽であります。

此の一群から嚴重に區別しなければならないものに、道德性の發育が停止してゐる兒童、卽ち自己性感 (Auto-

erotismus) の傾向を有する類型があります。此の型に屬する者は烈しい自體愛、不信、虛僞、早熟的性機能並びに愛情と人間的感情との完全な缺除とを示し、私生兒或は繼子等、實の親達の心性的雰圍氣の裡に育てられる幸運を享け得ない子供達に多いのであります。斯樣な兒童の惱みは、凡ての小兒が最も必要とする何ものかを殆んど器質的(オルガーニシュ)に缺いてゐる點にあるのであります。大多數の子供は容易に繼親に順應するものですが、全部が全部その通りに行くとは決つてゐません。そこで、それが出來ない者は、親達から與へられないものを自分自らに與へようとする無意識的な目的をもつやうになり、太だ自己中心的な冷酷且强烈な利己的傾向を發達させるのであります。此のやうな患者は決して治療不可能ではありません。私は、五歳の時四歳になる妹に暴行を加へ、九歳の時父親を殺害しようとした一少年が、不治の「道德的精神薄弱」といふ診斷にも拘らず、十八歳になつて結構正常な發育を遂げた例を見て居ります。

第三の分類は癲癇性の兒童であります。此の種類のものは、不幸にして尠くありません。外部に顯れた癲癇の發作を識る事は勿論容易でありますが、所謂「小發作」(petit mal) となると、頗る不明瞭な複雜した狀態であつて、何等顯著な發作を伴はず、極めて特異な殆んど氣付かれない程度の意識變化(Bewusstseinsveränderungen)を起す場合が多いのであります。但し此等の變化は軈て癲癇患者の特徵的精神型態、卽ち刺戟性・殘忍性・貪慾・根强い感傷性・病的な正義愛・利己心・關心範圍の狹隘等に赴くものであります。癲癇狀態の種々雜多な型態を一々玆に列擧する事は無論不可能ですが、唯斯樣な患者の徵候を說明する爲に、一例として或る子供の場合をお話して見ませう。此の子は七歳の頃特殊な狀態を呈しはじめたのであります。最初に氣付いたのは、彼が時に姿を隱して、土藏や部屋の暗い片隅に隱れるといふ事實でした。が、何故そんなに突然逃げ出して行つて身を隱すのか、その理由を子供に說明させる事は出來ませんでした。子供は屢々遊んでゐる最中に驅け出して母親の膝に顏を埋めて了ひます。これも初のうちは極く稀にしかやらなかつたので、誰も彼の奇怪な擧動に注意しなかつたのでしたが、軈て學校でも同じ事をやり出し、突然席を離れて先生の所まで驅けて行つたりするので、關係者達が不安になり出したやうな譯なのです。當時之が本物の病氣であると考へた者は一人もありませんでした。其の子供は時々遊びながら一・二分の間遊びをやめて見たり、或は物を言ひかけてこれと云ふ理由もなしに言葉を切つて見たりして、而も自分では一向それに氣付かない樣子

でした。こんな具合に、彼は相富不愉快な刺戟性の性格になつて行つたのです。折々激怒發作を起して、ある時などは非常な勢で妹に鋏を投げつけ、すんでの事に命に關る所あたる部分に穴を穿けて了ひ、頭蓋骨の眼の上にまで行つた事さへあります。併し、彼の兩親は精神病醫を呼ぶ事などには思ひ到らなかつたので、斯樣な狀態を理解する者もなく、子供は不良兒として取扱はれてゐました。處が、十二歳の時、彼が最初の顯著な癲癇發作を起したので、始めて病氣だといふ事が理解されたのです。私は非常な困難を冒して、其の子供から次のやうな事實を訊き出す事が出來ました。彼は六歳の時、突然何者かゞ自分の傍に居るといふ恐怖に襲はれたのださうです。其の後になつても彼は一人の鬚を生した男の存在を意識してゐましたが、一度も實際には見た事のない此の男の容貌を明細に描寫する事が出來ました。此の男が突然彼の面前に立現れるので、彼は恐怖のあまり逃げ出すといふわけなのです。何故此の男がそれほど恐しいか、その理由は訊き出す事が困難でした。少年は確に、何事か恐るべき秘密といふやうなものをもつてゐて、その爲に當惑してゐたのです。私は非常な努力をして十分に彼を懷柔し、到頭その秘密を打明けさせる迄にしました。處で、其の子が言ふには、「その人が私にある恐しい事をさせようとしたんです。その事が何だかは言へないんだけど、とても凄い事なんです。ぐん〳〵僕の近くに寄つて來て、どうしてもそれをやれと言ひます。だけど僕とても心配になつたんで逃げ出してしまひました。」少年は此の話をしてゐる中に蒼白になつて、恐怖の爲に慄へ出しました。やつとの事で落着かせると、「その人は私に或る罪を犯させようとしたんです。」と申します。「罪つて一體どんな罪なんだ?」と尋ねますと、少年は立上つて、不安さうに周圍を見廻してから、殆んど囁くやうな聲で「人殺しです。」と答へました。前にも申した通り、彼は八歳の時、今少しで妹を殺しかけたのでした。

此の恐怖發作は其の後も繼續致しましたが、たゞ幻影が變つて來ました。恐しげな男はもうやつて來なくなつて、今度は看護婦のやうな姿の尼さんが、最初は面被(ヴェール)で顏を隱したまま、最近ではその面被を外して、如何にも不氣味な感じのする蒼白な顏を見せて現れるといふのです。彼は七歳から八歳の頃まで此の姿に憑かれてゐたのでした。(未完)

トルストイ『神父ゼルギウス』の分析（オッシポー）

平塚義角譯

前號からの續きである。まづこの作品『神父ゼルギウス』の筋書の途中から續ける。（譯者）

×

神父ゼルギウスは、この內的葛藤を克服せねばならなかつたその日（それはゼルギウスの隱遁生活の七年目の事であつた）次の樣な事が起つた。寺院に近い田舍町からやつて來た淫蕩な一團の人々が、一人の若い美しい、長い事空閨を守つてゐる寡婦マコヴキーナと賭けをした。彼女は、今晚ゼルギウスの所で明かしてみせると主張した。マコヴキーナが、神父ゼルギウスの扉を叩いた時、彼は恰度、魂の動搖する狀態で寢込んでゐたのだつた。マコヴキーナが神父ゼルギウスを誘惑するいと驚くべき場面が、續いて展開せられた。ゼルギウスは、性的興奮の苦しい瞬間を味つた。とう／＼彼はマコヴキーナに近づいて行かずにはゐられなかつた。彼は性慾に征服されたくなかつたので、左手の人差指（男性器象徵！）を斧で切り落した。殘つた指の關節を、衣の緣で抑へ乍ら、彼女に近づいて行つた。かやうにしてやうやく彼は勝利者となることが出來た。マコヴキーナは、この事件の後、或る尼寺へ入つて尼となつた。

この事件は凡く到る所に知れ渡り、神父ゼルギウスの名聲は擴まつた。「訪問者は益々多くなり始め、彼の僧房の側には修道僧が額づいて、教會と旅館が建てられた。神父ゼルギウスの名聲、彼の行爲の名聲は、益々誇張されて擴まつて行つた。人々は遠方から彼の側へ流れ寄つて來て、彼が病ひを治すといふ評判なので、病人を連れて來始めた。」始めの內は「神父ゼルギウスには自分が病人を治せるなど云ふことは思ひも寄らないことであつた。」ところが併し、彼の祝福によつて、澤山の病人が癒つたのである。そして寺院長と修道僧は、ゼルギウスが彼等にとつて有用であり、彼の名聲が寺

に大きな尊敬と物質的な利益とを齎す故に、彼を大事にした。
　ゼルギウスは内心、憂鬱であつた。「神父ゼルギウスは、もう二三週間もの間、絶えず一つの考へに思ひ煩つてゐた。――一體自分の行爲はこれで良いのであるか、自分自身によつてゞはなく、管長や寺院長によつて置かれてあるこの狀態に、身を委ねてゐる事は、果して良い行爲であるのだらうか？と。……彼は、益々人間のために働いてゐるので、神の爲めではないといふ事を感じた。……彼は、自分の行爲の結果とか、人間へのその影響といふものに、拘泥する喜びを禁ずる事は出來なかつた。――彼はその魂の奧底では、自分がそれ等の結果や影響を喜んでゐることを、自分がそれ等の事に有頂天になつてゐる事を、感じてゐた。……勿論、彼は此處を去つて、隱れて了ひたいと決心した時もあつた。……だが、普通の時には、彼は倦怠の狀態にあつた、さうしてこの倦怠の狀態を感激してゐた。」

　神父ゼルギウスは、外見的には、司教に至る經歷の最高點に到達してゐた。彼は人間の肉體と精神との、治療者として尊敬されてゐた。併し内心では、その活動を中止して隱遁したいと考へたほど、當時非常に不滿足であつた。彼のこの不滿足の由つて來るところは、本來何であつたのだらうか？「彼はその心の奧底で、惡魔が神に對する全行爲と人間に對する行爲とを、取換へたのだと思つてゐた。」　神父ゼルギウスは此處で一つの著しい間違ひをなしてゐる。惡魔は何も取換へてはゐなかつたのだ。が、彼の全行爲が、始めから神に對しても人間に對しても捧げられたのではなく、結局はたゞ彼自身の爲めにのみ盡されたのであつたと同樣に、今でもやはりその通りであつたのだ。神父ゼルギウスは、決して人類愛を持つてゐなかつた。神の爲めか人類の爲めか？と尋ねるかはりに、人類の爲めか自分自身のためか？といふ別の問ひを提出せねばならなかつたのだ。その答は容易である。自分自身の爲めだ。「その凡て（卽ち彼に期待する訪問者の群れ）は神父ゼルギウスには既に久しく分つてゐたが、興味がなかつた。彼はこれ等の人々からは、何等新らしい事を經驗しないだらう、これ等の人々は、彼の心に何等宗敎的な感情を呼び醒す事は出來ない、と云ふ事を知つてゐた。併し彼は、彼自身及び彼の祝福を必要とし、貴重とするそれ等の群れなす人々に會ふ事は好きであつた。それ故にそれ等の人々は、彼には煩はしかつたが、同時に愉快でもあつた。」

　或る時神父ゼルギウスは、お勤めの間に惡心が起きたのを感じた。が、それを征服して、お勤めを續けて行つた。「さうだ、聖者はさうするものだ。」と彼は思つた。彼はお勤めを終へると、民衆に祝福を與へた。さうして「彼自身をも感動させる樣な弱々しい調子で質問に答へた。」（自己戀愛）恰度その日に、二十二歲の娘を持つた一人の商人が、神父ゼルギウスに一つの願ひを持つてやつて來た。そして言ふには、「娘はこれといふ病弱い所は無いのですが、醫者は、神經衰弱

に罹つてゐると云ふのです。……神父樣！　どうぞ父親の心を蘇らせて下さい、病原を取除いて下さい。　貴方樣のお祈りで病氣の娘をお救ひ下さい！　……晝間は娘は外出しません、光を怖れてゐるのです、日暮れてからしか外出出來ません。」　神父ゼルギウスは、患者を連れて夕方に來るやうにと答へた。

それは洵に美しい五月の夕方であつた。……ゼルギウスは現世の諦めの書いてある一つの祈禱文を讀んでゐた。そして商人と病氣の娘とを迎へにやる爲めに、急いでそれを通讀した。父の方も娘自身も、彼を聖人だと思つてゐる、お祈りあらたかな僧だと思つてゐるといふ事が、彼には面白かつた。……人々は何千里も車に乘つてやつて來た、新聞にも自分は書き立てられた、皇帝にも知られてゐる、ヨーロッパ中の人が皆わしを知つてゐると彼は考へた。すると突然、彼は自分の虛榮心が恥かしくなつて、再びお祈りを始めた。……彼は最初の隱遁時代の自分の祈禱を思ひ出した。その頃は彼は、純粹の、恭順の、愛の惠みを祈つたのだ。そしてその頃は、神樣が我が祈りを聞きとゞけて吳れる樣にと書きつけたものだ、彼は純であつた、指を切落したのであつた、さう思つた彼は、皺の寄つた指の切先きをもたげてキッスした！　……だのに今は彼は愛もなく、恭順もなく、純な心も持たなかつた。俺は他人に愛を持つてゐるか……今日來た人々に愛情を感じたかと彼は心に尋ねて見た。……彼等の示す愛は、彼には愉快であり、必要であつた。が、彼は彼等に何の愛も感じなかつた。彼は、その娘が美人かどうか知りたかつた。病氣を尋ね乍ら、娘が女の魅力を持つてゐるかどうかを知らうと思つた。……商人は娘を連れてやつて來て、僧房に置いて、直ぐ去つて行つた。……娘が前へ進み寄つて、彼の側に立つた時、彼は、娘の身體に眺め入つた自分の樣子に、我ながら驚いた。……神父ゼルギウスは、彼女が肉感的であるが、しかし感覺の弱つてゐる事を、その顏に見て取つた。……「何處が苦しいのですか？」と彼は尋ねた。——何もかも苦しみの種で御座います、と彼女は言つた。すると突然、彼女の顏は微笑に明るくなつた。——丈夫になります、お祈りしなさい、と彼は言つた。——何に向つてお祈りするのです？　私は今迄にお祈りはしましたが、何の效果もありませんでした！　さう言つて彼女は微笑み續けてゐた。お祈りなさい、お手を私の上に置きなさい、私は貴女がさういふ風にお手を私の胸に置いた夢を見ました。娘は彼の手を取つて、それを自分の胸に押着けた。それからこつちの手……。彼は娘に右手を與へた。お名前は何と云ひますか？　と彼は全身を震はせ乍ら自分は征服された、慾望を支配する力がなくなつて了つたと感じつゝ尋ねた。——マリーと申します。——さう言つて彼女は彼の手を取つてキッスした。それから娘は彼の腰を片手で抱へて、彼を自分に押着けた——何をお前はする？　マリ

！、お前は惡魔だ、と彼は言つた。――が、今は何とも仕樣がなかつた。さうして娘は彼を抱いたまゝ、彼とベットの上に倒れた。……

神父ゼルギウスは罪を犯した。（此處で物語は新らしい部分に入る。作者はこの新しい部分を七年後に書き加へたのであつた。」夜明けに、マリーの未だ寢てゐる間に、神父ゼルギウスは剃髪して、かねて懷疑の時に用意して置いた野良服を着ると、僧房を永久に見棄てゝ出て行つた。

さて、ゼルギウスの經歷を眺めると、それは强い性エネルギイに纒綿された個人我の、繼續的な發展を現はしたものだといふ事が分る。卽ち、力强い自己戀愛(ナルチスムス)の繼續的な發展である。少年の個人我は、その周圍を我物にしようと努力してゐる。單に第一人者たらんためばかりでなく、己れを自ら讃美する爲めに、また他人の驚嘆と賞讃との對象となるために。（自己戀愛と自己戀愛的な露出癖と。）その努力は少年時代に成功したし、始めの內は將校時代にも成功した。だがこゝに、悲劇的な事件が出現した。その悲劇はどこにあるか？　トルストイは、彼の習慣に反して、少しも詳細な說明を與へてゐない、與へなくとも分つてゐるから。それは自己戀愛の損傷である。公爵シュテーファンは、皇帝の寵愛を享樂するために皇帝の情人と故意に結婚したのだといふ他人の邪推を怖れた。その他、この場合には、嫉妬心も一つの役割を演じてゐる。併し、この性的嫉妬は、複雜なものに見えてはゐるが、根本的に釋解すれば、妨げられた所有感である。嫉妬心は自我本能から、卽ち取込み（相手を自分の內に同化すること）の傾向から起る。そして後に、性的事件の關係に於いて始めて現はれるのだが、その時は再び執我心の姿を取る。一言で言へば、公爵シュテーファンは、さしも輝かしく開始した、彼の經歷を繼續する事が出來ない。彼は他の閱歷を開始する。それは、單なる現世的力の世界は見棄てゝゐるが故に、前のよりも遙かに高い閱歷である。シュテーファン公爵は、以前、皇帝に出來得る限り近く成らうとして夢中だつたが、今やこの願望は、神に近い者に到達しようとの願望と變つた。從つて、彼の出家は、自己戀愛の發展の繼續である。寺院に於けるゼルギウスの生活は、幼年學校や聯隊に於けると同じ生活である。彼は到達し得るものに、間もなく到達した。それから彼は他の寺院に移されて、こゝでより高い任命を受けた。だが、彼はこゝで、その性格——傲慢心——のために、それ以上の昇進をする事が出來なかつた。僧身の最高位に到達するためには、尙ほ澤山の階梯を經ねばならなかつたけれども、更により高い閱歷を開始する爲めに、この閱歷を中止して、隱者になつ

た。彼のこの閲歴も立派に成就した。にも拘らず、彼はいつも不滿であつた。新らしい、もつと高い閲歴を始めようとするゼルギウスに取つては、それは論理的には首尾一貫してゐたであらう。だが、それは如何なる閲歴であるだらうか？

此處に於いて、彼は性慾の爲めに沒落する。

ゼルギウスは、何故眞の高僧ではなかつたかを、まづ考へて見よう。眞の聖僧は、ドストイェフスキイが、その神父ゾシマ（『カラマーゾフ兄弟』）に於いて描いてゐる。ゾシマも青年時代には裕福な將校であつた。だが、彼の出家、寺入りは、決して外的な事件に因つてゞはなく、內的經驗に因つてゞあつた。彼は短氣で激昂し易かつた。（ゼルギウスもやはりさうであつたと書いてある。）それで、彼は或る時些細な事のために、傳令の顏をなぐつた。「私は寢に就いた」と司敎ゾシマは語つてゐる。ほゞ三時間眠つて、起きた。夜はもう明けてゐた。私は矢庭に起き返つた、そしてもう寢ようとはせず、窓に近づいて、それを開いた——それは庭に面してゐた——私は見る、太陽は昇り、天氣は溫かく、美しく、小鳥は囀り始めてゐた。私が心の中で、何か恥かしく卑しむやうなものを感じてゐるのは、一體何だかと考へた。と突然それが何だかゞ考へに浮んで來た。私は昨夕アナシウス（傳令）を毆つたのだ！ 凡ての事が、恰かももう一度それを繰り返してゐるかの樣に、再びまざ／＼と浮んで來た。そこに、彼が私の前に現はれた、私はその顏を力まかせになぐつた。併し彼は兩手を軍隊式の逞しい姿勢で支へ、頭は眞直にして、隊列に於けるかの樣に私を凝視してゐる。始めは一擊每に固くなつたが、身を庇ふために兩手を上げる事さへも許されなかつた。人間はそんな事もやりかねない、しかも人間をなぐる者が、同じ人間であるのだ。何といふ罪惡！ 鋭い針の樣なものが私の魂を貫いた。私は氣が違つた樣に、立つてゐた。太陽は太陽は輝いてゐる。木の葉は、喜んでゐる、そして小鳥はと言へば、彼等は神を讃へてゐる。……私は兩手で顏をおほひ、ベットの上に倒れて、痛々しく泣いた。」

高我の活動がこの將校の心の內に醒めた。一つの純粹に內的な經驗のために、彼に閲歴を變革しなければならないやうになつた。ゾシマの性格と生活、及び彼の人間愛の硏究は、非常に興味ある事だらうが、我々はこゝでは、ゾシマが、彼の性エネルギーを昇華したと言ふ事實を示すに止めよう。ところが、ゼルギウスはその昇華に成功しなかつた。それは彼が自我を理想化したからである。「この理想化と昇華との關係を吟味する事は容易い。昇華とは、對象リビドーに於ける一つの過程であつた衝

動が、性的満足とは縁遠い、他の目的の上に投げ掛けられるといふにある。この場合には、性から轉向してゐると云ふ事が重要なのである。」* 同様にゾシマも、彼の加虐色情的(サディスティッシュ)な行爲の後、その加虐色情(サディスムス)を自己苛責にまで** 發達さす經路を辿らずに、その性エネルギーを悉く、高我のお役へと讓つて了つた。高我は、ゾシマの生活を形成する所の形成となつた。

註一　フロイド『自己戀愛概論(ナルチスムス)』

二　フロイド『衝動と衝動の運命』

フロイドは、こゝに引用した自己戀愛概論の中で、かく分析してゐる。「理想化とは、對象に關する心的過程であつて、この過程によつて對象は、その性質を變へる事なくして、大きくされ、心的に高められるのである。理想化は、自我リビドーの分野にも、對象リビドーの領域にも共に可能である。それ故に、例へば、對象の性的買冠りは、それの理想化である。故に、昇華作用とは、本能に關する何事かを記述するものであり、理想化とは對象に於いて起る何事かを記述するものである限り、この兩者は概念的に區別される。」從つて、性本能は理想化によつて全部的に或ひは都會的に變化される事なく、理想我の上に向けられたまゝになつてゐる。そして性衝動は、その様な姿として、昇華されないまゝになつてゐる爲めに、それは永久に理想對象を放棄して現實的對象の上に向けられ得る事は、神父ゼルギウスの場合（彼の破戒の場合）と同様である。フロイドは我々に敎へてゐる。「その自己戀愛を、高き自我理想の尊敬と交換して了つた者には、當然、そのリビドー衝動を昇華する必要はない。自我理想はかゝる昇華を要求はするが、併しそれを强要する事は出來ない、昇華といふものは特殊な過程であつて、それは理想に刺戟されて始めて生ずることはあつても、それが實現せられるのは、このやうな理想の刺戟などにはよるものでは全然ない。自我理想は立派に出來上つてゐるが、本源的なリビドー本能の昇華の度合は極めて低く、兩者の間に非常な不均衡のあることは神經症患者の常である。で、一般に、理想家達に、彼のリビドーの行衛が見當違ひだと説明してやる事は、リビドーの要求に滿足してゐる單純な人達に説明してやるよりも、遙かに困難である。」昇華作用と理想化とをフロイドはこのやうに天才的に區別してゐるが、我々はこれによつてかういふ事を學ぶ。ゼルギウスには昇華の道が未だ殘つてゐた。併し只今論じて來たやうに、昇華の道は單純な人間には容易であるが、高い理想を持つた人には、困難である。高我は神父ゼルギウスに於いては非常に弱かつた。或ひは、彼の個人我と性我とが强すぎた、

餘りに自主的であり、餘りに氣儘すぎたと言つた方が正しいだらう。神父ゼルギウスの自己戀愛は餘りに强かつたので、彼は自ら破戒罪の場合に於いてさへも、それは理想我に從ふ事の出來ない自分の現實我が軟弱だからだとは氣がつかず、神も神の存在も否定したほどであつた。「さうだ俺は自分の片をつければならない、神なんか有るものか。どうして片をつけるかな? 入水か? 俺は泳ぎが出來る——溺れないだらう。絞れるか? そこに俺の紐がある、木の枝に。」併し神父ゼルギウスは、この決心を遂行しない。それは明かな事だ。神父ゼルギウスは理想我に失望してゐたのだ、その個人我を殺し切る程充分には、彼の個人我を憎む事は出來なかつた。如何なる自殺も、常に一つの性的行爲であつて、形式的には「愛する者に危害を加へる者を殺す」といふのである。理想我は、固有の本能力を持つてはゐず、たゞリビドー纏綿によつてのみ、その力を得るのである。破戒後の神父ゼルギウスの精神狀態を數言に要約したら何と云へばよいか? 性我は、以前には現實我に、後には理想我にリビドーを纏綿したが、今では自分の獨自存在を、主張してゐる。或ひは自分の特殊存在を主張してゐる。かくて個人の領域、內心の環境を棄てゝ、そのリビドーを他我に向ける。從つて、神父ゼルギウスのその後の生活方向は、性我によつて決定されねばならなかつた。マリーとの交りは、人間愛への第一步として見なされる。これは決して逆說ではない。重要な事は、閉鎖されてゐた自己戀愛圈の破壞された事である。

　神父ゼルギウスは寢込んだ。「だが、この睡眠は一寸しか續かなかつた。彼は直ぐ目醒めて、夢想か囘想を始めた。その時彼は、まだ幼い頃、田舍の母の家にゐるわが姿が眼に浮んで來た。……その時、男の子仲間の中へ、パシェンカといふ女の子が連れ込まれる。人々はこの女の子と遊ばなければならない、だがそれは退屈だ。彼女は馬鹿だ、人々は彼女を嘲笑して了ふ。人々は彼女に、どんなに泳げるかやつて見せろと强要する、彼女は床板の上に橫はつて、水氣のない床の上でそれをやつて見せる。すると皆は笑つて、彼女を馬鹿女にして了ふ、

　こゝで、トルストイの天才的な藝術的直觀は、フロイドの天才的な科學的直觀と一致してゐる。フロイドは言ふ。總て最近に起きた外傷的出來事は多種多樣な聯想で、多少とも幼年時代の同樣な出來事を呼び醒ますものだと。ゼルギウスは凡てのものを失つて了ひ、何の救ひも無くなつて了つた時に、彼の考へは無意識的に幼年時代へ、「母の家」へと歸つて行つた。神父ゼルギウスは或る愚直な娘と關係があつた。彼はその娘の愚かさを自

分の利己的な享樂に利用したし、娘も從順に彼の願望を滿たしてやつた。勿論、ゼルギウスは、その方の願望を持つてゐなかつたならば、墮落しなかつたゞらうし、愚直な娘は彼を誘惑する事は出來なかつたゞらう。それは明かだ。ゼルギウスの聯想が愚直なマリーからパシェスカへと移つて行つた道筋は、次の樣である。「彼女と遊ばねばならないが、それは退屈だ」――マリーを治さねばならないがそれは退屈だ、だから全く違つた事がしたい。「彼女は愚直だ」は――マリーは愚直だ。――「彼女は床板の上に横はり、水の無い床の上で、如何にして人々が泳ぐかといふ事を示す。」水のなき床上での水泳運動は、交合運動等々を聯想させる。

パシェンカとの此處に引用した場面には、普通の幼兒の殘虐性、即ち、小さな形に於ける加虐性(サディズムス)が現はれてゐる。故に我々は、神父ゼルギウスの思ひ出は、加虐的な(サディスティッシュ)行爲から發生してゐる事を知る。

それからゼルギウスは、もう目を醒まして、彼が屢々パシェンカに逢つた事を思ひ出した。彼女は不幸な結婚をして、息子を失ひ娘も結婚生活が不幸だつたので、今では孫を養つてゐた。遂ひに彼は寢込んだ。さうして、一人の天使を夢に見た。天使は彼の所へやつて來て言つた。「パシェンカの所へ行つて、彼女の口から、汝は何をなすべきか、汝の罪はどこにあるか、汝の救ひはどこにあるか、汝の罪はどこにあるかを聞け」と。彼は目が醒めた。さうしてそれは神の啓示であつたと決めて……出かけて行つた。

パシェンカは、完全に自己を沒却して活動する人間愛の、意義深き一實例である。「人と人との間の惡い關係を耐忍する事は、彼女には殆んど肉體的に不可能であつた。彼女は罪惡を見たゞけで直ぐ、恰かも惡臭をかいだ樣に、またひどい騷音をきいた樣に、或ひは身體を打たれた樣に惱んだ。」彼女はその生活が高我で出來てゐる人間であつた。ゼルギウスは、この道を進むべきだつた。天使の出現は、この高我の行爲に外ならなかつた。こゝに高我と性我との關係に就いての非常に重大な問題が起きる。高我に對しては、個人我と、殊に自己戀愛とだけが正に對立し、性我とその非精神的纏綿とは、その反對に、ついで起るべき昇華作用に對して、寧ろ好都合の狀態にあるらしく見える。この問題に就いては、尙更めて論を進める。

今はこの物語の分析を繼續しよう。パシェンカとの最初の會合には、自己戀愛的自己讃美の、周知の特徵が見えてゐる。

プラスコーヤ・ミヒャイローフナ(卽ちパシェンカ)は彼を見ても分らなかつた。……お許し下さい、神父樣。多分お

腹でもお空きですか？　彼はパンとお金を受取つたが、プラスコーヤ・ミヒャイローフナは、彼が立ち去りもしず、彼女を見詰めてゐるので不思議に思つた。――「パシェンカ、わしはお前の所へ來たのだ、わしを置いててくれ！」……パシェンカは乾からびた胸を摑み、口を開いて目を丸くした。――「だつて、本當ですか？　スチェーパ、ゼルギウス、神父ゼルギウス様！」「さうだ、神父ゼルギウスだ。」とゼルギウスは小聲で言つた。「ところがゼルギウスではないんだ、神父ゼルギウスではないんだ、大罪人のシュテーファン・カサツキイだ。さ迷へる大罪人だ。わしを迎へ、わしを助けてくれ！」「でも、本當ですか！　どうして貴方は一體さう卑下なさるのです？　併し貴方はとにかくいらつしやつたんですね！」

他人をあつと云はせようとの、昔ながらの、例の願望が再び自己苛責と結びついてゐる。だが、今は、あつと云はせようとの願望は、遂ひに衰へてゐる。この方法でこれまで實に凡ての物が得られたのだ。併しこの自己苛責は尙ほ、それ以上の發展への可能性を與へてゐる。自己苛責は、サディズムスからマゾヒスムスへと移行し得る。トルストイは次の樣に書いてゐる。

「パシェンカ、わしは聖者ではない。素朴な普通の人間でさへもないのだ。わしは罪人だ、汚らはしい、卑しい、迷へる傲慢な罪人だ。惡人だ！　凡ての罪人より惡いかどうか知らないが、少くとも凡ゆる惡人よりも惡い男だ。」それからゼルギウスはパシェンカに、その生活を物語つてくれと懇願した。彼女が彼に、その赤貧の、苦しい勞働者の生活を物語つた時、カサツキイは、パシェンカの夫が彼女をなぐつたと噂にきいた事を思ひ出した、さうしてカサツキイは今分つた：：どんな風に行つてゐるかゞ、殆んど直觀的に分つた。

その樣に、ゼルギウスはサディズティシュにしてマゾヒスティシュな場面を經驗してゐる。我々はトルストイの日記を讀んで、當時、マゾヒスティシュな場面の影像が彼自身を苦しめてゐた事を知る。

「私は屢々苦しみたいと望んだ、迫害を受けたいと願つた。この事は、私が怠惰であつて、自分では勞働しようとせず、わが爲めに他人を働かせようとした事を示すものだ。――私はたゞ苦しめて欲しいと思つてゐるのだから人々は私を苦しめればよいのだと云ふわけで。」（レオ・トルストイ　日記第一卷、一八九五年――一八九九年）

だがトルストイはこの道を取らなかつた。

パシェンカは物語の間、絶えず娘や婿のために、話しを中斷されて、彼等に色々な用をしてやつた。パシェンカは不平も言はず、皆んな思ふ樣にしてやつた。「だから、俺の夢に出てゐた通りだ。パシェンカこそは、私のさうなるべくして而も成らなかつたその姿である。私は神の爲めだといふ口實の下に人間の爲めに生きたが、彼女は自分では人間の爲めに

生きてゐると思ひ乍ら、實は神の爲めに生きてゐるのだ。さうだ、私の樣な生き方をした者には、神はない、人間の名譽などには、神は存在しない。私は神を求めよう。」

カサツキイは遍歷者となる。八ケ月の後、彼は、通行券を持たぬ、故鄕のない浮浪人だとして逮捕されて、シベリヤへ追放された。「シベリヤで彼は、或る金持の百姓に頭を下げて、今はそこに生活してゐる。彼は主人の野菜園で働き、子供達を敎育し、病人を看護してゐる。」

この物語は結末が未定稿のまゝになつてゐる。こゝに引用した大團圓は、故に、たゞ結果をつけるために、書かれたに過ぎぬらしい。どこにも、ゼルギウスが神を見出した事は書いてない。ゼルギウスは自巳戀愛的な、主我的・理想的な努力を、對象性慾的な生活を、經驗した。彼には、高我に依つて組織された生活だけが殘つてゐた。併しこの生活はトルストイには近づき難きものであつた。彼はこの生活をまざ〳〵と考へる事は出來なかつた。のみならず、ゼルギウスには、人間愛なんてどんなものか分らなかつた。

沒彩色的な言葉で書かれた、上に引用した終結の前に繪畫的な場面が描かれてゐる。

或る時ゼルギウスは二人の老婦人と一人の軍人と一所に旅をしてゐた。さうして紳士淑女の一團に出逢つた。その中に一人のフランス人の旅人がゐた。その紳士淑女等は、フランス人に、ロシヤの巡禮者を示さうと足を留めた。「彼等は、ゼルギウス達には分るまいと思つて、フランス語で話した。フランス人が言つた、巡禮する事がたしかに神の御意に召すかどうか——きいて御覽——（譯者註、圏點の附してある箇所はフランス語である。）人達は彼等にきいた。老婦人達は答へた「どんなに神樣がそれをお嘉び下さるでせう、私等は足ではそこへ行きましたが、心でもやはりそこへ行くでせうかどうでせう？」人々は軍人にきいた。彼は、一人ぼつちで、どうしたら良いか分らないのだと答へた。人々はカサツキイに、何といふ名かと尋ねた。「神の下僕です。」——何と言つたのか、彼は答へない——彼は、神の下僕だと言つてゐる——あれは牧師の息子に違ひない、さういふ血筋を持つてゐる、金を少し持つてゐるか？ フランス人は小金を持つてゐた、さうして各々に二十コペーケを與へた。——だがこれは蠟燭代としてゞはなく、お茶をおごる爲めに與へるのだと彼等に言つて下さい——親しいお前達にとカサツキイの肩を手袋をはめた手で叩き乍ら、彼は笑顏で言つた。——「キリストがあなたに報ひ下さるように」とカサツキイは、帽子を被らず禿頭のまゝで挨拶し乍ら答へた。さうしてカサツキイには、この會合はことに嬉しかつた。彼は人間の考へなど頓着しなかつたので。

だが實際不思議な事は、ゼルギウスがフランス語で答

へて一團の人々を大いに驚かしてやる事を止めた事だ。それは彼の性格には、非常に相應しい事だらうのに。だがこれは決して謙讓のためではなく、またしても自讃心が彼をさういふ風にしたのだ。それは一つの内向であつた。卽ち内心で自讃したのだ。ゼルギウスは、他人を驚愕ささうとの願望を、本當に征服して了つてゐた。卽ち彼は露出慾を克服して了つたのだ。併し露出慾に對してはこの樣に勝利を占めたが、またも彼に、自分自身に感動する機會を與へたといふ事は、彼が實に、一箇の自己戀愛者であつた事を示すものだ。「人は搖籃に於けると同じ性質を以て墓へ這入つて行く」――とロシヤの諺は言つてゐる。

さてゼルギウスの全生涯を、リビドー說の精確なる表現で要約してみよう。人は二つの本來的な性對象を持つ、自分自身と養つてくれた女とである。換言すれば、二つの道がある。自己戀愛（ナルチスムス）の道と對象愛の道とである。ゼルギウスは結局、自己戀愛的な理想化の道を進んだ。さうして、彼が最高點に到達しても何等滿足を見出さずして、失敗を招いた時、彼には第二の道が開けてゐた。ゼルギウスは罪の墜落のために、直ぐ樣その道を渡つて行つた。この道に踏込んで、彼はまづ思想的に、サディスムスから自己サディズムス（自己苛責）を通つてマゾヒスムスへ到るといふ性慾の定石的な道を、手短かに繰返した。マゾヒスムスからは、沒性慾的人間愛への道、或ひは昇華への道が一番近いだらう。が、この道をトルストイは我々に示してゐない。作者はその道を平凡な言葉で暗示してゐるに過ぎない。

『神父ゼルギウス』の物語が心理的な關係に於いては、自傳的な性質を持つてゐる事は疑ひもない。ブルガコーフ*が全く正しくも認めたやうに「こゝは寺院ではなくヤスナヤ・ポリヤーナ（トルストイの領地）である。さうして、僧衣を透き通して、皆人のよく知つてゐる例の上衣（ブルーゼ）が丸見えである。」「如何に雜多な訪問者の群が、ヤスナーヤに立寄つた事だらう！　馬來群島の息子達、オーストラリヤ人、日本人、アメリカ人、シベリヤ逃亡人又は全ヨーロッパ國の代表者達が、この村を訪れ、さうして本國に於いて、そこに住んでゐる老豫言者の言語、思想が、如何に大きいかを物語つてゐる。」**

註一　「人間神と人間獸」
註二　ビリュコーフ

トルストイは名聲を非常に愛したけれども、屢々それを煩はしく感じた。この物語の中に次の箇所を見出す。「彼は頭惱の明晰な時に、屢々考へた。私は、以前泉のあつた場所に似てゐる。『透き通る清水の微かな泉が、私の身體

から靜かに、私の身體中を通つて湧き流れてゐた。それは眞の生活であつた。……だが今は、――水が溜らない中に、もう咽喉の渇いた人々が、突き合ひつゝ押し寄せて來る。さうして凡てのものを踏み蹂つて了つて、汚れしか殘つてゐない。』 さう彼はたまには考へた。併し彼の平素の狀態は倦怠であつた、さうしてこの倦怠のために自分自身で感動することであつた。」

トルストイには眞の利他的人間愛は缺けてゐた。併し如何にその事を解釋すべきかは、次の章で論じよう。

信仰に就いての懷疑、その爲めの絕えざる苦しみ、高き理想への苦しみ、自分自身、身近の人々、並びに全世界との苦しい葛藤、眞理への飢渴、懷疑癖――それがレオ・トルストイの、この偉大なる自己戀愛者の自己批判時代後に於ける精神狀態である。ビリュコーフの言つた樣に、單に調和がないばかりでなく、トルストイには魂の均衡といふものは、殆んど得られなかつた。

この事は『神父ゼルギウス』の物語によつて明瞭に示されてゐる。それに對してはツルゲーネフの言葉が實に良く肯綮に當つてゐる。「餘り人に見せたくない、魂の部分から、實に澤山のものが、文學作品の中に滔々と流れ込んで來る。[**]」

メレジュコウスキイはトルストイについて言つてゐる。「彼は如何なる人をも愛さなかつた。彼自身をさへも彼は、窮極的惱みのない、怖れ氣のない愛を以て、愛することを敢てしなかつた。だが、これまで、誰が彼よりも大きな苦しみを以て愛を望んだ事か？ 彼は決して何も信じなかつた。だが、これまで、誰が彼よりも飽く事なく、信仰に渴えてゐたか？ それが[***]凡てゞはない――併しそれは偉大なことでないだらうか？」と。

註一 ビリュコフ、凡てこれ等の特色が原素を構成し、その原素によつて、この藝術家的哲學者の魂の調和が、次第に作り出されたといふ事は明かである。

二 ビリュコーフ第二卷。ツルゲーネフのトルストイにあてた手紙から。ツルゲーネフのこの言葉は、ランクが彼の著書のモットーとして（近親姦動機等々）選んだ、ジヤン・パウルの言葉に一致してゐる。

三 メレジュコウスキイ『トルストイとドストイェフスキイ』。

太陽（D・H・ロレンス作）

――Sun (D. H. Lawrence)――

岩倉具榮譯

i

「あの女を連れていらつしやい、太陽の當る所へ。」と醫者達は云つた。

彼女自身は太陽のあたるところはどうかと思つてゐたが、子供と看護婦と母親と一緒に、海の彼方に連れて行かれるまゝになつてゐた。

船は眞夜中に出帆した。そして二時間、彼女の夫は妻と一緒に居た。その間、子供は寢床に眠り船客達は甲板の上に出て來た。暗い晩であつた。ハドソン河はすつかり暗黒に閉ざされ、細かい光りの流れに震へてゐた。彼女は手摺にもたれて、見下しつゝ考へに耽つてゐた。――こゝに海がある、それは人の想像するよりも深く、又思ひ出に滿ちてゐる。その瞬間に海は、永へに生きて來た渾沌の蛇の樣に身を擡げる如く思はれた。

「かういふ別れはよくないねえ。」彼女の夫が側で彼女に云つてゐた。「それは全くよくない。僕は嫌ひだ。」

彼の語調は懸念と不安とに滿ちてゐた。そしてそこには希望の最後の藁にすがりつく樣なある調子があつた。

「いゝえ、私は嫌ひぢやありませんわ。」と彼女は平板な聲で答へた。

彼女は、二人――彼と彼女と――がお互ひにいかにひどく別れ度いと望んだかを思ひ出した。別離の情は彼女の感

情をひくことは少なかつたが、只彼女の心をもつと深く突き刺して悲哀に沈ましめるものがあつた。
その時、彼等は眠れる吾が兒を見つめたが、父親の眼は涙にぬれた。けれども問題は眼が涙にぬれることではなく習慣のリズムであつた。長年の、生涯に亘る習慣の鐵の様な深いリズム、深く打ち下された力である。
そして彼等二人の生命の中で、打ち下された二つの力——彼のと彼女のと——は爭つてゐた。反對に動く二つのエンヂンの様に、彼等は互ひにぶつかり合つた。
「みなさん上陸！ みなさん上陸！」
「モウリス、あなたは上陸しなければなりません！」
そして彼女は自分で考へた。彼にとつてはみんな上陸だ！ 私にとつては海に出掛けることだ！ と。
そこで、彼はボートがジリジリ動き出した時に、ものうげな眞夜中の棧橋の上でハンカチを振つた。大勢の中でただ一人で。大勢の中でただ一人で！（ヨウ〳〵！）
渡船は、光りの窓の列を積んだ大きな皿の様に、未だハドソン河を曲線狀に横ぎつてゐた。あの黑い口はラッカワンナ・ステイションに違ひない。
船はどん〳〵下つて行つたが、ハドソン河は果しがない様に思はれた。けれども遂に彼等は角を廻ると、砲臺の所で、貧しい光りの港があつた。自由の女神は、不機嫌に松明をかゝげてゐた。そこまで來ると、海水はあたりを洗つてゐた。
そして大西洋は溶岩の様に灰色であつたが、彼女はとうとう太陽の當る所へ來たのであつた。彼女も人なみにこの上なく紺碧の海に臨んで一軒の家を持つた。その家には大きな庭、と云ふよりは、葡萄やオリーブの枝もたわゝに實る葡萄畑がついてゐて、海岸の平地に至るまでテレースが續いてゐた。そしてその庭は神祕の場所に滿ち、地の裂目にまで垂れ下るレモンの繁つた並樹、又は隱された、澄明な綠の水溜りがあつて、その上、泉が小さな洞穴から湧き出てゐた。古代イタリーのシキュライ族はギリシヤ民族の來る前にこの洞穴の水を飮んでゐたのであつた。そして一

頭の灰色の山羊は、何れの墓穴も空虛になつてゐる古墳につながれて鳴いてゐた。そこには眠り草の香りがにほひ、遙か彼方の火山に雪が見えてゐた。

彼女はそれ等凡てを見た。そして何となくそれに依つて心は和められるのであつた。併しそれは全く外部的なものであつた。彼女は現實としてそれに氣をとめなかつた。彼女は内心にあらゆる怒りと失望とをたゝえてゐたに拘らず相變らず彼女自身で、何事にも感情を動かすことが出來ないと云ふのが現實であつた。子供のために彼女はいらいらさせられて、心の平和はそのために臺なしになつた。彼女は子供に對して恐ろしく、甚だしく責任を感じた。子供の吸ふ息一息が自分の責任でなければならない樣に。そしてそれは彼女にも、子供にも、それから他の關係のある凡ゆる人にとつて苦痛であつた。

「ねえ、ジュリエットや。お醫者が着物を脱いで、日光浴をする樣にお前に云つたんでせう。何故、お前はさうしないの？」と彼女の母親は云つた。

「氣が向いたらしてよ。お母さんは私を殺し度いの？」と、ジュリエットは彼女にとびかゝつた。

「お前を殺すつて、とんでもない！　お前のためを思ふばかりさ。」

「後生だから、私のためなんか思はないで頂戴。」

母親は大變氣を惡くして、怒つてとうとう行つて了つた。

海は白くなつて行つた。――さうしてやがて見えなくなつた。雨は降り注いだ。日光の爲に建てられた家の中も、寒くなつた。

またもや朝になつて、太陽は鎔けるが如き赤裸の姿を現はし、水平線上にキラ〳〵と輝いた。その家は西南に面してゐた。ジュリエットは寢床に横たはつて太陽の上るのを見守つてゐた。宛も彼女は以前に太陽の上るのを見たことがないかの樣であつた。未だかつて赤裸の太陽が夜を振り拂つて、水平線の上にすつきりと立上るのを見たことがなかつた。

そこで日光の中を眞裸かで步き度いといふ慾望が、彼女の心にひそかに燃立つのであつた。彼女は秘密の樣に、その慾望を抱いた。

併し彼女はその家から――人々から、離れて了ひ度いと思つた。而もオリーブの樹が皆眼を持つてをり、凡ゆる坂路が遠くから見える國で、隱れて步くのは容易ではない。

けれども彼女はある場所を見出した。岩石の絕壁が、海と太陽とに向つて突き出て居り、その上に大きな仙人掌、刺の多いひらうちわと呼ばれる平たい葉の仙人掌が生え繁つてゐた。この仙人掌の青灰色の圓丘から一本の糸杉の樹がそびえて居て、その幹は太くて色は靑ざめてをり、そしててつぺんは、なよ〳〵と靑空を摩して傾いてゐた。その樹は番人が海を見張つてゐる樣に立つてゐた。或ひは又低い、銀色の蠟燭の樣でもあり、その大きな炎が光りに對して暗く見えてゐるやうでもあつた。大地が暗黑な舌を誇りかに突き出してゐるやうでもあつた。

ジュリエットは糸杉の樹の側に腰を下して、着物を脫いだ。ねぢ曲つた仙人掌は彼女の周りに、恐ろしい、而も魅力ある森をなしてゐた。彼女は坐つてその胸を太陽に向け、自らを投出さねばならない殘酷さに對して、今なほある堪え難い苦しみを持つて溜息をつくのであつた。

併し太陽は靑空を渡り行きつゝ、その光りを投げ下した。彼女は、何時までも成熟しないやうに思はれる自分の胸の上で、海の柔かい空氣を感じた。けれども彼女は殆ど太陽を感じなかつた。萎んで熟すことの出來ない果物だ、彼女の胸は――。

併し、間もなく、彼女はわが胸の內に太陽を感じた。かつて愛を溫く感じたよりもつと溫かく、乳や彼女の赤ん坊の手よりもつと溫かい太陽を感じた。遂に、遂に、彼女の胸は暑い太陽に當つてゐる長い白い葡萄の樣であつた。

彼女は着物をすつかり脫いで了つて日光の中に眞裸かで橫たはつてゐた。そして橫になつたきりで、指の間から中央の太陽を、その靑い、波動する圓體を見上げた。その外緣からは輝きが流れ出てゐた。驚くべき靑さに波動し、生々とし、その外緣からは白熱火を流し出す太陽！　彼は靑火の形相を以て彼女を見下してゐた。そして、彼女の胸と

顔、彼女ののど、その疲れた腹、その膝、股と足とを包んだ。

彼女は眼を閉ぢて横たはつてゐると、ばら色の炎が眼瞼をつき透した。それは餘りに激しかつた。彼女は手をのばして眼の上に葉を置いた。それから彼女は再び横になつた。この長い白いへうたんも日光の中でやがて熟して金色になるに違ひなかつた。

彼女は太陽が骨の中までも、いや〳〵、それどころか、彼女の感情と思想の中まで貫くのを感じることが出來た。彼女の感情の暗い緊張は弛み始め、彼女の思想の冷い暗い凝塊は解け始めた。彼女はすつかり溫かく感じ始めてゐた。彼女はひつくりかへつて、肩を日光の中に解けさせた、腰も、腿の後ろも、かゝとまでも。そして彼女は自分に起りつゝあることに驚いて、半ばぼうつとして横たはつてゐた。彼女の疲れた、凍つた心は解けつゝあつた。そして解けつゝ蒸發してゐた。

彼女はまた着物を着てからもう一遍横になつて、糸杉の樹を見上げた。なよ〳〵した纖維のやうなその頂は軟風に吹かれてあちらこちらにゆれてゐた。その間にも彼女は、偉大な太陽が天空を渡つて行くのを感じてゐた。

かくて、茫然として彼女は家へ行つた。太陽のために目がくらみ、目が見えなくなり、只半ば眼が見えるばかりで歸つて行つた。そして彼女の目の眩んだことは彼女にとつては富であつた。彼女の茫とした、溫かい重い半意識は財寶の如くであつた。

「お母ちやん！　お母ちやん！」子供は彼女に向つてかけて來た。例の獨特な、小鳥の様な如何にも不斷に母なくては居られぬと云ふ可愛いゝ喘ぎの中に、彼女の方にかけて來た。彼女の心は遂に太陽のためにしびれてゐたので、子供からの愛に對して自分の方からも愛の呻きを感じ返すことの出來ないのに我ながら驚いた。彼女は子供を腕に抱き上げたが、かう考へるのであつた。「この子はこんなに肉塊ではいけない！　日光に當てたら、ぴん〳〵してくるだらう。」と。

子供の小さい手は彼女に、特に頸にからみつくので、彼女はむしろ不機嫌であつた。彼女は自分ののどを引いた。

さわられ度くなかつた。彼女は子供をそつと下に置いた。

「走つて御覽！」と彼女は云つた。「日光の中を走つて御覽！」

そしてその場で彼女は子供の着物を脫がして、溫かいテレースの上に裸かで置いた。

「日向でお遊び！」彼女は云つた。

子供はびつくりして、泣き度くなつた。けれども彼女は、自分の身體にものうげな溫かさを感じ、心には全くの無闘心を覺えつゝ、赤いタイルの上を子供の方にオレンヂを一つ轉がしてやつた。すると柔かい、身體の固らない小さな子供は、それを追つてよちよち步いた。やがてすぐに子供はオレンヂをつかんだが、自分の肉體にそれが妙な感じがしたので、落して了つた。すると子供はべそかきさうな顏をゆがめて、母の方をふりかへつた。自分が勇ましくなつたのでびつくりしたのであつた。

「オレンヂを持つておいで、」彼女は子供の怖れに對して自分が深く無闘心であるのに呆れながら云つた。「お母ちやんのところへオレンヂを持つておいで。」

「この子はお父さんの樣には育てない。」と彼女は一人言を云つた。「日の目を見たこともない虫の樣には育てない。」

ii

彼女は子供を生んだ爲に子供の全存在が彼女のせいでゞもあるかのやうな責任感に苦められて、子供のことが以前には心に重くるしく掛つてゐたのであつた。子供の鼻汁が流れてゐてさへ、それがいやで彼女は命を刺されるやうであつた。宛かも「お前のひり出したものを覽ろ！」と。自分で自分にかう云はずにゐられないかのやうであつた。

今やある變化が起つた。彼女はもう子供に命がけの闘心を持たなくなり、張り切つた心配と意思とを子供から引離して了つた。そして子供はそのために益々よく育つた。

彼女は內心で、見事な太陽のことを、さうしてその見事な太陽と交つたことについて思つてゐた。彼女の生活は今

や全く一つのお祭りであつた。彼女はいつも寢床の上に眼をさましたまゝで夜明けを待ち、灰色が青白い金色に色づくのを見守り、雲が海の端にありはしないかを知らうとしてゐた。太陽が赤裸々に、全く鎔けたやうに立上り、そしておだやかな空に青白い火を投出す時こそは、彼女の歡喜であつた。

けれども時々太陽は大きな、はにかむでゐる生き物の樣に、眞赤になつて出て來た。又ある時は、怒れるものゝ如く、ゆつくり押し上げ、つき上げつゝ、ゆるやかな深紅色となつた。更にある時には、太陽は見えないで、太陽が壁のやうな曇りの後ろで動いてゐる時に只、横雲が上の方から金色と緋色を投げ下してゐるだけの事もあつた。

彼女は幸福であつた。週又週と過ぎて行つた。そして曉方は時に曇り、午後も時に灰色になることもあつたが、陽の照らない日は一日とてなかつた。そして冬とは云へ、大抵の日は、輝くばかりに日の光が射してゐた。さゝやかな野生のさふらんは紅紫色に色どられて唉き出で、野生の水仙は冬の星ときらめいてゐた。

毎日彼女は、糸杉の下に、脚下が黃色い絶壁になつてゐる圓丘の上の仙人掌の並樹の間に下りて行つた。彼女は今やだん〳〵悧巧に機敏になり、たつた一枚の灰鳩色の肌着とサンダルだけつけて行つた。で、何れの隱れた小隅に這入つても、すぐ樣彼女は太陽に向つて裸かになることが出來た。そして彼女が再び身體をおほふや否や灰色になり見えなくなつた。

毎日、朝の中晝近くまで、彼女は太陽が空高く樂しげにかけめぐつてゐる間、力強い、銀色の爪足もてる糸杉の樹の下に橫たはつてゐた。今や彼女は自分の身體の凡ゆる筋に至るまで太陽を受け、冷い影は一つだに殘してゐなかつた。そして彼女の心、あの不安な、張り切つた心は、太陽に當つてこぼれ落ち、只熟した種の殼だけを殘す花の樣に全く消えて了つた。

空の太陽は緣の方が白熱の火となつて靑く鎔け、火を吹いてゐるのを彼女は知つた。そして太陽は世界中に照り渡つてゐたが、彼女が着物を脫いで橫たはつてゐる時は、太陽が彼女に光りを集中するのであつた。太陽が何百萬人の上に照り渡つて、なほその上キラ〳〵と輝く比ひなき太陽が彼女一人に焦點を向けるのは、太陽の不可思議の一つで

あつた。

彼女は太陽を知り、太陽の方も、この言葉の宇宙的に肉的な意味に於て彼女を知つた(knew)といふ確信を彼女は持つたが、それと同時に、彼女は人々から切離されてゐるといふ感じと、全人類に對する或る輕蔑の念を持つた。彼等は甚だ本然的でなく、あまりにも太陽に當らな過ぎるのであつた。彼等はそれほど墓場の虫の様であつた。驢馬を連れて岩の多い昔からの小道を辿り行く百姓でさへ、日に焼けてはゐても、本當には太陽を受けてはゐなかつた。そこには殼の中の蝸牛の様に、小さい柔かな白い恐怖の心があつた。そして人の心は死の恐怖と、生命の自然的燃燒との恐れの中にちゞこまつてゐた。蝸牛は全然進み出ようと敢へてしなかつた。いつも內心でおびえてゐた。凡ての人間はそんな風であつた。

どうして人間をそんな風でほつておけよう！

彼女は人々に對して、男に對して無關心になると共に、今は見られない様にといふ心配はそんなにしなくなつた。彼女は自分のために村に買物をしに行つたマリニナに、醫者が日光浴を命じたのだと話した。それで十分だ。

マリニナは六十を越えた女で、丈が高く、やせてゐて、身體が眞直で、ちゞれた黑灰色の髮と、何千年ものずるさを湛えた黑灰色の眼と、凡ゆる長い經驗を積んだ者の持つ笑ひを湛えてゐた。悲しきは經驗の缺乏である。

「日向に着物を着ないでゐるのはさぞよろしう御座いませうね。」とマリニナはジュリエットを鋭く見ながら、眼にずるさうな笑ひを湛えて云つた。ジュリエットの髮、束にした髮は、彼女のこめかみの所に小さい雲の様に懸つてゐた。マリニナは大ギリシヤの女であつた。そして遠い思ひ出をいだいてゐた。彼女は再びジュリエットを見つめた。

「あなた樣がお天道樣にいやな思ひをさせまいと思召すなら、あなた樣は御自分で美しくおなりにならなければなりませんですよ。」と彼女は過去の女の持つあの奇妙な、息もつかない哄笑を爆發させて附け加へた。

「私が美しいかどうか誰が知つてゐて！」とジュリエットは云つた。

併し美しからうとなからうと、彼女は太陽に鑑賞せられたことを感じた。どつちにしても同じことである。

眞晝の太陽を遁れて、時として彼女は岩の上を越え、絶壁の端をよぎり、冷い、永への影にレモンの垂れ實つてゐる深い壑に下つて行き、ひそかに肌着を脱いで、深い淸澄な綠色の、とある淵で素早く我が身を洗つてゐると、レモンの葉の下の綠色の微光の中で、自分の全身がばら色になり、桃色になり、遂に金色に變るのを氣付くのであつた。彼女は別人の樣であつた。彼女は別人であつた。

かくて、ギリシヤ人が、白い、日に當らない身體は魚のやうで、不健康だと云つたことを彼女は思ひ出した。

そして彼女は自分の皮膚にオリーヴ油を少しすり込んで、それから暗いレモンの樹下蔭を一寸さまよひ、臍にレモンの花をさして落さないやうにして歩きつゝ一人で馬鹿笑ひするのであつた。百姓たちが彼女を見ることも時にはあつた。併したとへ見ても、彼等の方が却つて彼女よりも恐れてゐるのであつた。彼女は着物を着た男の身體には、白つぽい恐怖の芯があるのを知つてゐた。

彼女は、自分の小さい男の子にさへそれがあるのを知つてゐた。彼女が顏に太陽を示して子に向つて笑つたら、如何に彼は母を信じなかつたことであらう！　彼女は子供に、毎日太陽の光りの中を裸かでチョコチョコ歩きなさいと云つた。そして今や彼の小さい身體も桃色となり、そのブロンドの髮は額から厚ぼつたく突き出で、その頰は日に燒けた皮膚の金色の微妙さの中に、ざくろの樣な緋色をしてゐた。彼は快活で健やかとなり、召使達は、彼の赤と金と碧の身體を愛して、彼を空から來た天使と呼ぶのであつた。

けれども彼は母親を信じなかつた、母親は子供を笑つた。そして彼女はその小さな顰みの下の野生的な靑い眼に、例の恐怖の中心、不信の中心(それを彼女は凡ゆる男性の眼の中心にあると彼女は今や信じてゐた)があるのを見た。

彼女はそれを太陽の恐れと呼んだ。

「彼は太陽を恐れてゐる。」と、彼女は子供の眼をのぞき込み乍ら、一人言を云ふのであつた。

そして子供が太陽の光りの中をチョコチョコ歩き、アチコチ動いたり轉んだりして、可愛いゝ小鳥の樣な音を立てゝゐるのを見守つてゐながら、彼女は子供が內心太陽から固く身を守り隱れてゐるのを知つた。彼の精神は、その身

内にある殻の中の濕つた、冷い割れ目にある蝸牛の様であつた。それにつけて彼女は子供の父親を思出した。彼女は何とか子供を向ふ見ずな、元氣のある態度でその殻の中から出て來るやうにさせることが出來たらと思つた。

彼女は仙人掌の間の糸杉の樹の所まで、子供を連れて行くことに決めた。彼女は子供のために、とげを氣を付けてやらねばならなかつた。併し確かにその場所で、彼は內心の深い小さな殻から出て來るのであつた。あの小さな文明的緊張は彼の眉間から消え去るであらう。

彼女は子のために毛布をひろげて、彼を坐らせた。それから彼女は肌着を脫ぎすてて、自分も横になり、青空高く飛ぶ鷹と、高く頭上にかゝる糸杉のてつぺんとを見やつた。

男の兒は毛布の上で石を持遊んでゐた兒が立上つてチョコチョコ步き出したので、彼女も身を起した。兒はふりかへつて彼女を見た。彼の青い眼からは、それは殆ど眞の男性の、挑む如き、熱烈な眼ざしであつた。そして彼は、皮膚が黃金の様な亞麻色の中に緋色を伴つて、美しかつた。彼は本當に白くはなかつた。彼の皮膚は金色にいぶされてゐた。

「とげに氣をつけ、ねえ坊や。」と彼女は云つた。

「とげ！」と兒は小鳥の囀るやうな聲で鸚鵡返しに、解せぬげに云つて、なほも肩越しに母を見返してゐた。その様子は繪に描いた裸の天使の様であつた。

「ばつちい、いた〳〵のとげがあるからね。」

「たた、とげ！」

彼は乾いた、野生の薄荷を引張り乍ら、石の上を、小さなサンダルの足でよち〳〵步いた。彼が刺の方に向つて倒れかゝらうとした時、彼女は蛇の様に素早く彼にとびかゝつた。彼女は我ながらびつくりしたほどであつた。「何て私は野育ちの猫なんだらう、本當に！」と彼女は一人言を云つた。

彼女は毎日、太陽の照つてゐる時に兒を糸杉の樹の所に連れて來た。

「おいで！」彼女は云つた。「さあ、糸杉の樹のところに行きませう。」

そしてアルプスおろしの風が吹く曇つた日で、そこへ下りて行けない時には、子供はしつきりなしに泣くのであつた。「糸杉の樹よう！　糸杉の樹よう！」と。

彼も母と同じ程、そこをなつかしがつた。

日光浴をすることだけではなかつた。はるかにそれ以上のことがあつた。彼女の内心に深くひそむ何ものかゞ解けゆるんで、そして彼女はとろけた。彼女の自覺してゐる意識や意志よりも深い内心のある神秘的な力によつて、彼女は太陽と結びつけられた。そして流れは彼女の子宮から自づと流れ出た。彼女自身、彼女の意識せる自我は第二次的、第二次的の人、殆ど傍觀者であつた。本當のジュリエットは太陽に向つて彼女の深い體內から湧き出づるこの暗い流れであつた。

彼女はこれまでいつも自分自身の主人であり、自分のしてゐることに氣を付け、自分の力に對して固くなつてゐた。今や彼女は自分自身よりも偉大な何ものかで、自ら流れ出る全く別種の力を內心に感じた。今や彼女はぼつとしてはゐたが、自分自身を越えるある力を持つてゐた。（未完）

精神分析の野蠻主義を最も端的に藝術の形で表現してゐるものだと思ふ。併し何と云ふ美しさがあることだらう。この位のエロティシズム――自然神と人間との間のエロティシズム――をさへ英國人は禁制したものと見える。彼はやはり詩人だ。この美をさへ味ふことの出來ないほど英國は抑壓の國なのだ。我々にはあまりにも當然のことに思はれる。この小說は次回で完結する。

映畫と精神分析

瀧口修造

映畫と精神分析との關係は、現代思想におけるもつとも重要な示唆に富む問題を含むものである。『心の不思議』などは、精神分析を直接に主題とした、いはゆる精神分析映畫であるが、映畫の表現機能そのものが、人間の潜在意識乃至は無意識の運動形式と多分にアナロジイを持つことは注意に値ひする。

今更擧げるまでもないことだが、單純な映畫手法は夢の現象との幾多の重要な類推を持つてゐる。たとへば溶明、溶暗、それをミックスしたオウァラップ、クロオズ・アップ、急速度並びに緩速度撮影、その他多樣なトリックを用ひたデフォルマシオン等は映畫にのみ許された技法であつて、同時に夢や無意識の持續性を造型化するには最も適確なものである。だから前衛映畫が主として、『貝殼と坊主』、『ひとで』のやうな無意識を主題にした作品を多く出したことは當然のことである。

しかしかゝる特殊な映畫のみが、無意識と關係を持ち、精神分析的な興味を持つのではなくて、むしろ映畫表現の根本には無意識に據る所が多いのである。私は最近殊に映畫といふものがいかに病理學的なものであるかを痛感する。或る人はそれは唯だ觀方の相違だと言ふかも知れぬ。しかりそれは確かに觀方に過ぎないのだが。鑑賞の形式が既にさうなのだ。あの暗いホールの中で一つのスクリーンを覗くといふことが、スペクタクルとしても、藝術鑑賞の形式としても、もつとも近代的でありながら、何かそこに原始的な空想的な魔術(マジック)といふものを感じる。人々はわざと、妙なトリックにかけられに行く……この心理の底には人間の本能の非常に古い興味の原型が感じられるのである。またその製作の過程がますます近代產

業化され、緻密分業化されるにしたがつて、一層このモデルニテと原始性とのイロニイが深く感じられるばかりである。この兩者の關係はだから「映畫」において、最も典型的に錯綜してゐるといふことが考へられる。これは映畫文化一般に對する一つの觀方として、問題を提出するものだと思ふ。そして映畫文化の傾向、大衆の欲求が、この問題と不卽不離の關係を保ちつゝ進化してゆくと考へられるのである。

いふまでもなく、映畫に限らず、近代藝術と無意識との關係は極めて複雜な、深いものである。それは唯だ映畫の影響といふよりは、近代思考の一般に現はれた特殊性と考へた方が適確であらう。しかし映畫の出現が、如何にかゝる思考の樣式を提供し、强烈な文化的慾求に應じたかは明らかなことである。たとへば初期に於けるサンシャイン・コメデイの新しい笑ひの要素にしても、確かに近代的なスペクタクルを創始したものである。そしてあの喜劇に現はれた世紀的サディズムを忘れることは出來ない。またチャップリンの藝術はその點で精神分析學者の好材料となるだらう。

映畫が漸次散文的になつて來た、といふことは少し語弊があるかも知れない。が、トオキイの出現と同時に映畫が散文藝術に煩はされてゐることは事實である。これはトオキイ化されて、映畫の表現ジャンルが擴大されたことを意味するものでもあり、決して墮落といふことは出來ない。言葉のモンタアジュによつて、觀念的要素が附加されたことは映畫の大きな進步でさへある。しかし音の使用法が未だ映像のそれほど完成されないといふことは事實である。つまり音の無意識的喚起力は映像のそれほど强力でないと言へるのである。主眼の大部分はいかに現實の再現が巧みになされるかといふことにかゝつてゐるやうに思はれる。音響のモンタアジュ論は旣に論じつくされたものであるが、理論が技術を超えるといふことはあり得ないのだ。映像では可なりまで心理的表現をなし得た映畫は、トオキイになつて、心理的な領域は單に散文の領域か演劇の領域を出ないでゐる。私は音響の使用がもつと心理的の領域にまで、その魔術的な效果にまで、錄音技術的にも、藝術的にも到達することが可能であると信ずる。それによつてトオキイは無意識下の强い影響力をも獲得するだらう。色彩映畫にしても、現在の現實再現のみに限られず、そこに心理的な色調で統一されることが必要である。

現代の文學、美術に流れる無意識の要素が結果したデコンポジションやデフォルマシオンも決して偶然ではないといふことは重大な問題なのである。吾々はこの近代

的革新の領域を撤退して、再現藝術に逆戻りすることは敗北である。この意味で吾々は藝術に、實驗の領域を許さなければならない。そのためには精神分析學や病理學等とも協力しなければならないであらう。物質の世界と精神の世界との一致は、かくして永い試練のもとに解決されるのである。吾々は精神の世界にも、物質の世界と同様に、廣く、深い未開地を展望する。

東京精神分析學研究所の映畫分析への積極的關心は意義あることである。今後、新しい分析映畫の紹介、フランスの超現實主義映畫の將來等の機運を促進したいものである。

前號正誤表

頁	行	誤	正
三	一〇	ないものだ。	ないのだ。
八	六	とう思ふ	どう思ふ
一三	一四	辯護者	答辯者
一五	一八	傲はう	倣はう
六四上	一	個=的低我	個的低我
六五下	七	Stalility	Stability
六九下	一	根抵	根柢
八〇下	六	二七〇七頁	二〇七頁
八一下	一四	pelon	melon
八二上	一三	capo(伊、エス)	capo(伊)、kapo(エス)
八六上	八	上るとので	上るので
八七下	一六	同様語	同根語
八八下	六	派出	派生
九一上	一三	常能	常態
九六下	六	亢舊	亢奮
九七下	五	concerniug	concerning
表紙	三三	Mitteilungen	Mitteilungen

時評

時言數題

大槻憲二

一、精神分析の一般化に就いて

過般朝日新聞（九月廿二日）に飜譯紹介せられてゐた米國のエドワード・ハウス大佐の論文『西洋は日本を制御の力なし』には精神分析の用語を用ひ、世界大戰後に於けるドイツの國情を評した條に於いて、かう云つてゐる。「ヴェルサイユ平和條約はドイツの植民地を全部奪ひ去り、……その結果、ドイツはそのインフィリオリティ・コンプレクスの反動的代償としてヒトラーを生んだ。」云云と。

西洋の政治家や軍人が好んで精神分析術語を用ゐて政論を試みることは、近來に於ける一つの流行の如くにさへなつてゐるやうである。日本が國際聯盟を脱退した當時にも、日本の心理的機制を劣等感を以て説明せんとした政治家があつたことを、我等は記憶してゐる。日本の衆議院あたりでも、過般、「マルクスとフロイドの支配する現代世界の思潮に於いて」などゝ云ふ語が某議員の口を通じて飛出してゐる。

精神分析の一般化は世界的現象であつて、それは先號に高橋鐵氏が評論せられた通りである。我々が本誌を刊行するの目的の一つは斯學の弘通を圖らんとするにあることは申すまでもないから、右に述べたやうな現象が世界的であることは、寧ろ喜ぶべきでこそあれ、悲むべきではないが、併しギッテルスも（嘗て本誌上に武田氏の譯してゐた論文に）言及してゐたやうに、斯學はさう無暗に通俗化して了ふことの出來ないものである。我々は本誌が可及的多數の讀者に讀まれることを切望するけれども、あまりに低俗にして斯學の如き誤解せられ易い科學をして一層人々の誤解の府たらしめるやうなことにはしたくないと思つてゐるのである。

この科學には多くの特質ある中に、特に面白いと思はれる特質は、最高級な教育ある者にでも分らない場合がある反面に於いて、あまり教育のない人にでも十分に理解せられ得ると言ふことである。

併し實はかう云ふ事はあり得べからざる事であり、あつてはならない事でもあるのだ。それはその學問の特質

が奇怪なためではなく、從來の學問が人々の知的ナルチスムスを單に强化するだけの意義しかない場合が多かつたゝめであらう。學問を積むこと愈々高くして、愈々救はれぬ愚蒙の淵に深く沈淪して行くと云ふことが、甚だ屢々あり得るのだ。

日本人はとかく學問や思想を低俗な意味に誤解する傾向がある。殊にその思想が一般化した場合には一層その傾向が强く現はれる。自然主義とは肉慾を滿すことであるとせられた如き……。故に、我等は一方、斯學を可及的普及と弘通とを圖らんとすると共に、他方、あまりに低俗化せざらむことを希望し、相反並存的態度をとつてゐるのである。

二、學的獨尊城主たちの群雄割據

『英語研究』七月號に私は『近代文學と精神分析』なる一文を執筆したが、それに對して『英語青年』九月一日號にサモア氏が同一題名の下に、右への批評を寄せてゐる。それに就いては、私既に反駁文を同誌編輯部に送つておいたが、載るか載らぬか分らないので、こゝに一寸所感を述べて見る。もし同誌に載るやうだつたら、あんまり神經質に一寸したことを再三問題にしすぎるやうな形になるが、何しろ載るか否かが分らないから書いて見るのだ。

サモア氏は、精神分析が、姓名に就いても云々すると云ふので、大道の姓名判斷と同格視せんとするのは、あまりに甚だしい輕卒ではないか。姓名判斷は、字劃數の割振からその人の運命を豫言する神祕的な術であるが、精神分析は、當該、固有名詞に就いてその創造者の無意識觀念を科學的に探究するに過ぎないのだ。運命の判斷などゝ云ふことゝは何等の關係がない。對象の外形が同一だと云ふので、その取扱ひの方法と目的との別を不問に附して同格視することが出來るならば、人體を取扱ふ故にとて繪畫と醫術とを同一物だと云へるか。

さう云ふ根本的の誤解から出發してゐるサモア氏の論は從つて批評としては全くナンセンスであるから、批評としては私はそれを相手にする氣持はないが、氏の物知り振りに依つて、二三の示唆を與へられたことは謝しておく。

以上の紹介を見られても直ぐに分る通り、サモア氏が抑々精神分析學に對して始めから反感（抵抗）を持つて臨んでゐたことは明かである。何となれば、そこに始めから先入見や反感がなければ、わざ〳〵斯學を「大道の姓名判斷」に比する必要はないからである。この場合「大

道の」と云ふ限定語は何の必要があらう。堂々たる大家の姓名判斷家には比するのは勿體ないのであらう。そこに始めから筆者に斯學引下げの願望のあつたことが、この僅かな言葉の使ひ方に於いて暴露せられてゐる。「感情の認識への干渉」と云ふ言葉を私は屢々用ゐるが、こゝにも私はその一例を發見したわけである。

始めからこのやうに反感（正解せざらんとの願望）のあるところに、どうして正解の存在が可能であり得よう。始めから正解の意志がないなら、むしろそんなものには相手にならなければよいのだが、自分の嫌いなものを他人が賞めてゐるのを見ると、つい餘計な引下げ運動もやつて見ようと云ふものだらう。

學者はまづ自己分析をしなければ、私情を離れることは出來ない。分析をしてさへ、それを離れることは固より容易でない。況んや、分析をしようとさへ試みないものに於いてをや。私情を離れ得ざるものが、公情の努力たり事業たる學問に携つて何の益があらう。寧ろ百害あつて一利なし。而もそれで公情を以て學に携つてゐると信じてゐるのだから困つたものである。寧ろ一部のマルクシストたちのやうに、始めから階級的私情を是認してかゝる方が正直であるかも知れない。

併し、私情の是認を以て學に臨むことは、科學の侮辱である。科學は無私、無傾向のものであるべきことを、私は少くとも科學の道德とすべきだと信じてゐる。固よりその道德が如何なる程度にまで可能であるかは姑く別問題としても・・・。

戸坂潤氏は近頃某誌上で、「アカデミイの學問的エクスタシイ」を嘲笑批難してゐたやうであるが、この語は、精神分析學的術語を以て飜譯するならば「知的ナルチスムス」に外ならないのであつて、實際、舊來の諸學者の業績は殆ど總て、知的ナルチスムス（獨尊病）の自己滿足がその無意識目的の大部分であつて、從つてその學問がいつまでたつても地につかず、極局、獨善の遊戲に墮してゐたと云つて過言でないのである。さうして世人にその「獨善」を「自信」と誤認し、その「遊戲」を「純粹」と見損つてゐたのである。

このやうに學問が單に知的ナルチスムス城構築の手段とせられ、城主はその高樓の中で晝寢をしてゐるに過ぎないやうな痴呆症的學者の實例を我々は眼前に幾らでも發見し得るではないか。

三、山田わか子の答辯振り

朝日新聞家庭欄の『女性相談』には專ら山田女史が當

々その勇敢なる答辯振りを發揮してゐる事は、人々の知る通りである。私は個人としての山田女史には平素滿腔の敬意を拂つてゐるが、相談答辯者としての女史には、他紙の答辯者と比較して、甚だ失禮ながら最も少い敬意を拂つてゐる者である。

女史が幾多の困難と勞苦とを經て、今日の地位と人格とを築き上げた優秀な人物であることは、何人も否定することは出來ない。併し女史は自分個人の經驗を以て、あまりに一般的に、これを他人にも推付けようとしてゐる。併し人々の心理は種々であり、その立場は千變萬化してゐるものであることを知らないやうである。實を云ふと女史の御說敎などは、云はれるまでもなく、本人たちが旣に十分に自分自身に云ひ聞かせてゐることに過ぎないのだ。併し分つてはゐるが實行出來ないところに惱みがあつて質問して來てゐるものに對して、立派ではあるが、少くとも本人には到底行ひ得べくもない方法を說いたとて何の益があらう。

女史の答辯は結局最も常識的なのだ。故に最も常識的な問題にぶつつかつた時には、非常に穩健妥當な答辯が與へられてゐる。さう云ふ場合には、我々もそれを讀んで讃成する。併し一度常識だけでは解決のつかない問題が生ずると、女史の答辯は常々的を外れてゐる。時に、我々は讀者として、問者に非常に同情する事さへある。

けれども、法律上や何かで專門の知識を要する場合には、女史は一々その方面の專門家の意見を質してから答辯してゐるやうであるが、性問題や心理問題の場合には、專門家などには少しもはからず、獨斷で陳い道德一點張りの、見當違ひの意見を述べられるやうだ。これは女史に似合はぬ輕擧ではないだらうか。尤も、性問題や心理問題が質問の大部分なんだから、これを一々專門家に訊いてゐた日には、女史は自分の意見を述べる機會など一回もなくなるだらう。また專門家の意見など、要するにサロン（お體裁のいゝやうなことだけしか口にするが許されず、結局上品な噓をついてさへゐれば無難で、あまりに本當なことを云つては忽ち社會的抑壓に牴觸するであらうところのサロン）に過ぎない新聞紙上では述べられるものでないかも知れない。結局、毒にも藥にもならない女史の答辯あたりが、お茶をにごしておくには最も適すると云ふところに落着くんだらう。世の中なんて、大抵どこでも、まづこんなところで落着いてゐるのだ。

新刊紹介

▼『鄕土生活の研究法』柳田國男著——柳田氏著となつてはゐるが、直接柳田氏の執筆は最初の十六頁だけで、あとの三百餘頁は村落社會學會の小林正態氏の筆になつてゐる。かういふことは多くの場合、その書の價値を減ずる如き響きを與へる言葉であるが、この書の場合に於ては、その反對である。柳田氏はわが國民俗學の父祖であり權威であることは云ふまでもないが、その才能は必ずしも組織的であるとは云へない。我々はこの書が小林氏の新しい才能と見解とを俟つて、斯學方法論上の最初の價値ある書となつてゐることを認めたいと思ふ。そこには分析學的方法と多くの一致するものがある。我々は後日更に精しく、この書の內容を批判する機會があるであらうが、只今はたゞその信頼するに足るべき好著であることを紹介するに止めておかうと思ふ。（刀江書院發行、一圓五十錢）

▼『蕃人の奇習と傳說』田上忠之著——「蕃人も矢張り吾等と變るところなき人間である」と云ふことや、「蕃人とは如何なるものであるか」と云ふことを說明するために執筆したと著者は序文で斷つてゐるが、そのために少しくひい氣の引き倒しになつてゐるところがなくはない。そのやうな傾向的意圖よりは、沒傾向的な客觀的科學的態度で彼等の風俗や傳說を研究紹介して欲しいと云ふのが我々の要求ではあるが、併しそんなことは此方の勝手な注文であると云はれゝば、それもそうである。さう云ふ學術的興味からでなく、普通人が一通り彼等の生活を知らうとするには事缺かない書物である。傳說、首狩、結婚、娛樂、日常、出產、死、迷信、美の觀念、宗敎、その他種々な項目に亘つて細論してある。（臺臺市大正町二丁目、臺灣蕃族研究所發行、參圓）

▼『日本各地傳說集（山陰九州篇）』大木紅塔著——なまなか理論的考察などを加へず、極めて素朴な態度で聞くまゝに各地の傳說を蒐集編述したもので、却つて我々には、この方が學術的にも役に立つ次第である。佐々木喜善氏の『聽耳草紙』が主として東北地方の傳說民話をやはりかう云ふ態度で蒐集してゐるが、それと比せらるべきものである。この書は第一篇で、漸次に篇を追ふて全國に及ぶと云ふ、大變な仕事であるが、我等は著者の勞を多としなければならない。こゝに既に乙姫型の傳說、羽衣型の傳說などで變つたものがあり、非常に有益な示唆を受けたことを感謝する。（澁谷區千駄ケ谷一ノ五六二、國本出版社、二圓八十錢）

▼『結婚愛』小倉淸太郎譯——產兒制限で有名なマリー・スト

ーブス女史が夫婦愛保持上の生理上の心得を說いた書の譯である。原著者自ら序文の中で「私は最初の結婚に於いて、性的無智からして、實に恐るべき犧牲を拂つた。そしてこのやうに犧牲を拂つて獲得した知識は人類全部の役に立てなければ、と感じてゐる」と云つてゐる。全部十一章から成つてゐる。（芝區南佐久間町一ノ五五、不二屋書房、一圓）

▼『釣ざんまい』中村星湖著――小說家にして釣狂なる著者の釣魚に關する隨筆集。釣の文獻から釣の哲理、釣の實際、釣の文學に及んでゐる。内に「精神分析と釣」と題する一節があつて、釣の無意識心理が研究してある。相當細かく書いてあるが、分析知識の不十分な人々にこれ以上の說を求めることは無理であらう。將棋だの釣だのと云ふものは人間の性的又は社會的（一言にて掩へば現實的）興味の轉換又は昇華として利用されるもので、それだけに「詩的」であらうが、「逃避的」でもあらう。かう云ふ趣味に淫することは、從つて非常に魅惑的であるが、危險でもある。併しそんなことはこの書と別に直接關係のあることではない。讀んで心落着く種類のものである。（麴町區富士見町、健文社、二圓）

▼『理想の家族』岩倉具榮譯――英國現文壇の女流作家、故マンスフイールドの短篇集である。內、約半分は本誌上に揭げられたもの。最後の「新月灣のほとり」は中篇と云ふべき力作。本誌廣告欄參照。（本研究所出版部發行、金一圓八十錢）

▼「ポエトリー」十六歲の少年英文詩人中尾エリフ君の自作發表機關としての定期刊行物である。その英文の暢達流麗なことに就いては既に本誌上で紹介したことがあつたが、著者は最近米國に遊學せられたさうで、愈々その進境の期待すべきものがあらう。（鎌倉町姥ヶ谷、謖々洞發行、定價一圓。）

▼『西班牙狂想曲』飯島正譯――R・L・ルイス原作。材を情熱の國西班牙に採り、不健全ではあるが美しく、妖しく、これもまた人生に止むを得ざる一つの姿を寫した物語りである。女主人公の心理を分析的に見る時は、サドマゾヒズムの典型的な現れとして興味があり、又女性心理一般への解釋の道ともなる。たゞ一篇の愛慾史として讀み捨てるにはあまりに分析的興味が深過ぎる程、樣々なものを含んでゐる。その映畫化せられたものが近く上映せられる由。（定價一圓、西東書林發行）

オール・トーキー(“The Private World”)

『白い友情』分析合評會

九月三十日午後パラマウント映畫社試寫室にて鑑賞、午後七時より研究所に於いて合評

發聲順〔大槻 岐美、高橋 鐵、辻 修
　　　〔大槻 憲二、岩倉 具榮、長崎 文治

——役　配——

ジェーン・エヴァレスト……クローデット・コルベール
シャルル・モネー………シャルル・ボワイエ
サリイ・マグレガー………ジョーン・ベネット
クレア・モネー…………ヘレン・ヴィンスン
アレクス・マグレガー……ジョエル・マクリー
カリイ・フリント…………ジーン・ルーヴァロル
マトロン……………………エスター・デール
ジェリイ……………………グウィン・ウィリアムス
ドクター・アーノルド……サム・ヒンズ

(寫眞は右からエヴァレスト、マグレガー、モネー院長)

梗概　原名『隱れた世界』

ジェーン・エヴァレストは歐洲大戰に愛人を奪はれ、青春の身を醫者として生きるべく固い誓を立てゐた。彼女は同僚のアレクス・マグレガーと共にその手腕を謳はれ、彼等が勤めてゐる精神病院は全米で名聲を得てゐた。

マグレガーはかねて院長の椅子を狙つてゐたが、彼の期待に反し、フランスから來たシャルル、モネーが院長となつた。マクレガーは失望の餘り、極度にモネーを憎み、彼に復讐するため、彼の妹クレアに近づいて行つた。クレアは男の生活を破壞する事に興味を持つ女で、忽ちマクレガーとクレアの仲が病院の噂となつて了つた。而もマクレガーにはサリイと云ふ貞淑な妻があつた。

エヴァレストはモネーの人格に心を惹かれたが、モネーは凡ての女を憎んでゐる男だつた。妹クレアの夫殺しのためにフランスに於ける財産と名聲を悉く失つた事がその原因だつた。然し、二人の間に愛が生れて來る事はどうする事も出來なかつた。これを知つて、マクレガーは益々身を持ち崩し、全然變つた人間の樣になつたが、心配の餘り妻のサリイは氣が狂ひ、エヴァレストとモネーに救はれた。マクレガーも今は惡夢もさめ、心からサリイを愛する事を誓つた。

エヴァレストとモネーは、しかし、互ひの愛をまだ面に現はさない。マグレガーは、二人のために、彼等の心理も狂人の心と同じだと說いた。やがて、二人はそれを悟つて互ひに相許す仲となつたのである。

岐美「あの中で誰が一番分析的に行動したわけなんでせう?」
高橋、辻「それは結局、院長でせう。」
大槻「しかし、院長も最後は分析的であつたが、その以前はあまり分析的でなかつた。」
岩倉「妹コンプレクスがとれてゐなかつた。」
大槻「妹も現にそれを口にしてゐて、兄さんにとつては私は一番大切であつたとまで公言してゐた。」
岐美「妹の兄に對する反抗がよく現れてゐました。あの女優も本當に上手かつたですね。」
岩倉「でも、やつぱり妹は兄さんを愛してゐたんですね。」
岐美「さう、愛してゐたからこそ、反抗したんでせう。」
大槻「いや、甘へてゐたんだよ。……兎も角非常に面白い映畫だ。俄然アメリカ文化に對して敬意を表するやうになつた。それに比べると日本の文化はまだまだ遠く及ばない。」
岩倉「さうですね、日本の映畫はもつと進歩させなくては…。」
辻「あの映畫を見るとチェッコスロバキヤの『春の調べ』よりは寫實的に構成されてゐたやうに思ふ。あの程度の作品なら日本の映畫にも出來さうだ。」
岐美「受けるか、受けないかは疑問でせうが……。」
高橋「精神病が常態から逃げこむところがよく現れてゐた。あのサリー、サリーと呼ぶ幻聽は全くたまらなくなつて、こつちが變になりさうだつた。窓の外の呼び聲はサリーのケリー・フリントとの同一化でせう。ケリー・フリントのやうな女は

肉體だけが爛熟してゐて、イットに富んでゐる。」
大槻「患者の取扱ひ方も非常に進歩的のやうですね。從來の監禁主義に對して、開放的で……」
辻「その意味でも、ニイルの教育精神を思ひ出しますね。」
岐美「監禁主義は看護婦長が代表してゐます。」
高橋「獨身女の僻みがサディスティックな監禁主義となつてゐた。」
大槻「不安のある患者が外に向つて亂暴するのだ。ジェーン・エヴァレストもその點をよく理解してなだめるやうに患者を扱つてゐるのだ。
岩倉「女が男患者を扱つたのでよいと思ふ。」
大槻「母コムプレクスを起させるのが效果的なのに、院長は女醫を頭から認めてゐない。それが妹コムプレクスから來てゐるのだ。その點、私が始めに分析的でなかつたと言つてゐた理由である。」
長崎「嫉妬深かつたのぢやないでせうか。他の醫者に對して。」
高橋「エヴァレストが最初中性的であつたのは、昔の戀人のマイケルが『大戰に出征して攻撃の時逃げたの……銃殺されたわ、臆病だつて』……」
岐美「自分のために死んだと思つてゐるのでせうか？」
高橋「さうでせうね、そのためにエヴァレストが可哀さうな人達を救ふために醫者になつた。そしてそれ以來戀をしなかつた、といふのを見ればさうかもしれません。」
大槻「それが彼女の最初の戀人で、その空想中の戀人にリビドーが纏綿して畢竟、幽靈戀人になつたのである。ゴースト・ワールド(幽靈世界)のゴーストラバーになつたのだ。」
岐美「サリーがあゝいふ風になつたのは、君(エヴァレスト)がマグレガー夫妻と離れないからだと院長は言つてゐますね。」
岩倉「院長は內心ではエヴァレストを、無意識的に愛してゐたからかもしれません。だから投出的にさう考へたのではなかつたでせうか？」
大槻「患者に對する臨床態度はエヴァレストが一番よかつた。」
高橋「自分で母になつたやうな氣持であつたから患者の扱ひ方が適切であつたんでせう。アメリカでは珍らしい智的な作品ですね。」
岐美「分析的の眼をもつて觀なければ、到底解りさうもない映畫ではないでせうか。」
辻「お互ひが子供つぽいと悟る邊は、幼兒的なナルチスムを悟つたことであつて分析的にお互ひが修養したことになつた。」
長崎「もともとエヴァレストは一種の同一化を持つてゐてサリー・マグレガアを姉と思ひ無意識の中ではアレクス・マグレアを夫と思ひ込んでゐた。然し乍らあの映畫は分析的ではあるが、分析的に片寄つてもゐない。その點では好感が持てるエヴァレストは院長モネーの妹と同一化してをり、サリーとも同一化してゐる。」
大槻、高橋「全く分析眼を持つてゐなかつたならば、あの映畫

の筋は解りさうもない。その點興業的にどうかと思ふ。」
高橋「マグレガアやその他の人道の幼兒性が克服されて一人前の大人になつたところは面白かつた。特に最後の場面に於て戀人の思ひ出である記念の玩具が手から落される所はそれではないでせうか?」
大槻「畢竟、リビドーを斷切ることを意味するものであつて、常態人になつたのだよ。」
高橋「一體、西洋ではラヴァーへの贈物に玩具を使ふのでせうか、それとも戀人に見立てゝその玩具を贈るのでせうか?」
大槻「いや、二人の間に出來た子供のシンボルとして贈るものだらうね。」
高橋「タイトルで、愛と憎しみとは紙一重の差であるとか、狂人と正氣の人間との間も紙一重であるといふタイトルもあつたが、全く分析的見方ですね。」
長崎「警視廳の金子氏は誰でも狂人にして了ふと云つて批難されてゐたが、私達と彼等の境界は唯一つである——いや、同じであるかもしれない。といふのは彼等は自分達の本當の世界から歸れない。」
大槻「それが『隱れた世界』といふ意味であり。結局、常態であると信じてゐた自分等もその世界の中で狂人達と同じやうな態度をとつてゐたんだ、といふことが解るに從つて、俄然リビドーが院長とエヴァレストとの間に相互に纒綿されたのである。これが原作者フイリスボトムの『隱れた世界』のテーマなんだな。」
岩倉「アレクス・マグレガーが院長の妹に、つい誘はれて了ふところなども巧みに表現されてゐた。」
高橋「院長の女嫌ひは……。」
大槻「妹コムプレクスがあつたからだ。實は女嫌ひでなかつたんだ。」
高橋「紺屋の白袴とはよく言つたものだ。」
大槻「その紺屋の白袴を悟つたといふことがこの映畫のテーマであつたのだ。」
高橋「兎も角最後の解決が非常に分析的だつた。」
岐美「狂人達が一度に騷ぎ立てるところなどは、凄くてゾッとしました。」
長崎「群集心理と同じ樣に一つのものに向つて反抗してゆく有樣が現れてゐる。」
高橋「院長の妹も兄コムプレクスを持つてゐるから、殊更に强く男を戀するのぢやないだらうか?」
岐美「兄さんへの當て付けではないでせうか。あの映畫の中では五人の間の葛藤がありますね。」
大槻「畢竟、五角關係だ。」
高橋「マグレガーは院長に對して父コンプレクスを持つてゐた——例へばパパにお尻をたゝかれて、痛くない? といふところなども面白かつた。」
岐美「あの中に龜の例へがありましたね。院長の妹クレアが兄

やエヴァレストのことを龜の子同志で暮すがいゝと言つたところが面白かつた。」

大槻「尤も妹の方は龜でなさすぎるから、よけいに他の人々が龜の子に見えるんではないだらうか?」

高橋「ケリーといふ女は開放的な女ですね。」

岩倉「ケリーといふ女をサリーが招いたのは、あの女に同情したのか、或はあの女へ自分を投出したのか?」

高橋「病氣の中に逃げ込みたいからだ。……あのサリーサリーと呼ばれる幻聽の中に雷と稲妻と雨と風――それにサキソホーンの太いバスがカモフラージュされてゐるのは、實に巧みな壓倒的存在ですね。サリーが氣が變になり階段から落されてしまつたのは、强迫か何かの觀念が手傳つたのではないのか?」

岩倉「彼女は姙娠中で恐怖心理が倍加されたんでせう。」

大槻「實に素晴らしい病院だなア。あゝ云ふ設備は羨ましい。我々も一つほしいものだなア」

岩倉「最後の場面でエヴァレストが院長と抱擁してゐるときに彼女の手から元の戀人の記念たるべき人形が落されるといふ所は、實に巧みに出來てゐて面白かつた。……妹のクレアは破壞的なサデイズムを持つてゐる。」

大槻「その性格は何處から來てゐるかといふと、彼女が昔犯した殺人の恐怖からかもしれないし、また兄へ對する反杭、滿たされぬ戀愛への反動でもあつたのだとも思はれる。」

高橋「あの男達が何故狂暴的に騒ぎ立つたのでせう?」

岐美「モネー院長がアラビヤ人を衝立て隱したから、何か隱されてゐるのだらうかといふ猜疑心が手傳つたのではないでせうか?」

岩倉「何にしても久し振りで異色ある映畫を見せて戴いたことはうれしい。」

辻「作りものだが、ともあれ、アメリカ映畫としては極めて知的な構成の中に一つのモラルを持つてゐたといふことは、グレゴリー・ラ・カバーの監督の才能に對して充分な敬意を表したい。」

（十二月中封切公開の筈）

ある父親の自己分析

母衣權兵衞

近頃、私は私の子供が、その遊び相手に顏を引つ掻かれるので弱つてゐる。元來、子供は原始的なものなので組し易しと見ると、すぐにこれを襲ふものである。その攻擊の仕方も色々ある。まづ疾風の如く飛んで來て毆るとまた疾風の如く逃げるといふのがある。これは泣き聲を後に聞きつゝ逃げるといふ快感が伴ひ、多くは被害者の附近に於て行はれるものなのである。ぢはぢはと近づいて來てたゝくのがある。この手を用ゆる者は大概その場にゐて泣きながら歸る相手を見送つてゐるものである時とすると、往復びんたの如く、連續數回にわたる毆り方もある。或は女の子が相手だと頭の毛をひつぱるのがある。砂のはいつた茶碗をぶつつけるのがある。これは女の子が同性の相手にやつたものだが、女の子らしい攻擊方法である。顏を砂だらけにして泣きながら歸つて行く相手を、ぢつと見送る所など相當後味も樂しめやうと云ふものである。その他、定石的なものに、竹刀樣の武器でたゝいて逃げるのもある。斯うした色々な場合、往々にして見物の立場に立つ子供らが附近にはゐるものだが、これ等の子供らはどうしてゐるかと云ふに、大概ニヤニヤして傍觀的態度を保ちつつ、罪障感（責任感）なしに充分サディスティックな滿足に耽つてゐるものである。

以上は、私の子供がいづれも直接被害者として體驗した所に基いたものだが、まだ冒頭にのべた、引つ掻くと云ふ手には會つた事がなかつたのである。

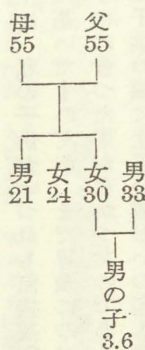
私は子供の顏に生爪の跡がいつ迄も消えなかつたり、時によるとそれが眼の側にあつたりすると、此處でよかつた、も少し外れたら飛んだ事になるのだつたがと、子

供が女の子であるだけに一層心配にもなるのだ。それで私たち（と云つても妻と二人だが）は、子供の泣き聲さへ聞こえると時を移さず出て見るのだが、いつも後の祭りで、新らしい傷跡が私たちの出方の遲かりしを語りたげについてゐる。かうした事が續くにつけて、私たちはその對策に腐心するのだ。で、一應は相手の子の家にも注意したのだが、それだけでこの問題が解決するとは私自身思つてもゐないし、何よりも、事實そのものがその後に於いても絶えないことが雄辯にそれを物語つてゐるのだ。

然し、私たちは幸にして、この相手の子供の家庭をいさゝかではあるが知つてゐるので、それによつて私たちがその子供のさうした行動を可成同情的な見方で取扱ひ得るといふ事が、その子供にとつても、私たちにとつても、何よりの事だつた。併し、さうした間にも當面の問題は依然として止みさうにもなかつた。

斯うした事實に直面して、私は子供の攻擊方法の相違は、子供自身のコムプレクスの相違に基いて、それぞれに決定されるものではなからうか、と思つて見たのだつた。以下、この子の家庭的事情を私の知る範圍內で報告しつゝ、結局、ニールのいみじくも言つた「子供の問題は親の問題である」ことを、分析的に若干考察して見ることにする。

まづ、左の家族表について見られたい。

```
父55 ─┐       ┌─男33 ─┐
      ├───┼─女30 ─┴─男の子3.6
母55 ─┘    ├─女24
            └─男21
```

數字は推定年齡。外に女中が一人。この男は養子ではない。引越當時、これだけが一軒にゐたが、現在祖父母とその息子は、その隣りの家に住つてゐる。

これを見て直ぐわかるのは、この子供が七人の大人たちの影響下にあると云ふ事であるが、事實は寧ろ、七人の大人たちが、常にこの子供の上に君臨してゐると云ふ言ひ方がよりふさはしく思へる程だ。

これらの大人たちは、いづれも自己の幼兒的經驗に根ざした一つの意見なり、抱負なりを、子供に對して持つてゐるであらう。そしてそれを何等かの形に於いて、子供の上に見出さうとしてゐるに違ひない。それのみか、リビドー貸借關係に於いても、御多分に洩れず、赤字線上を彷徨してゐることであらう。子供は、その大人たちの感情の移り變りと、その各人各說との間に、迷はざるを得ないのみか、時折大人たちの貸借關係の帳尻を合すべく代償的に利用されてゐる。

「ほんとに、この子は我が強くつて……」と、嘗ての母親の辯明の辭は、私をしてその當然さを思はせるに充分だつた。子供にして見れば、自分の途を自分で切り開いたのであつた。子供にして見れば、自分の途を自分で切り開いたのであつた。對社會的にどんなことをそれが洩らすか否かは、子供の與り知らぬところであつた。たゞ一つ言ひ得ることは、これが子供の體驗的に知り得た對人生的態度であるといふことだつた。

私は次に、子供の家庭の個々の成人に就いて語らう。

先づ子供の父親であるが、世間でよく云ふ子供には眼のない型の一人らしいので、子供の云ふ所によると、本も玩具も殆んど父親に買つて貰つたと云ふ話である。私はこの子の母親が、何處か遠出をしてしまつた子供を捜しながら、「お父さんに叱られてしまふが……」と、愁はしげに、つぶやいてゐたのを聞いたことがある。それと普通どこの小供でも、父親型の男には度合の多少はあれ恐れを持つものであることは周知の事實だし、私自身の家へ遊びに來る多くの子供らによつてもそれはわかる。然し、この子供ばかりは、私との初見參にさうした態度を見せなかつたのを、當時珍らしく思つてゐた事もこゝに附記する必要があらう。

それに比べて母親は、可成嚴格であるかに見える。折々母に打たれるらしく、その叱責の聲が泣く子供のと入れまぢつて聞えることがある。それからこの母親は、父親の歸途を迎へるにあまりにも慇懃であることが、勿論それ相當の理由もあることであらうが、それを知り得ない私のいまもつて解けない謎である。

次に、お祖母さんであるが、この家へ、この人たちが引越して來て二週間も經つたかと思はれる或日、私は、この人が妻に「お宅のお子さんも遠慮なくお叱りしますから、どうかお氣を惡くなさらないで」と云つてゐるのを陰で聞いたことがある。これは大變なことになつたものだと、私はいさゝか辟易した。勿論、その邊に私の子供も居て何かいたずらでもしたのが、かう言はせるキッカケになつたのであらうが、それにしても少しハッキリしすぎてゐる。これが當世風の明朗さとでも云ふのであらうか。その頃、自分の孫である子供に對して「お坊ちやん」と呼びかけ出したのも矢張この人だつたと思ふ。さうした呼び方は、それから半年も經つた今日に至るまで、今度は家中の人たちの支持の下にある譯であるが、その意圖の奈邊にあるかは知らぬが、他で聞いてゐると相當ユーモラスで微苦笑位には價する。然し、かうした態度が「お坊ちやん」に如何に影響を與へるかと云ふ事になると、その「お坊ちやん」を私の子供の遊び相手として持つてゐるだけに、その結果は可成關心の持たれる

問題である。

かうしたお祖母さんが、或日お母さんが外出するのに自分を連れて行かないと云つて、駄々をこねてゐる孫に「お祖母さんの家へ入らつしやい」となだめに來た。それに對して「お祖母さんの馬鹿」と子供が應じた。と思ふと「お祖母さんを蹴つたね」と、次にはお祖母さん自身の叱責の聲が聞えた。すぐとまた子供が泣き出した、事態の容易ならぬのを覺えて窓からのぞくと、今、お祖母さんが、泣く子を脇の下にかゝえ込んで自分の家に這入る所だつた。暫くすると「御免なさい御免なさい!」と泣き叫ぶ子供自身の聲が聞こえはじめた。私はそれを聞いてゐながら、暗然としたものを感じてゐた。僅か三歳半の子供が、お祖母さんを足げりにしたと云ふこの事實に對して、かうした處置が果して妥當であらうか。あまりにも大人氣ないではないか。

だが、お祖母さん自身の無意識に於いては、それは百も承知、千も合點と云ふ所で、これに就いては十分なる理由があり、それが意識上のくひ違ひなどを考慮出來得ざる位に、高潮に達したのであらう。だが、この場合對象が誤つてゐるやうに思へるのだ。然し、或ひはそれも誤つてゐると云ふ方が誤りで、これこそ正當であるかも知れない。若しも、このお祖母さんのかうした症候を子供の親たちがもたらしてゐるとするならば、その子である、この子供こそ、それを代償すべきであるかも知れない。私はお祖母さんの、無意識の由つて來てゐる所を知らないが、いづれにしても、この子供は何等かの埋合せに、相當以上の刑罰を受けてゐるのは、まぎれもない所である。

このお祖母さんは平常、お辭儀の高い人である。私たちは、それに對して「高ぶつてゐるから」と云ふ言ひ方をもつてしてゐる。私の觀る所ではこのお祖母さんは肛門性格者のやうである。この一家の引越して來た時、人を雇つて家の外面をすつかり洗はしたことがある。少し位造作や建具を直す人は普通だが、借家住ひにかくも潔癖な人たちを私は嘗て見ないので珍らしく思つてゐた。それから此の方、朝夕は必ず家の前や塀や玄關等に打水をして、それが雨上りの時のやうな水溜りを所々に作つてゐる。その上に植木を適宜にあしらつて居るので、あたかも料理店か待合の如き觀を呈する。この清潔方面のことは萬端お祖母さんが主動的であつて、その肥滿した巨軀もたゆたげに女中など指圖しつゝ、手落なくやつてゐる。

では、お祖父さんはどうであるかと云へば、この人はよく娘(子供の母)と二人連れで外出する。その前に子

供は、女中が近所の公園に連れ出す。折々その御相手を私たちの子供がさせられるので、その外出の屢々なのを私たちは承知してゐる。子供の留守中にお祖父さんは娘と外出するのであるが、出がけにいつもぶつぶつ言つてゐるのが、歸つてからは大變御氣嫌であるのも毎度のことで承知してゐる。それに對してお祖母さんはどうであるか。私はそれを知らない。然し、さうした折にお祖母さんの姿を見かけたことは不思議とないのである。子供の父は、仕事に出てゐて留守であるし、歸る頃にはすでに二人連れは在宅である。

いつの頃であつたであらうか。夜もかなり更けてからの事であるが、私が用事からの歸途、自分の家の塀ぎわに立たずむ二人ほどの人影を見出した。私の足音に驚いたか、突然その黑い影が左右にパッと別れたので、意外にもそれがこの父娘であつたことに私は氣付いた。ぴつたりとより添つた戀人同志の如き感じを私に與へてゐたその影は、果然、映畫『白い蘭』へのひとすぢ道へと通じてゐた。或ひは、あの後日譚とでも云ふべきものであるかも知れない。

『白い蘭』なれば、さしずめ犬の役目に當るべき「問題の子供」であるが、母親の云つた通り「我が強い」のでお仕置に灸を据えられること屢々である。私は幸ひに灸の經驗はないが、たとへ僅かの間でも、嫌がつて反抗するであらう子供を抑へ付けて灸を据えると云ふことは、それが子供を矯め直さうとする爲であるとしても、さうした事は子供への愛のみでは出來ないであらうと私は思ふのだ。必ずそこには子供への憎しみが加算されてゐるものと思ふ。その憎しみが如何なる道程で具現されるかは、それぞれ個々の條件によつて決定さるべきで、こゝに俎上にもたらすと云ふ譯には行かない。だが「お灸はお祖父さんの手で!」と云ふのが、しきたりのやうになつてゐる、この家の場合、その根源はお祖父さんと娘とが心理的に、御互を卒業しきつてゐない所にあると思へる。その他の人たちに就いては、私は知らない。

以上、子供の家庭的事情を書いて來たが、斯うした家庭的の重壓が、多くの禁制と抑壓とを子供自身にもたらしてゐる事であらうことは疑へない。然し、それに對する子供の反抗もまた當然禁壓されてゐるのであるから、その反動が遊び相手に及んで、私の子供の生傷がその代償として形成されて行くのであらう。江戸小話に『親父喜べ、子供(娘)が御役に立つたぞへ』といふ文句があるが、先方の小供が先方の家庭の安全辯である如く、私たちの子供が、この子供の代償的滿足に役立つてゐるのを私たちは、寧ろ喜んでゐていゝのかも知れない。

あまり他人の事を云ひ過ぎて罪障感にかられるといけないから、今度は自分の事を云ふ。やはり、この子供とその父親とに關聯した事だが、それもこの一家が來てから一二週間目の事だ。往來で、子供の父親に丁寧に「子供が御世話になりまして」お辭儀をされた。何故か私はその時それに答へず、勿論挨拶さへもしなかつた。これが先方のナルチスムスを傷けたことは非常なものであつたに違ひない、先方はムッとした顔付をしてそこを去つて行つた。私とても直ぐそうした自分を反省した。だが時すでに遲く、先方を追つてまで非禮をわびるには私の方にもナルチスムスが强過ぎた。

私はかうした不快な記憶を直ぐに無意識にたゝき込んで、忘れようと努めた。だが、胸中いつの日か、この過失を償はうと決めてゐたらしかつた。兎に角、その時、私はこの事實を次の如く分析した。

私は先方の家庭が、私の方より經濟的に優越な位置にあることを自覺して居た。それは子供に對する玩具の與へ方などにもよく現はれてゐる。先方が子供の意のまゝに、無造作に買ふのに對して、こちらは十に一つも考慮してからと云ふ風だつた。それを子供に對する躾けからであると强辯する程に私たちは自己欺瞞的ではない。むしろ、さうした經濟的、社會的のギャップを乘り越えて行かうと云ふ心構へを持つてゐた。然し、意識的にはかくの如く、元氣一杯で扱つてゐたが、無意識では常に相手にひけ目を感じてゐると見えて、その劣等感の補償をこんな場所で、こんな方法でもつてして、事の意外に意識上の私自身を、狼狽せしめたのであつた。

それから數日後、私の所の子供と先方のと何處へやら道行としやれ込んで了つた事があつた。その日は雨がショボショボ降りつゞけてゐたので、私たちは勿論、先方も總動員で搜し續けたのであつた。數時間後、相合傘で歩いてゐる二人を家からかなりな距離の所で見出した。泥だらけになつて歸つて來た子供を、私は思ひ切り打擲した。理由は「他人の子を連れ出した」と云ふ點にあつた。こゝで、この二人の子供を比較して見ると、私の子供の方が三月ほど早いのみか、こちらに一人下のが居るせいもあらうが、日常語も不足なく喋舌れた。しかし、先方はまだ階段も、上ることは出來るが、下りるには後向きで危なげである。さうした差はあるが、どつちから連れ出したかと云へば、どつちからとも云へぬ年齡ではあつた。子供は直ぐ泣き止んだ。然しその時私自身は打ちのめされたものの如くであつた。私は私のさうした異常なる感情の高まりの中に、私の子供を打つことによつて先方の父親に對して、いつぞやの過失を償つてゐた積

りの自分自身の存在に氣付いたからだ。これは他人事ではないと私は思つた。さうして私が斯ういふ事を氣附いたのは、分析を學んでゐた爲であつた事を自覺すると共に、再びかゝる補償を子供に求めることのない様、反省を怠るまいと決心した。

私自身のエピソートはこれで終るが、現實生活では、依然として先方の子供は危険なる存在である。最近では親たちに云はれたり、私の子供の逃げ方も速くなつたりしたためでもあるだらうが、引つ掻くことはなくなつたが、常に竹刀、物尺、棒切れ等を持ち歩いて効果的に利用することを止めない。私の子供は、ためにいつもその脅威下にさらされる。讀者諸子は、私の子供があまりに消極的であると云はれるかも知れないが、そこで御斷りしておきたいのは、私はあまり私自身の保護の下に子供を置き過ぎたと云ふ事だ。ために、私の家は近所の子供らの遊び場の如き觀を呈し、子供は、私たちによつて見護られてゐる代りに、どこの家庭でもやるやうに、相手と争つた場合、一應は相手の子の顔を立ててやると云ふ方法に從はされてゐた。ために子供は無抵抗主義になつて攻撃に對して手を擧げて防禦するのみで積極的に攻勢をとり得ない。そこで引つ掻かれると思つた瞬間などはすでに相手に呑まれて了つてゐたり、棒切れなどで構へられると體を堅くして了つたりして簡單に乘ぜられてしまふのだ。私は、あまり溫室的に子供を育て過ぎたことを、今になつて後悔してゐる。

今、この二人の子供らは、私の傍で仲よくこんな文句を合唱してゐる。

「オシリソロヘテチーパッパ」「オナラソロヘテチーパッパ」「オシッコソロヘテチーパッパ、」こんな時こそ、子供らは天國であらう。親たちとても同然である。併し、この平和も果していつ迄續くことであらうか。(終)

蒙卦象傳分析考

狩野三郎

周易繫辭上傳

易有㆓太極㆒是生㆓兩儀㆒兩儀生㆓四象㆒四象生㆓八卦㆒云云

乾(ケン) ☰ 乾三連 乾爲天
兌(ダ) ☱ 兌上缺 兌爲澤
離(リ) ☲ 離中虛 離爲火
震(シン) ☳ 震仰盂 震爲雷
巽(ソン) ☴ 巽下斷 巽爲風

坎☵　坎中滿　坎爲水
艮☶　艮覆碗　艮爲山
坤☷　坤六斷　坤爲地

×

䷃　坎下艮上

蒙亨匪ニ我求ニ童蒙一童蒙求レ我、筮初告再三瀆、瀆則不レ告利レ貞。

彖傳曰蒙山下有レ險、險而止蒙、蒙亨、以レ亨行ニ時中一也、匪ニ我求ニ童蒙一童蒙求レ我、志應也、初筮告以ニ剛中一也再三瀆、瀆則不レ告、瀆蒙也、蒙以養レ正聖功也、

象曰、山下出レ泉蒙君子以レ果育レ德

×

今は題目に示せる如く象傳のみに就いて分析的解釋を加へて見る。山や水の象徵的意義に就ての分析的解釋は本誌上に屢々諸氏が詳論されてゐるからそれ〴〵參照せられたい。元來男女はそれ〴〵の生殖腺を持つてをり、各々特異の生殖腺、卽ち睾丸、卵巢は男女生理の本質的相違であるとされてゐる。ビセクスアリテート（兩性具有）觀によれば、男女兩體に異性の生殖細胞が殘存してゐる。卽ち女子體內には卵巢ばかりでなく、睾丸細胞が多少とも存してをり、男子體內には睾丸の他に卵巢細胞が幾分存してゐる。これ等異性の生殖細胞は潛在的のエネルギーとして、多くの場合には外にあらはれないが、何かの事情のもとには動的エネルギーとして發現することがあると。なほ性愛の泉と流派に就ては本誌第三卷第四號に詳說されてゐるから參照せられたい。

さて、特異の內分泌物は男女兩性の發達をなすものであり、第一には色情の發動が起き、これが性中樞へ湧出すると、そこに性慾が起る。第二には男は男らしき徵候を女は女らしき徵候をあらはして來る。また生殖器以外に於ける男女の相違もこの一つの兩性成長であつて、第二次成長と云はれてゐる。

「泉とは水源にして高山峻岳より出づ。源泉一にして百千に汎濫す至る所、終ること難し。人の天より受くる德性の源泉は一脈なりと雖も、その情慾の馴習によつて誘引せられ人として學ぶことなく道を明らかにせざるは蒙昧、正に學ぶ可き要は行を果すこと。士は百行ありと雖も心に道に學び得て夫を賤み行ふなり。德者善人と稱せられるには情欲に沈むことなくその本たる行を果し遂ぐるなり。育の字は養ひ生ぜしめて敎へ化するなり。由て行を果さば自然に天德を養育するなり。」云々。

高山峻岳は屢々ペニスの象徵となり、又山の下にある泉は胎內又は子宮の象徵となる。個々生物の生命には限度があり、個體は死滅するが、種族保存本能に依る種族

は補塡され、增加して行く。周易繫辭下傳に、天地絪縕萬物化醇、男女媾精、萬物化生とあり、種族維持の唯一の方法は生殖作用であつて、凡ての生物は生殖によつて初めてその種族を維持して行く。

文化人は躾け教育の堤を築いて野性生的本能の汎濫を防ぐ。併しこれは抑壓を過度せしめてはならない。現實に於ては性的能力の昇華(醇化)をなし、外界に向つて正常な充足をなすことによつて野性的本能の支配から免れるのである。人間活動原泉(性の泉)は、何れかにその吐口を求め得ないと必ず累積を生じるから、抑壓前期の經驗記憶を啓培して潜在的な德性をして恒久不變的な根强さをもたせ、變態化にそなへねばならない。

×

胎內生活の安逸を慕ひ現實（冷酷無常な世界）から逃避することは定着に基く。佛教では、蒙昧のことを從二無始之際一一念不覺長夜昏迷不レ了二眞理一生二能一切諸惡煩惱一（毘婆沙論）と說いてゐる。煩惱、蒙昧は定着、固定思想であり、吾々の日常生活に於て內部に潜在してゐるもの、卽ち無意識裡に發酵せるものと言へる。吾々は潜在的なものを引出して、これを意識化せねばならない。非現實的なものゝ意識化により現實生活の苦感を經驗した吾々は智能をもつて更に自己の中なるものを分析せんとする。前に引き出した潜在的なものは必ずしも社會生活に無價値なものではない。慾望否定、生活否定の極端な觀念論に至ては、神經症、自殺の素因である。吾々は自己の中なるものゝ聲に從て行爲する生活では自然や社會に背反することなく、唯これ等に順應することに於てのみ人間價値の所產を見る。此の場合快感に左右さるゝことなく、反つて快感の基礎を利用する。吾々が一個の自然的動物的存在として本能を有する限り、慾望と傾向を捨離し得ないが、現實原則に由て合理化さるゝ限度の慾望と傾向を吾々の生活に是認し、その意志の規定に基き現前の事態を覺照する。

ペスタロチは "Wie Gertrud ihre Kinder lehrt"(1801)『ゲルトルードは如何に其の子供を教育するか』に於て自然の儘に拋擲された土地は、いばらや雜草で滿たされる。人間も盲目的の自然に任せてはもつれた直觀以外何ものも得られぬと言つてをる。彼の直觀は外的直觀と共に宗教道德の源である內的直觀を意味する。惡の源は外に在らずして內に在る。內なるものゝ荒んだものが惡である。自然の理性化を說き、理性の自然化を說くシライエルマッヘルの未だ理性化されざる自然に相當する。ペスタロチに於ては自然は善惡兩樣の意味をなして居る。彼にとつては自然の發達を傷ふことなく（九九頁中段へ）

精神分析
感想と經驗

名映畫分析鑑賞と講演の會に際し、精神分析學に關する感想又は經驗をお洩し願ふべく左記の諸氏に往復ハカキでお尋ねいたしましたところ、早速御返事下さいまして誠に有難う存じました。同文は講演等當日のプログラムに添附して來會者諸氏に配布すべき筈のところ、手違ひのためその意を得ず、こゝに掲載させて頂くことに致しました。右の儀御諒承下さいますやう願上げます。（プログラム係）

○　　高田義一郎

拜復、精神分析は「三つ子の魂百までも」といふ日本に古來ある考を科學的に證明したるものと愚考致候。貴酬まで。

○　　尾高豐作

精神分析はA・ブリルのイントロダクションを讀んだのが今からもう十何年前のことです。それからフロイド、ユング、アドラー、フィスター等次々に讀みました。今日では子供の問題について色々の研究觀察思索をする上に、一つの常識となつて私の智識の糧を供給してゐますが、この點はアメリカあたりでもスタンリ・ホールの思春期研究以來三十年に亘る兒童研究の發達にとつて大きな基礎的貢獻をしてゐるのと同じであると思つて、サイコ・アナリシスの價値を再認識しつゝあります。殊に敎育、不良兒の敎護、精神衞生の方面に少からぬ意義を感じてゐます。

元來、この研究は單に心理學上の知識として興味があるといふよりも、寧ろ自分自身の內的生活を救濟し自覺し、家庭問題や、青年的煩悶の解決に役立つものと存じます。一寸感想まで。

○　　坪田讓治

元來、鬼精蛇心の私、精神分析の淨瑠璃にかけられその本體を見破られることの恐ろしく、都塵の中に潛み隱れて居ります次第、御諒察願上ます。且つはあのやうに拜趨何かと御示敎にあづかつた私が、斯くも御無沙汰の次第を見るも精神分析學の威力如何がであるかは申すまでもないことに御座いますと、斯く書き乍らもこの文章がまた分析されるであらうなどと考へ、さい限ない現れで御座います。それよりか近日拜趨この鬼蛇の心を分析し、昇華させて貰ふこそ急務であるとまた考へ直す次第でも御座います、ではいづれ後拜眉の上。

○　小倉ミチヨ

娘の頃から自分の生活を内省的に觀察すること、周圍の人々が自他の生活に就て語り合ふのを默々として聞いて居る事に興味を持つて進んで來た私は其れが性的心理學に於ける根本の研究方式にも適つて居る事を夫に敎へられて喜びましたが、精神分析に於ても意識下の現象を意識の表面へ引き上げるのは、結局は内省の力である事を見て、大層興味を感じて居ます。

○　水谷準

フロイド全集の一册に文藝に關する觀察の書(「分析藝術論」)がありますが、これを江戸川亂歩氏から借覽して、實に興味深く讀みました。當時希な熱情の讀書でありました。――探偵小說も最近二三精神分析を取入れたものがでて來ましたが、木々高太郎氏の「網膜脈視症」など絶品の一つでありませう。扱ひ方によつては。まだ〳〵探偵小說に精神分析を取入れる餘地があるやうに信じて居ります。

○　宮田修

精神分析學は近代の學界に發見された巨大な收獲物であると信ずる。是を醫術の上に犯罪學の上に應用して先人未發の成續を得つゝあるのも所以あることであるが、是を我が敎育上に適用する時、更に甚大の效果あるを認むる。大槻氏始め同志の學徒によつて創設された東京精神分析學研究所の健全なる發達を祈つて止まぬ。

○　辻潤

精神分析學に就て自分は、なんの智識も持ち合はせてゐません。フロイドの名前も以前から耳にしてはゐますが、まだ彼の著書なども一册も讀んではゐません。しかし、ただ私は人間の潜在意識(?)と云ふ世界の不思議だけはいつでもかんじてゐます。私が病氣をしてゐる間に見たギジョンはまことに恐ろしいもので、それを一々今說明は出來ませんが、現實と云ふものの姿がまるでちがつたものに見えたことだけはたしかです。私は自分が天狗になつて飛べると思つて、家根から落ちたのはまことに自分ながら痛ましくも滑稽なことだと今でも時々思ひ出しては可笑しく思ひますが、二度目にはたしかに自分は空を飛んでゐました。(勿論、それは夢の中の話です――私が裸體で畑の中を走りまわつてゐたのはたしかにソムナンビユルの狀態にゐたのだと思つてゐます。)

人間の潜在意識の中にはなにがひそんでゐるかわかつたものではありません。たぶん凡ゆる動物からの生物意識がひそんで

ゐるのではないかと思はれます。夢の中ではこれ等の意識が解放されて自由に活躍するのだと思ひます。私は夢をかなりハッキリ記憶してゐることがあるので、そのまま散文詩風に表現したものが二三あります。内田百間氏のものなどはたいてい夢から構想されたもののやうで、現在の日本の文學ではまつたく獨特な作品だと考へてゐます。例のジョイスの「ユリシス」などは代表的な作品なのでせう。

×

なぜだか私にはわかりませんが、阿片やハシシュやアルコホルはたしかに人間の深い本能——卽ち潛在意識を呼ひ醒ますものだと云ふことは周知の事實です。私なども酒をやめてゐるとまことに空想力が衰へ、聯想作用が鈍くなつてしまふのです。人間がみんな夢遊病者のやうになつても困りますが、さうかと云つて所謂常識で一切を片付けてしまふのもまことに危險千萬な話だと思ひます。御答になつてゐないかも知れませんがこの位ゐで失禮します。

○　富田義介

(1) 不眠症の○が私に與へた夢の報告に曰く、「可愛い熊がゐます。谷川のほとりです。板橋がかゝつてゐます。橋板が四五尺落ちてゐて渡れません。私は熊のゐる所、橋の袂から思ひきつて其のギャップを飛んで後へ振返つて熊を招きます。熊はギャップを飛ひこえて素直に私に隨いてきましたので、私は喜び勇んで坂路を駈上らうとします。すると忽ち日が暮れて眞闇になります。私は恐ろしくなつて坂路を駈け下ります。胸騷ぎがして眼が覺めました。

×

(2) 自由聯想法によつて私は○の聯想を求めた。○の答に「可愛い熊——D夫人の可愛い顏、彼女の熊に似た美しく力强いトルソ（體の格好）——自分が彼女を連れださうと云ふ空想を有つたこと——困難と危險はあるが思ひきつて口說いたら自分に隨いてくるかもしれぬと空想したこと——急に日が暮れて恐くなつたこと私——の氣が咎めたこと——そんな不逞な妄想は許されぬと考へたこと。

×

(3) 私は此れに依て○君の不眠の原因の一部を知り得ると共に「夢の仕事」の巧妙さに驚かされたのである。

×

○君が熊とD夫人とを聯想しうる迄には抵抗の爲に大分と手間取つたことを附加へて置く。

講 座

精神分析の治療法に就いて

北垣照雄

現代の心理學と二十年前のそれとの間に於ける最大の相違は、恐らく、心理學の古い形式に於ては其の問題が全くアカデミックで且つ理論的であつたのに引替へ、今日では應用的、實驗的に非ずんば三文の値打もないと云ふ事であらう。

私は心理學者にならうとしてその用意にふさはしいと思はれてゐた、かの一層古い形式の心理學を習つてゐたのだが、それを思ひ出す事は出來るには出來るが、思ひ出すにさへなか〳〵骨が折れるほど忘れてしまつてゐる。何故なら、私は當時から今日に到る迄、意、智、情に就てのあれらの退屈千萬な抽象を、正直なところ少しも用ひた事がなかつたからだ。それらは日常生活の仕事に全く無關係で、自分の內面的問題に對しても自分に親しむ者や、それに對して寛大なる理解を持つて生活せねばならない心底や行爲に對し、何等の手掛りをも與へないかに思へるのだ。

數年前まで、一般大衆は心理學に對して細菌學同樣、殆んど興味など寄せなかつた。ギインのジイグムント・フロイド博士は早くも千八百九十九年、精神分析學上の彼の學說や實地經驗を旣に提唱し、出版してゐたが、しかしその名は醫者仲間以外には殆んど知られなかつたのである。(フロイド著の書最初の英譯は一九一三年。) 所へ世界大戰が起り、歐洲の諸病院に收容せられた兵士たちはその肉體のみならず、精神も滅茶々々になつてゐた。數ケ月にして、病める心を癒す心理療法が時の話題になつた。フロイド、ユング、アドラーの名は一躍有名になり、又旣に心理學療法家の有用な道具となつてゐた精神分析は世間の寧ろ危險な玩具となるに到つた。この時以來、心理學の問題はアカデミックなものでなくなり、學問をひけらかさない多數普通人達の興味を引く樣になつた。電話やモーターと同樣に、生活上の用務を處理するに實際有用だと云ふ事が分つて來たのである。

誰だつて、その日常の仕事で他人間と交涉する以上は多くの心理的問題――それを何とか處理しなければならない心理的問題――に出くわすのだ。或る點では最良の助手であるAが、何だか輕視されてゐるやうに思ひ、從

つて絶えず不平を抱いてゐて、その爲に同僚と巧くやつて行けないのは何故であらう。社交上は愉快な優しい人間であるBが、けちなことで一種の冷酷さをその部下達に示したりするのは、どう云ふ理由か。何故に私は何時もCを怒らせて、彼をしてその最悪の一面を暴け出させるのであらうか。何故、私の世話してゐる此の子供は、判然りした理由もないのに拗ねて見たり上機嫌になつたりする發作を交互的に起すのであらうか。何故、全く强く且丈夫であるべきあの女は何時も疲れてゐて、神經症者らしく頭痛や風ひきや不消化に常に附きまとはれ、せゝこましく、不安で、自己憐愍の心で一ぱいであるのだらうか。

　これらの事は、或時は自分自身に就て、或時は自分の友人や同僚に就て、日常生活上で自ら起きて來る疑問である。又、或る人の家庭の幸福や團體全部の幸福は、その人が他の人々を拔目なく遇し得るだけの氣轉や手腕や智能を持つてゐるかどうかと云ふ點に懸つてゐる。近代心理學に就て何物かを知るのが、何故價値あるかと云ふ理由は、その事が少くとも、ぶつかり合ひつゝある人と人との、日々の問題を扱ふ最上の道への緒を與へて吳れるからである。

　尚又、昔と同じ樣に病氣や神經病に滿ちて居る此の文明世界が、藥壜に信用を置かぬと云ふ時代に、我々は生きてゐるのだ。多くの醫者が久しき以前から知つてゐた事を、醫者ならぬ一般人も漸く覺りかけてゐるのだ。卽ち「藥品は症候に屢々手荒な仕事をする手段に過ぎない、その本當の病根は醫者の達し得る彼方にあり、彼等の診斷力の彼岸に屢々あるのだ。」と云ふ事である。しかし藥壜に信用が置けなくなつて、而もその代りになる物を我々が持合せてゐないとすると、藥への單純な信用が治療に役立つた時代よりも更に惡くはなからうか。

　所が、藥壜に代る物が幾つか、次第に知られ、感ぜらるゝに到つた。近代でヒクスン (Hickson) と云ふ人やルールデス (Lourdes) と云ふ樣な場所と結びついてゐる所の精神治療の奇蹟を、偏見のない觀察者は一人として否定し得ないのだ。所が、精神治療的天分を持つた多くの人々によつて爲された仕事はその一部分さへ公衆には知られなかつたのである。また人々を自己暗示で以て癒す樣に助け、敎へるクーエ (Coué) 氏の業績は世界的になつた。又、治癒の力は自らを知り、自らを理解するに在ると云ふ事も明に分析者達によつて證明されて來た。

×

　自らを知ると云ふ事を最上價値とする思想は人類と同じく古く、すべての大宗敎の基本的觀念の一つである。

自分自身の心の內面的働きを理解して相當役立つ程度に達する事が、極端に難しいと云ふ事は認められ、それをその程度に知る爲の多くの方法が、現代に於ると同じく昔に於ても、說かれてゐた。この困難は通常行はれる樣な內省では自らを理解するには到らぬと云ふ甚だ驚くべき事實に、大部分は存するのである。それどころか、內省的な人々は大抵、彼等より氣輕な連中よりも、自らを理解する力を十分に持つてゐない。何故ならば彼等は何の目的もなく自己に就いて冥想して見ても、そこに强く感情の色付けがあるので、連續した思想とはならないからだ。心理療法の新しい學派が今迄發見した事は、本當に自らを知る樣に直接導き、又それを通して自らを癒す所の理論と技法である。――「私は貴方に眞實を知らせて上げる。眞實に依つて貴方は病を遁れるであらう。」

分析的心理學の諸學派を比較して得失を論じたり、それらの起源や專門的方面に深く立入つて行く事は、このやうな一小冊子のよくするところでない。この小冊子の目的とするところは、分析が治療目的に成功したのを見た事はあるが、分析の原理に就ては殆んど何も知つてゐない人々のためにその原理の一般を說かんとするにある。卽ち、患者の動機、思想、衝動、情緒の中への一つの穿鑿が、如何にして日々の肉體的症候と判然せぬ精神的障害とを癒す事が出來るのか――と云ふ事である。

精神的、或は感情的葛藤、卽ち「同時に二つの方向へ引ぱられてゐる。」と云ふ感じほど厄介なものはないと云ふ事は誰しも知つてゐる。同樣に、誰人も其の樣な葛藤が解消され、終熄する時には安心した、ホツとした感じのすると云ふ事も誰しも認める物だ。我々は戀々として云ふ。「私は右か左か、どちらかを確にやれさへするならば、どつちをやらうと頓着はしないのだ」と。かゝる葛藤を意識さへすれば、我々は何か窮極の決斷をなす事が出來、それで葛藤はなくなる。併し、心理學者は我々の殆んど大多數が絕えず二つの方向に引ぱられて居り、しかも其の事實を承知してはゐないのだと云ふ事を發見したのである。

人間の意識は錯雜した物で、それは廣大なる海に比較される。ピカ〳〵光る海の表面が我々の所謂、意識に當り、下方に在つて見えないけれど遙に大なる水の體積は無意識に當る。下層の水が、表面の水に絕間なく混り、その內容と溫度を變へるのと同樣に、下層である無意識は我々の意識的思考、意識的行動を絕間なく代謝し變形するのだ。

我々の意識的に行ふ事は、無意識から起る一團の衝動の結果なのである。我々が屢々意識的に身體を洗つた

り、食事をしたり、眠らうとしたりするのは、大抵は此等の行爲をする事をあまり邪魔されない時にである。我々は何故さうするかと云ふ事を意識的には問題にしてゐない。せねばならない事ならば考へて見なくても我々に分つてゐるのである。我々は意識的に讀んだり書いたりするが、それらの事を成就させる所の複雜なる過程は何年來、我々の無意識中に沈んでゐるのだ。この事はタイピングの技術に熟達してゐない者が、タイプライターで手紙を書かう（寫すのでなく）として見ればよく分る。これをやらうとしても、始めは殆んど出來ない。何故なら、手紙の文を作るのに向けらるべき意識的注意力は皆な、正しくキイを打つたり、器械を操つたりするのに向けられてゐるからだ。或る段階の幼兒には物も書けるし、又諸々の觀念を結び合はせることも出來るのだが、際限なき時間と手數とをかけない限り、自分の思想を書き留め得ないことがある――何故なら其の子の意識は書くと云ふ事の器械的な困難に夢中になつてゐるからである。羞恥に苦しめられてゐる人々は、「その羞恥のために自分が或時には無器用で氣轉が利かず、或時にははしやぎ過ぎたり馴々しくし過ぎたりするのだ。」と云ふ事を少しも覺つてゐない事が非常に屢々である。

無意識心理の內容は、實に厖大であり神祕的である爲に、優れた心理學者達でさへ、それを定義するのに困るほどである。それは未探險の國で、その國の外邊のみが假りに探られて來たに過ぎないのである。或る人々は、二つの非常に異つた部分が其の中にあると假定すべき理由を發見した。卽ち、我々のヨリ低級な動物的な衝動が發生する所の、下部意識又は潛在意識と、ヨリ高尙な理想や動機の源泉である上部意識とである。この區別は一般に承認せられては居ないが、假定として何等かの方途に役立つのである。今後の硏究で、此の區別は本源の眞實の相違に卽してゐると云ふ事が證明せられることになることであらう。

無意識は、すべての忘れられた過去の經驗と、精神的及び肉體的習慣のあらゆる根柢とを包括してゐるのだと云ふことが出來る。所謂「本能的」恐怖、嫌惡、並びに愛好の理由は全て其所にある。日常、屢々見受ける例を二三擧げて見たい。諸君は多分、扉口のベルの響に對して、子供つぽいと思はれるのだが、併し何としても打勝ち難い多少の嫌惡感を持つてゐられるであらう。諸君はその音が嫌ひだと云ふ事を意識的には承認しない。――何故なら、そんな事は馬鹿らしい氣まぐれの樣に思はれるから。併し、やはり扉口のベルは諸君が避けられるなら避けたい物なのだ。諸君の無意識の中を長い間、捜索

して行くと、多分こんな事が出て來るだらう。——卽ち大人は何とも思はない事だが、子供達の屢々失敗する樣に、幼い子供だつた諸君が、例へば扉のベルを引張つて後の方に倒れて怪我をしたとか、ベルを鳴らしたら誰かゞ扉を開けて嚇したり叱つたりしたとか、鳴らしてならない鐘を誤つて鳴らしたら其の失敗で非道く侮辱されたとか云ふ樣な事が——。諸君は直ぐに其の事件を忘れたのだ。何故なら、我々は常に不快な事を忘れる傾向があるから。しかし扉のベルに對するボンヤリした嫌悪は諸君の心に殘るのである。又、一婦人は、大きな鳥の重い羽ばたきの響に、恐怖の本能的反應と激しい嫌惡を持つのである。これは彼女が雄の七面鳥に襲はれたと云ふ幼兒々代の忘れられた事件から來てゐるのである。この樣な恐怖症は、非常に一般的であり、時には夫等の起源の全く分らぬ事がある。しかし又、想起の努力が其の事を意識の中へ容易に取返す場合もあらう。過去の經驗を記錄する以外に無意識は貪慾、虛榮心、慘酷性、個人的危險の恐怖、開けた人間性の恥ぢとする所の、實にあらゆる本能と云ふ樣な、許されざる傾向を含むのである。

總ての常態的人間、並びに多くの高等動物も、生れながら廉恥の意識と自己是認（彼等をして自分の思想や行動を多分に排斥せしむる自己是認）の慾望とを持つてゐると云ふ事實によつて、人間の心と云ふ物は、其れ自身一致してゐないものだと云ふ事が直に分るのだ。我々の中には「何物か」が、一般に良心と呼ばれて居る所の「何物か」がある。併し、このものの爲に心理學者達は種々な深遠なる名稱を發明したのだが、この「何物か」は心の中で宛も檢閱官の樣に振舞ふのである。この自己批判力の或る部分は意識に屬し、或る部分は無意識に屬するらしい。これは我々が眼醒めてゐて、自分の思想の中に何が起りつゝあるかをチヤンと覺つてゐる時、我々を惱ますのであるが、多くの人々も夢の中や半睡半醒の中にそれを感ずるのである。そして實驗によれば、それは催眠狀態に於ても嚴として存するのだと云ふ事が分る。かくて、例へば或る人が或る時刻に寢床から起きるべきだと云ふ事を承知してゐる場合、良心の强迫を感じて自分の時計を見ることが出來、四邊の樣子の分るほどに目の醒めきる前に、身體の方はもうちやんと起上つてゐる事はよくある物だ。催眠術に掛かつてゐる間でさへ、正直で道德的な人間に、盜むとか其他あらゆる罪を犯す樣にさせるには、非常な努力を要するとマクドーガルは云つてゐる。德義心に牴觸しない事柄に於て、その人が全く催眠術者の意志に從はうとしてゐても、やはり良心の抵抗はあるのである。それは、或る人々が無意識中のあの

要素(彼等が超意識として區別してゐるとこのあの要素)から來ると考へてゐる所の、高級なる衝動又は動機である。それの起源は何であらうと、疑ひのない事は、それのために人間の魂の中に絶間なく葛藤が構成されてゐると云ふ事だ。何故なら、それは低級な本能に對して常に戰つてゐるからである。人間の自覺してゐる道徳的鬪爭なんぞに(自分が爲すべきだと分つてゐる事をやると云ふ樣な、日常の努力に)此の考へ方を適用した丈では勿論、この考へ方に何の新しい所もない。近代の心理學者達が我々に說明して吳れなければならないのは、「これらの意識的葛藤なんぞは、無意識に於て永久に續けられてゐる葛藤(そのために戰爭は起きてゐるがそれを我々は全く氣付いてゐない葛藤)に較べれば、些少なことに過ぎない」と云ふ事である。この戰爭こそは肉體に於て精力を消耗し、不健康や神經症を釀す物なのだと分析者は云ふのである。

我々の見て來た如く、意識的葛藤はやり切れない物だが、併し何方かへ果斷を以て決めてしまへば、それで解決が付く。所が無意識で行はれてゐる葛藤と來たら、絕對に意志の審判に迄持ち來されないのだから、永久に解決が付かない。分析者の仕事と云ふのは無意識を探つて、體力を吸ひ減らしてゐる隱れたる葛藤を明るみへ持來す事なのだ。そこで大抵、患者は苦痛に直面し、之を處理する事が出來る樣になつて、そのため大骨折が休まり、體が回復して正常な活氣が出て來るのだ。實際、この事は我々の生命力を供給する。水道管の漏りが、發見され塞がれたのに似てゐるのである。

此等の無意識的葛藤の源は無數であるが、恐らく最も一般的なのは何等かの恐怖であらう。自分自身並に家族に就いての疾病恐怖、或は事故恐怖、變化恐怖、罪惡恐怖、貧困恐怖、うるさ型恐怖、老年恐怖、及び死の恐怖は最も普通である。我々は此等の多くを禁制(卽ち故意に或る事に就て考へるのを拒否)するか、又は抑壓する(卽ち無意識に深く沈下させてしまひ、爲に我々は全く夫に氣付かなくなる)。併し恐怖は、御承知の如く、精神的肉體的緊張を起さしめ心と體をして一生懸命それに抵抗せしむるのである。この緊張は疲勞を生ぜしめるが、之が不眠症の主要原因の一つである。精神分析は恐怖の原因を意識の野に持來し、此所に於て患者は夫に直面し、夫を處理する事が出來る樣になつて、肉體的の骨折が休められるに到るのだ。この故に、藥では癒らぬ不眠症を癒す心理療法の力が其所にあるのである。

多くの心理療法論の書き方を見ると我々は、フロイドアドラー、ユングが彼等の說を信用せず嫌がつてゐる世

間に對して自說を提唱する迄は、人間の魂は何等その無意識的軋轢の解決法を發見しては居なかつたかのやうに思はせられる。しかし勿論、之は誇張であつて、かゝる偉大な思想の信奉者等はとかくかう云ふ風に誇張し勝ちである。實際の所は、全然健康な體が食物を處分するのと同じ位に、健全な心は自分の葛藤を處分して、その事を特に氣にかけないと云ふわけである。あまり頑健でない心や敏感過ぎる心には、自らを調停するに多少とも都合の良い法が他にあるのだ。例へば、宗敎や哲學や困難な仕事は、氣晴らしになるし時には治療に役立つことがある。例へば宗敎的タイプの人を取つて御覽なさい。非常に屢々そのやうなタイプの人の主なる精神的葛藤は罪惡を恐怖する事に關係がある。何故ならば、彼は常々人生を罪の方面からと正義の方面とに分けて考へてゐるからである。此の樣な人は、もし誠實であるならば、何か告白と云ふ樣な形式で非常に屢々葛藤を解決するのだ。實際、時々云はれる事だが、自己反省と僧侶への懺悔とは可なり分析の代りになるべきだし、又なつてゐるのである。或る場合に於て之がさうであると云ふ事は疑ひがない。もしその僧侶が熟達した分析者であり、時間の制限がなくて一人々々懺悔者の始末をつける事が出來、どんな事でも云へる全くの自由があるならば、この二つの事——分析と懺悔と——は同じであらう。しかし聖禮典的な懺悔と云ふ、普通の條件の下に於ては形勢は全く違ふのである。違ふ一點を假りに取つて見るならば、我々の無意識的恐怖は、必ずしも「罪惡」だと云ふわけでは決してなく、それ故に神樣や僧侶に向つて懺悔するべき事だとは思はれないのである。もし諸君が常々懺悔に行くとしても、諸君は自分の母親が癌で死んだから、自分も癌で死ぬかも知れない恐れを告白されるだらうか。多分、諸君は自分にそんな恐怖があるのを覺つた事がなかつたらう。よしんば、自分がそのやうな恐怖を持つてゐることを覺つてゐたとしても、諸君は其の恐怖が罪惡であるとはまさか思ふまい。

何に致せ、心身共に健康な者は精神的葛藤を大抵巧く裁いて行くと云ふ事は確であるが、しかし最善の境遇に在つても矢張り、かゝる健康はあてにならないものだと云ふ事を認めないわけには行かない。如何なる瞬間に於いても、一見ホンの一寸した特異の緊張のために、正常な人間の心的均衡が失はれ、その後さつぱり自分を加減して行けなくなると云ふこともあるものだ。これが起ると我々はそれを「神經障害」と稱し、醫者は休養して心配から離れる樣にと命ずるのである。この種の非道い患者の或者は幸運にも、休日と云ふ名義で休みが貰へるの

だが、しかし煩悶や心配で疲れ切つて居る者が一體、如何にして此等の苦痛から逃れようとするのだらう。苦痛から逃れ得なかつたからこそ彼は參つてしまつたのである。かゝる場合に無意識の作用に對する何等かの知識があれば、大いに實際的に役立つことが分るであらう。（Geraldine Costerによる。）

精神分析語彙（二〇）

一、複合的行り損ひ――行り損ひとしての一つの行爲の中に二つもしくはそれ以上の無意識的意圖の認識せられるを云ふ。

一、復讐――「小兒の復讐的攻撃は或る部分、小兒が父親から期待する懲罰的攻撃の量に依つて決定せられる。」（フロイド「文明と不滿」）

一、不能症 Impotenz――男子にしてその異性對象に對する戀愛感情を肉體的に表現することの出來ないものを云ふ。女性の場合には普通にこれを不感症と呼ぶ。

一、フモール Humor――フモール（諧謔）はさまざまな感情の支出を節約するところから生ずるとせられる。これは經濟的説明であるが、更に別に動的説明を下すならば、諧謔は本人の心的重點が自我から超自我に移り、父として子を眺めるごとく本人（超自我）が自分自身（自我）を見下すところに生ずる。

一、扮裝――夢の「歪み」のことを別にかく呼ぶ。

一、部分本能 Partialtrieb――口唇、尿道、肛門、その他性帶域に由來する部分的性本能を云ひ、また本能成分 Triebkomponente とも呼ばれる。「性機能はまづ本能成分の全部の活動となつて表れる。これ等の成分は性的の肉體帶域に依屬し、一部分は相互一對（サディスムス對マゾヒスムス、窃視本能對露出本能）となつて表はれ、相互に獨立して快感獲得に向ひ、大抵は自分の肉體をその對象とするのである。このやうに性機能は、始めの程は中心がなく、殊に自己色情的である。その後、その精神の中に纏まりが出來る。第一の有機的段階は口唇的成分の支配下に立ち、次に擡頭するものは虐待的・肛門的時期である。さうして最後にやうやく到達する第三時期に入つて性器の主權が確立せられ、それと共に性機能は繁殖の役目に從ふことになる。」（フロイド「自傳」）

一、文明 Kultur――我々の生活と我々の動物的祖先の生活との相違を明かにし、また二つの目的（つまり、人類を自然から擁護することゝ、人類相互間の諸關係を制定することゝ）に奉仕するところの事業や制度の一切を文明と呼ぶことが出來る。（フロイド『幻想の未來』及び『文明と不滿』）

一、分離 Isolierung――人々が或る事を滑稽に感ずるのは、その事自體が滑稽である場合（客觀的）と、感ずるものゝ心理が既にそのやうな條件を主觀的に作り出してゐるためとであ

る。後者の如き心的條件を「分離」と呼ぶ。「遊離」「孤立」など譯することも出來るかと思ふ。

一、分裂 Dissociation――フランスの精神科醫ジャネーの用語である。心理的過程を纒めることが素質的に出來ないものがあり、そのために心理生活の「分裂」を生ずるのだとの假定を彼は下し、それがヒステリーの特質であると說いた。精神分析は分裂說をとらず、抑壓說を以てこれを說明する。

一、變質 Entartung――「頹廢」Degeneration と云ふ語も同義に用ゐられてゐる。併しこれは精神分析術語ではなく、精神病學的考へ方に屬してゐる。多く外傷的原因或は傳染性原因のない、あらゆる種類の病氣をかく云ふが、併し多くの心理的障害に對して原因的說明のつかなくなつた場合に、好都合に揑造せられたる考へ方を示すものではなからうか。但し生物學的考へ方の場合はこの限りではないやうに思はれる。

一、變態――常態と變態との本質的差違を精神分析學は認めない。たゞ生活が現實に適合するか否かと云ふ、相對的事情に依つて分れるのみである。性心理に關しては、幼兒的、部分本能的にして、性器の統裁なきものを、變態性と呼ぶのである。

一、別我 Doppelgänger――二重性、幽靈、影など譯するも可なるべし。「別我の題目はオツトー・ランクがその甚だ透徹した研究を試みてゐる。(Otto Rank: Der Doppelgänger.1914) この研究に於いては別我と鏡中の姿、物に映つた黑影、守護符、靈の信仰、死の恐怖などゝの關係を調べてゐる。併し彼はまたこの題目の驚くべき發達史を明かにしてゐる。何となれば別我は元來自我の破滅に對する保障であつたからだ。ランクの云ふところに依れば『死の力の恐るゝに足らざることを執念深く信ぜんとすること』であつたのだ。さうして『不死なる』靈魂は別我の肉體の方の幽靈に相當するものであつたらしいのだ。死滅に對する防禦としてこのやうな別我の發明は夢の表現の中にもこれと丁度似たのが發見される。併しながら、そのやうな思想は、兒童や原始人の心に力を振つてゐる無限な自己愛、本源的なナルチスムスから發してゐるのである。さうしてこの段階を卒業すると、別我は違つた樣相をとるやうになる。不滅不死の保障であつたところからして、その別我は無氣味な死の先驅である。」(フロイド「氣味惡さ」)

一、便祕――糞便を腸管內に保留することは、肛門帶域の云はゞ自慰的亢奮を利用するための、或は世話してくれる人への關係に適用するための、故意的過程であつたのだが、後には神經症者は非常に屢々見られる便祕の根元となるのだ。(フロイド「性說」)

――未完――

アブフウブ

神樣以上のもの

不老泉院主

「猛獸のなかで熊ほど愛嬌者に思はれてゐるものはないやうである。

外國の本にあつた話だと思ふが、牧師が子供達にむかつて、世界中で誰が一番えらいかと質問したさうである。すると學校の先生ですと一人が答へた。ほかにと言ふと、うちのパパですと答へるものがある。それよりもつとえらいものはと、牧師がだんだん誘導的に質問すると王樣が一等えらいと答へるものが出て來た。すると、誰よりもえらいのはライオンですと最後に言ふものが出て、來て滿場これに和したといふのである。

牧師は神樣と答へさせたいつもりだつたらうが、子供は無邪氣な實感にもとづいてライオンを一等えらいものとしたのであらう。そこへ行くと、一般の子供達には、熊はさほど怖しい動物とは考へられてゐないやうである。」云々。

と岡田三郎君は九月廿三日の都新聞に書いてゐた。これだけの短文の中にも、我々分析者には默過出來ない問題が二三含まれてゐる。

何故、子供は神樣よりもライオンの方がえらいと考へるのであらうか。岡田君は「無邪氣な實感」と云ふ常識說を以て片付けてゐるが、ライオンは動物であつて、萬物の創造者たる神樣の足許にも及ぶべくもないことは、牧師を俟つまでもなく、誰だつてさう考へる筈だ。然るに子供はライオンが一等偉いと考へる。牧師の悲觀面が目に見えるやうだ。併し、分析眼を以てこれ等の子供の 答を見ると、非常に辻褄が合つてゐる。先生、パパ、王樣、ライオンと、みな父シムボルの一聯のコムプレクスではないか。而もライオンと云ふトーテム（動物祖先神）父を最上位に置いてゐるところは、子供に再生する野蠻人心理をまざ〲と見せられて、科學的に甚だ面白い。神樣などゝ云ふものは、トーテム父の觀念的に洗練せられたものに過ぎない。子供はまだ野蠻人である。彼等に大人（文明人）の觀念方法を期待する方が間違つてゐる。

偉いと怖しい

岡田君は右引用の文中で「えらい」と「怖しい」とを同一觀念として取扱つてゐることを、讀者は直ちに氣付かれるだらう。これは勿論、岡田君が子供の頭の程度にまで假りに降下して來ての物の云ひ方なのだが、併しそれにしても「えらい」と「怖しい」とを同一視してゐることは無意識觀念內容を示すものとして人々の科學的興味をそゝる。

野蠻人や子供（のみならず、文明人の無意識）にとつては「怖しい」と云ふことゝ「えらい」と云ふことゝは同じであるのだ。「えらい」が故に「怖し」く、「怖しい」が故に「えらい」のである。また「えらい」と云ふことの內には、同時に「賢い」の觀念も這入つてゐる。それ故に「畏」と云ふ語は、一方「かしこし」と讀

むと共に、他方に於いて「おそれおほし」とも讀む。「かしこい」と「えらい」と「おそろしい」とは無意識に於いては全く同じであるのだ。

畏と賢とは別義で、音の共通は偶然のやうに人々は云ふかも知れ無い。併し現に『言海』にさへ「賢」の條に「智者ハ畏キ意」と訓してあるではないか。さうしてこれ等はみなトーテム父の觀念內容であつたのだ。さうして今もあるのだ。無意識に於いては文明人もみな殆どまだ野蠻人であることを忘れてはならない。分析によつてのみ人間は始めて言葉の正しい意味に於いて文明人となることか出來るのだ。

豫防名案

ここに引用した漫畫は九月上旬に嗜眠病に對する或る種の人々の心理を鋭く摑んだものである。一つの不安に襲はれさうになると、その不安に襲はれて了はない前に、その不安に襲はれたと同じ狀態に自ら進んで陷つて了ふことに依つてそ

☆豫防名案　加藤悦郎

記者「ヤ・一家心中？」醫者「催眠劑を服用しとる」巡査「遺書があるゾ・なに・眠り病の先手を打つて・催眠劑を飲みました」

（昭和十年九月二日・都新聞に掲載）

の不安を克服すると云ふ微妙な心理を表現してゐる。勿論、これは漫畫家自身の心理特質を告白したものであるが、併し實際あの當時に、嗜眠病の不安に堪えかねて自殺して了つた人のあつたことを確に新聞紙は報道してゐた。成程、死んで了へば、それに越した不安克服法はない。最も徹底してゐる。眠り藥では、やがて眼が醒めるであらう。醒めた時に病氣が通り過ぎて了つてゐてくれゝばいゝが、もしまだブラついてゐた日には、不安は前よりも大きいであらう。

併し死なせて了つたのでは、問題はあまり嚴肅になり過ぎて漫畫の題材にはならない。そこで作者は主人公たちに眠り藥を服ませた。

不安や恐怖を克服するに、その先手を打つて不安に襲はれた結果を事前に實現して見せると云ふ心理は非常に特異なやうに人々は思ふかも知れないが、さうでない。我々は常に夢の中でそれをやつてゐる。夢にお化けが現れる。恐ろしい。何とか胡麻化してその場を逃げねばならないと云ふ時に、俺もお化けだと云つてお化のやうに振舞つた夢を見たと、一友は私に話した事がある。人通り稀な町はづれで夜分泥棒に襲はれる。金を出せとおどかされる。仕方がない。ナニ金だと見そこなうな。俺を誰だと思ふ、俺も泥棒だぞ、など、内心ビク〱しながら云ふ場合もないとは云へない。金持の息子がプロレタリアがる心理などにもこれに類したものがあらう。

これ等はみな不安の狀態に自ら這入り込むことに依つて不安を克服しようとする方法だ。故にこれ等は不安や恐怖の行動である。併しさりとて不安克服願望の充足行爲でないと何人が云ひ得るか。

婦人と古本

某女子大學前の書店員が拙宅へ來ての話に、婦人の讀書家は高い本を買はないと共に、古本を殆ど買はない。故に自分の店の附近には古本屋と云ふものが殆ど存在しないと云つてゐた。これは面白いことだと思ふ。如何にも女性心理をよく反映してゐる。彼女等は總てに消極的であると共に、従つて非常に潔癖である。この消極性と潔癖性とは、彼女等の貞操性やナルチスムスと必然的關係がある。では、婦人に貞操を期待する以上は、そのナルチスムスや消極主義を我慢しなければならないのであらうか。常識は然りと云つて來た。併し分析學は必ずしも然りとは云はない。

お安くない

男女の愛情が相互に濃蜜であることを「お安くない」と云ふ。どう云ふわけでこんな言葉が成立したのか、普通の言語學者には說明がつくまい。分析學徒と雖も確言は出來ないが、恐らくは、リビドー經濟學的な考へ方に基いた表現であらうと思はれる。卽ち、リビドーを多量に支拂ひ合つてゐる(高價に評價してゐる)と云ふ意味からであらう。

「一日千秋の思ひ」などゝ云ふ言葉も、やはりリビドー經濟學(觀念支出)から說明出來ると思ふ。一日を觀念するに普通は一リツトルだけのリビドー量を支出

せねばならないとすれば、千秋を觀念するには幾千倍の觀念量を要するわけだ。然るに、時間的には僅か一日でも、その一日中に普通一日中に消費する觀念量の幾千倍を支出したとすれば、一日千秋の思ひをすることは當然である。

白樂天とロレンス

岩倉氏譯の『太陽』では、日光浴する心持が實によく描いてある。吾人は白樂天の『負多日』を聯想した。兩者を比較鑑賞して御覽なさい。

「杲杲多日出　照我屋南隅　負暄閉目坐　和氣生肌膚　初似飲醇醪　又如蟄者蘇　外融百骸暢　中適一念無　曠然忘所在　心與虛空俱」

時代と民族性とを異にしてゐるので、感じ方も相當に違つてゐて、そのくせ似てゐるところがある。

（八三頁下段から）

人爲的の方法でこれを支持し促進することが教育に於ける大事な役目であつた。（「自發性の原理の展開」佐藤熊治郎著、參照。）自然に從ふことは彼の主張の根本原理であつて、人間は神の力によつて自然に生長發達する。而して諸能力の發達は練習によつて遂げられるのであるから、教育者は自然の發達を自然的に調和的になさしめるやう助力するにあるといふのである。

吾人は自然を十分に理解し、更に發達の何たるかを知り、自他の心に關して徹底し、心の働きを正しく理解すると共に、現實に對して親しみをもたねばならない。

（此項終り）

内外彙報

名映畫分析鑑賞と講演の會

本研究所教育部主催の右の會は、豫報の如く、十月五日(土)午後一時及六時に二回、仁壽講堂に於いて開かれ、大成功裡に終了した。今、その經過を世界に互るわが讀者諸賢に報道しておくであらう。

分析映畫『心の不思議』が始めてわが國に渡來したのは、大正末期であつたが、それはわが國に斯學が未だ今日の如く一般化しない頃であつたので見た人も少く、見ても何の事やら正しい理解を持たれないまゝに忘却されて了つてゐるので、何とか再びこれを取上げて一般に提示することは我々の義務であると考へてゐたが、その映畫が何社の手にあるかを知ることが困難であつた。然るに八月六日、突如、高橋鐵氏の飛報は研究所に屆いて、それが中央映畫社に在庫してゐると分つたので、直ちに全員の活動となつた。

即ち八月十四日夜アメリカン、ベーカリに於いて催された研究會は完全に映畫講演會の下相談となつた。同十七日、仁壽講堂借用方の相談は大槻氏と講堂主任千葉氏との間に交され、十九日には大槻岐美氏借用前金を渡して契約を確立せしむ。同日辻修氏福澤一郎氏を訪ふて、同會用ポスター畫稿執筆の事を依賴して、氏の快諾を得。廿二日には中央映畫社に映畫二作『心の不思議』と『プラーグの大學生』の借用前金を渡す。

九月九日にはまた研究會を開いたが、これも映畫講演會の相談となつた。この日チラシ千枚だけ出來、切符とチラシとを各員に分配す。チラシはライオン本舗の助力に依り六千枚印刷したが、不足を感じたので、辻氏の奔走により更に大和ゴム製作所にて一萬枚增刷することゝなり、十八日に出來。福澤畫伯案のポスターは藥舗「はれやか」とタイアップにて同舗にて三百枚製作してくれ、廿四日に出來。各員それを全市に配布す。

當日(十月五日)は午前九時頃に大槻夫妻、辻、倉橋、高橋皆川の諸員、諸岡博士、中山生堂氏等會場につめかけ準備をしたり、試寫を見たりする內、正午を過ぎ、高橋春子、千頭幹喜近藤育代、長田耕一、大崎信夫の諸氏參加、その內、所員全部出揃つて無事兩回の催しを果した。

次第は左の如くであつた。

晝――

開會の辭……………………………………辻　修氏
講演『東洋式精神分析及合成術の建設』……諸岡　存氏
同『映畫と精神分析』……………………長谷川誠也氏
映畫『心の不思議』………………解説　高橋　鐵氏
(休憩約十五分…………)
講演『事實と意味』…………………………石丸　梧平氏
同『プラーグの大學生と二重人格の問題』…大槻　憲二氏

映畫『プラーグの大學生』…………解說　中山　生堂氏

×

夜――

開會の辭…………………………………宮田　齊氏
講演『血の恐怖の心理』…………………長崎　文治氏
映畫『心の不思議』……………………解說　高橋　鐵氏
（休憩約十五分…………）
講演『是の如き子供は如何に處置すべきか』霜田　靜志氏
同『プラーグの大學生と二重人格の問題』…大槻　憲二氏
映畫『プラーグの大學生』…………解說　中山　生堂氏

終了は十時二十分位。講演には擴聲器が備付けてあつて聽きとり易く、講演と映畫の合間合間にはポリドールの蓄音器の演奏があつて、來聽者を慰めた。終了後、直ちに舞臺面に關係者の內居殘つた人々の全部が集り紀念撮映（口繪參照）して、散會したのは十一時頃であつた。

來會者晝夜兩回一千餘名。相當の盛會であつた。聽者はみな洗練せられた人々のみで、その點からも却々の盛觀だとの評判であつた。この種の事業には大抵は赤字を出すのが常であると聞いてゐるが、我々の會は幸にして多少の黑字を示したのは、所員一同の無私なる盡力にも負ふものではあるが、また他方斯學が若いジェナレーションの間に力強く浸潤しつゝあることを證明するものと云はなければなるまい。十月十四日夜、例のアメリカンベーカリに於いて、研究會を兼ねて慰勞會を催した。その時の記事はその項に讓る。

なほお斷りしておくが、講演豫定者の內、飯島正、武田忠哉兩氏は急用又は病氣のため已むなく缺席、來聽者の期待にそむいたことは申譯ないが、萬已むを得ざる事情故、あしからず御諒承願ひたい。また講演の內容は各講師の校訂を經て本誌次號に大體紹介したいと思つてゐるが、或はその內に缺ける人もゐるかも知れない。

十月十三日の都新聞演藝欄に次の如きゴシップが出てゐた。

「映畫好きの小傳次、精神分析に關する映畫と講演の會の入場劵を貰ひ、映畫の文字だけに惹きつけられて行つて見たら、映畫は講演を役立てるためのツケタリ、でも歸つて來てから曰く、講演の方に思ひがけない收獲があつた、精神生活の上に大いに悟りを開かせてくれたヨ、はまるでお寺で說敎を聞いて來たみたい。」と。もし一般の飛入來觀者たちにさう云ふ印象を與へたとすれば、我等の催しは相當成功したものと云はなければならない。

『イマゴー』本年度第一册

一、『犯罪者道德の一犧牲と發見せられざる女賊』フランツ・アレクザンダー（シカゴ）キリアム・ヒーリー（ボストン）の共著
一、『條件反射と精神分析技法とに就いて』ロレンス・キウビイ

（ニウヨオク）

一、『精神分析と條件反射』パウル・シルダー（ニウヨオク）

一、『集團精神症の病源及び經過』ローベルト・ヱルダー（ギイソ）『現代の歷史的地位に就いて』と云ふ論文が附錄せられてゐる。

一、『北米インド人の夢と幻想とに就いて』エックアルト・ジドー（ベルリン）

一、『シルレルの二詩に就いて』リヒヤード・ステルバ（ギイン）

一、その他、新刊批評多數。

『精神分析教育雜誌』本年度第一册

本號はイエニイ・ヱルダー女史の『夜驚症の一患者の分析』と云ふ論文のために全誌を捧げてゐる。

その子供は心臟神經症と夜驚症とのために分析處置を受けに來たのであるが、この患者の研究に於いては、單に夜驚症のみならず、反動構成、投出、超自我構成、本能の社會的及び非社會的發動が仔細に分るやうになつてゐて、成人分析の際の參考になるものである。

新傳記の見本

わが國に於いては近頃『傳記』と云ふ雜誌まで發行せられて傳記文學は相當に人々の興味を牽いてゐるらしいが、その硏究法には科學的要素が不足するものの如くに思はれる。

ギインの分析者エドムンド・ベルグラーは夙に種々の人物の分析的傳記を試みてゐたが、こゝに一書として纒められることゝなつた。內容は四部に分れ(一)皮肉屋としてのタレイランの心理分析、(二)無意識懲罰要求が世界史に影響を及ぼしてゐる一實例としてナポレオンとタレイラン、(三)自己戀愛的窃視病者としてのスタンダール、(四)口唇的悲觀論者としてのグラッベ等。

本硏究所硏究會例會

八月例會は從前每年休暇にしてゐたが、本年は特に催すことゝし、十四日夜、アメリカン・ベーカリに於いて開いたが、この時は映畫講演會の相談に終始して了つた。出席者は辻修、倉橋久雄、霜田靜志、大槻憲二、福間光子、土屋喜一、皆川郁夫、高橋鐵、小松德、武田忠哉、大槻歧美の諸氏であつた。缺席挨拶者は小山良修、大久保眞太郎、高橋春子の三氏であつた。

×

九月例會は特に繰上げて九日夜に同所で催された。當日は、前賣切符とチラシとを各員に配布したり、各種の相談をしたりすることに終始して了つた。出席者は、立川玄一郎、小山良修

大槻憲二、平塚義角、長崎文治、倉橋久雄、土屋喜一、霜田静志、小野田幸雄、大槻岐美、大久保眞太郎、宮田齊、小杉長平小松德、皆川郁夫、北垣隆一、北垣照雄、高橋鐵の廿名であつた。

×

十月例會は十四日夜、同所に於いて催された。この日は映畫講演會の慰勞會を兼ね、會計報告、表紙裝幀變更問題などの重要會議がなされた。出席者は、富田義介、高橋鐵、平塚義角、大槻憲二、北垣照雄、高橋春子、塚崎茂明、倉橋久雄、長崎文治、岩倉具榮、同良子、立川玄一郎、大久保眞太郎、霜田靜志今村正一、宮田齊、土屋喜一、大槻岐美、辻修、小杉長平の諸氏の他に、長田耕一氏(高橋鐵氏門下)、大崎信夫氏(日本齒科醫專在學)、千頭幹喜氏(大久保眞太郎氏親友)、石龜進氏(刀江書院勤務)など、今回の催しに特別御盡力下さつた方々の臨時御出席もあつた。

さゝやかな酒肴を供して、とにかく映畫講演會が經濟的にも僅少ながら黒字に終了したことを祝福して、和やかな空氣の内に談笑した。談笑は自然に分析的談論となつて花咲き出でたのは次の二話であつた。

一、「プラーグの大學生」と人格分裂の契機……富田　義介氏

一、「プラーグの大學生」に現れたる念慮の全能と救助空想……………………大槻　憲二氏

十時頃芽出たく散會した。缺席挨拶者は、皆川郁夫、長谷川誠也、武田忠哉の三氏であつた。

最近國内事實

▼『文藝』八月號『學藝欄批評』に大槻憲二氏稿『現代唯物論と社會分析』(都新聞六月中所載)を批評。(中村浩氏報告)

▼『買物選びの心理』小倉ミチヨ氏稿(『婦人公論』九月號)。

▼『精神分析で解ける青年期の問題』矢部八重吉氏談、三月三十日夕、中央放送局より放送)。

▼『兒童心理の文學』波多野完治氏稿(『兒童』九月號)――内に分析的見地よりの解釋あり。

▼『近代文學と精神分析』Samoa 氏稿(『英語青年』九月一日號)――大槻憲二氏稿同名論文への批評。

▼『夢漫談』大槻氏稿(『實業の日本』九月一日號)。

▼『名勝遊覽地の魅力の分析』同氏稿。(『遊覽行樂新聞』九月號)

▼『意識の流れ』加藤朝鳥氏稿(『反響』九月一日號)

▼『日蓮の性格とその精神分析』古澤平作氏稿(『科學畫報』十月號)。

▼『オセローの分析鑑賞』大槻憲二氏稿(『藝術殿』十月號)

▼『精神分析圓滿社會生活法(第八講)』大槻憲二氏稿(『人生創造』十月號)

▼『子供の野蠻性への無理解』大槻岐美子氏稿、刀江書院發行『兒童』十月號)。

▼『子供の問に不用意な答』窪田甲子郎氏稿（同誌同號）。
▼『母はこの子のために何を爲すべきか』霜田靜志氏稿（同誌同號）
▼『不良兒と神經症兒はどうして出來るか』齋藤長利氏稿（同誌同號）
▼『子供の問題全集』第一巻『兩親とは何ぞや』尾高豐作氏著（刀江書院）。
▼『メッツゲル刑事政策』(一)高橋正己氏稿――『法學協會雜誌』第五十三巻第九號（法學協會事務所發行）
▼『子供の惡癖は癒すに法あり』霜田靜志氏談――都新聞十月十七日家庭欄。
▼古澤平作氏、讀賣新聞家庭欄に分析談を十月中旬連載。
▼『職業婦人と結婚問題』大槻憲二氏談――東京日々新聞家庭欄十月十九日。
▼『近代女性の精神分析』(一)遠藤斌氏稿――京橋木挽町五ノ一『オール女性』十一月號。
▼本誌前號內容に關しては本號卷末を參照ありたし。

編輯後記

本號は映畫講演會の渦中にあつて編輯したのであつたゝめばかりではあるまいが、映畫に關する記事が多くなつて、いさゝか映畫研究號の觀もないではない。併し映畫は、瀧口氏も論じてゐられるやうに、精神分析學と共に、近代の特種な産物であるから、この二者の關係に就いては、特に一號を擧げて研究するだけの意義はあると思つてゐる。今後も映畫には相當の關心を拂つて行きたいと思つてゐる。

×

『白い友情』の内容は精神病醫自身の變態心理を取扱つた皮肉なもので、その點本號の特輯題目とも聯關がある。この映畫は恐らく一般に十分に理解せられないだらうと思つてゐたら、果して十月十九日の『日々新聞』には『錯綜多角の戀愛關係は見る者を疲らせる』と惡評してゐる。觀衆よ、まづ本誌の合評を讀んで後に見られよ！

×

例に依つて新執筆者を御紹介します。

瀧口修造氏はシュール・レアリスム研究家として著書もあり知名の方である。目下はPCLに關係しつゝ映畫界にその新鋭の才幹を振つてゐられる。

狩野三郎氏はわが國繪畫史上の名流狩野家の末裔で禪門に修道せられた方であります。目下京都紫野大仙院にあつて研究してゐられます。

「感想と經驗」欄に寄稿の方々は知名の方々ばかりですから改まつて御紹介にも及びますまい。

諸岡、早坂兩博士には、久しぶりの執筆を感謝します。

×

岩倉具榮氏の處女作譯書『理想の家族』の出版記念者が、十月廿五日夜、大阪ビル地階レインボー・グリルで催されます盛會ならむことを只今祈つてゐます。

×

も一つお芽出たいことを御報告いたす

ならば、本誌に毎號トルストイ論を譯してゐられる平塚義角氏がこの十一月三日明治節の佳日を期して結婚せられます。結婚しても譯筆を弛ませるやうなことは編輯員がさせませんから御安心下さい。

×

大槻氏新著「戀愛性慾の心理とその分析處置法」は豫告より少し遲れるかも知れません。何しろ力作でありますから。（以上編輯委員）

×

今度の「名映畫分析鑑賞と講演の會」は、あの通りの反響を呼び、且つ極めて地味な研究會の集ひとしては確かに盛會だつたと思ひます。同時にあれを一つの機會として豫想通りの共鳴者が多數參加し、日本に於ける一番前衞的な精神分析運動への飛躍をまねいたのは、何をおいてもの滿足であつたと考へてゐます。

それは研究所員一同の奮闘の結果とは云へ、又、チラシにお援助下さつたライオン齒磨本舗と、春陽堂、大和護謨製作所の方々、ポスターにはれやか本舗のお厚志、又、プログラムに、第一書房、紀伊國屋書店、同文館、藤井療法院の方々の少なからぬ御配慮にもよることで、その點を誌上で深謝申し上げる次第でございます。

それにしましても、當日までに「パンフレット」を發行し皆樣に差し上げるべき筈の所思はぬ多忙や多事多端の重複した爲めにその意を得ず誠に申し譯ございませんでした、この點大方の、特に御寄稿下さつた諸先生の御海容を希ふ次第でござゐます。（辻修記）

昭和十年十月二十五日印刷
昭和十年十一月一日發行
（隔月刊） 定價 五十錢（郵稅四錢）
編輯及發行 東京市本郷區駒込動坂町三二七 大槻憲二
印刷所 東京市牛込區改代町廿四 理想社印刷所
定價一部 五拾錢（郵稅四錢）
半年分 一圓五十錢（送料共）
一年分 三圓（送料共）

御注文規定
●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
●郵券代用の場合は一割增に願ひます。
●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所 東京市本郷區駒込動坂町三二七 東京精神分析學研究所 振替口座東京七八八一七番
大賣捌所 東京堂・東海堂・大東館 北隆館・（大阪）福音社

J・アーサー・フィンドレイ原著
法學博士 高窪喜八郎
明大教授 高窪靜江 共譯

科學的實證 靈魂不滅論

―英國に於て五十餘版を重ねた世界的問題の權威書―

四六版布裝美本 三八〇頁
定價壹圓五十錢 送料十二錢

初版二千部忽ち賣切れ

譯者序文の一節に曰く『本書は、所謂妖怪變化の、他愛のない物語ではない。たゞ物珍らしい心靈現象の紹介に止つて居るものでもない。本書は人生に於ける物質の意義を說き、人格の價値を說き、愛の尊さを說き、結局眞の人生觀を確立すべき根抵を與へて居る。』と、誠に此書は心靈現象の一である直接談話現象を資料としてエーテルの波動の理論を以て科學的に靈界の實在を說いたものであつて、吾人の有限的肉體は所詮永遠性の人格愛情によつて意義づけられ、この見えざるものこそ眞の實在であると述べてゐる。著者が常に死せる近親者や友人等と談話を交す心靈體驗などは實に驚異的現象である。去りながら本書は著者が心靈作用の實驗による驚異的現象の紹介を目的とするものではない、之によつて宇宙と靈界の驚異を知り、以て人間本然の使命を認識し眞の人生觀を確立する事にあるのである、敢へて讀者に推薦する所以も之に外ならない。文章は平易にして名文であり、その述ぶるところ興味津々として一氣に讀了したくなる。

東京市小石川區竹早町三五
モナス
振替東京六三八五四
電話小石川五四四六

次號内容豫告

性格改造研究號

歐洲に於ける精神分析學界の最近の興味は性格研究にあると云はれてゐます。精神分析は、云はゞ性格改造學であるとも考へられます。凡そ精神分析を學んでその性格に一大變化を及さない者が一人でもゐるでせうか。我々は我々の性格の依つて來る所以を知り、明朗心を以て現實に處するの道を知らねばなりますまい。

クレチメルの性格學と精神分析……………石井佐太郎
性格學としての精神分析學…大槻憲二
尿道性格について……………高水力太郎
肛門加虐性格に就いて………高橋鐵
分析心理學と教育(ユンク)………宮田齊譯
ゲーテとフロイド(ギッテルス)…武田忠哉
オニールの思想と精神分析…山口太郎
ロレンス作「太陽」(完)………岩倉具榮譯
トルストイの分析研究………平塚義角譯
姓名の精神分析………………奥本島田

フロイド先生
額面用肖像頒布

昭和八年春にフロイド喜壽祝祭劇を當研究所が公演しました際に、フロイド博士から本研究所に寄贈せられました大肖像畫を縮寫して、讀者諸賢にお頒ちします。その鋭い眼光と、高邁な額と、力强い鼻梁とに於いて、よく碩學の性格とその學風とが象徴されてゐます。

品種——寫眞(シュムツァー原作畫。立派なものであることを信じて下さい)
用紙——上質寫眞用紙
大きさ——縱九寸五分、横七寸五分
代價——一圓五十錢(送料共)但し特別誌友には一割引いたします。
注意——額に入れる際、裏面に新聞紙を挿入しますと印刷インキがしみて黄色くなります御注意下さい。

隔月刊雜誌
定價五十錢
送料二錢

半年　一圓五十錢
一年　三圓
送料ナシ

昭和十年五月六月　**自殺及び情死の心理**　第三卷第三號

東京精神分析學研究所出版部　本鄉區動坂町三二七　振替・東京七八八一七一番

新演劇　十一月號　要目

戯曲

新人劇作家の抱負を語る

戯曲時評

劇評

發行所　東京市豐島區西巣鴨二丁目一九六九　演劇研究社
振替東京七〇四九九
定價四十錢

唯物論研究會機關誌

唯物論研究

十一月號

定價五拾錢 送料壹錢五厘

唯物論研究會

東京市麴町區内幸町一ノ三（東北ビル）
振替東京一八一五一七番

アメリカ文學の移植されたこと既に久しいが、我國に於てはその全貌を傳へたものは未だ一冊も無い。本書は、現代アメリカ文學の實相を傳ふると共に其の由來する所を、或は歷史的、地理的關係から、或は民族的、時代的、社會的關係から觀察して、其の全貌を傳へ、以て新しい文學に對する視野を開かしめ、アメリカ文化の眞相を把握せしめると共に、他面一般文學の新研究法を說いた懇切有益な案內書である。附錄の「**アメリカ文學研究書目**」は、堂々五十頁に亙る詳細なもので研究者にとつて、貴重な參考書目である。

西脇順三郎氏評……本書は學究的研究を出來るだけ通俗化し初學者にも良く理解されるやうに紹介されてゐる。通讀後私の感じたことの一つは同教授の溫厚な人格にはうふつとして接することが出來たことである。本書は著者の學究的態度を正直に表はしてゐると同時に著者自身のアメリカ滯在の實際的追憶に充ちてることが世間によくあるやうな無味乾燥な文學史と異つて生々とした印象を與へてくれる。（東京朝日ブック・レヴュウより轉載）

早稲田大學教授 本間久雄著

文學概論

（三十一版）

定價三・二〇
送料二二

慶大教授
廣瀨哲士著

新フランス文学

ナチュリスムよりシュルレアリスム

最近約三十年間におけるフランス文壇の動きは、目まぐるしい位、潑剌として生氣ある變化を示してゐる。本書はこの「五月の太陽を浴びた庭」にも譬ふべき新フランス文學の概況とその過程を示した書で、全篇を、《詩》《劇》、《小說》、《評論》の四章に大別してナチュリスムよりシュルレアリスムに至る作家の傾向及び作品を紹介してゐる。英文學研究者と雖も今日の時代では本書に盛られた位の知識を必要とするであらう。

菊判三六〇頁上製
定價二・五〇
送料二二

東京麹町九段下
東京堂
振替東京二七〇番

昭和八年七月七日 第三種郵便物認可

十一・十二月號

定價 金五十錢

III. Jahrgang, Heft 6, Nov.-Dez., 1935. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse.“

(Sonderheft für Normen-und Abnormensexualpsychologie)

Inhalt

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag

327, Dozakacho, Hongo-ku Tokio Nippon.